

第三章 印度の疆界戦

第十九世紀の後半に於て最も赫々たる戦争を求むれば、印度の疆界戦の如き亦一指を屈すべき者なり。余の赫々と謂へるは勇氣精悍、軍資の特絶を指す。然れども世人の諒とすべき成功の見るべき者なきが故に甚だ人に知られざるなり。而して此戦争に加はりし將士と之を報導せし通信員等の怨言する所は、聲聞實に過ぎたる主將の武略が世界に知られ勳位褒賞を得たるに拘らず、有功の戦士が等閑に付せられたるにあり。

一八九五年七年八年に亘れる北印度の事件は茲に詳述するを得ざるのみならず、戦闘の概略をも叙述するの餘地なきが故に姑らく其中に就て重要なる事實を擇んで之を録するに若かず。即ち疆界戦の發端これなり。蓋しサトラルのメタリを希望せし者が機位の争をなせしことは禍の由つて來れる所なるが、若し英

國が之に干與せざりしならば多數の健兒を失はざりしならん。印度政府も亦之が爲めに數百萬磅の金を消費せざりしならん。

印度の西北疆界は吾人の甚だ審かにせざる所にして、余と雖近日までは未だ十分に解せざりしなり。吾人は只英領印度が北の方アフガニスタンと最近得たる露西亞領とに接し、英領印度とアフガニスタン及び舊露領との間にはヒンドクシ及ビヒマラヤ山脈あつて殆ど交通を杜絶するを知るのみ。

ブンデュープは北印度の大國にして、東北には自らマハラヂヤを戴けるカシミルあり。北及び西に連なれる山谷に住せる人民は猛勇なる部落にして、聰慧なるが上に格闘に長じ、アフガニスタンのアミールに屈せざるのみか、未だ曾つて印度何れの君主にも服従せし事あらず。彼等の通稱をバザンと云ふ。これ尙蘇格蘭の山民がハイランダルと呼ばるゝが如し。バザンも亦ハイランダルと均しく種々の部族に分れ、アフリディス、スワタイス、マーモンド、オサカイス、ハンデ、チトラリス等の別あり。其部族中或は尙細別をなす者あり。即ちアフリディスの如きは分れて八族となり、彼等は各、封建割據の勢を成し、共同の敵に遇ふ時は連合して之に當る。こ

れ故にデーダブル・ステーション氏は其著「印度」と題する小冊子の開卷第一に疆界戦の事を叙して此争に論及せり。

バザンは盡く回教徒となりしも同一の宗派に屬せず。此種族中最も威力ある者をミラーとなし神聖なる人々なるが、これ或る方法に困つて特別なる尊嚴の地位を得たるならん。今日より殆ど十年前余は或る文字を讀みたるが、右は印度政府がスワットのアルカンドに就て感じたる危険を諧謔的に叙したるものなり。スワットのアルカンドは誰なるや、即ちこのミラーの一に外ならず。英國は既往六

年間に於て彼と其従者と共に熟する機會に富めり。今や英國は其胸中露國に對する妬心を藏し、印度アフガニスタンに科學的の疆界を設定するや、其勢力範圍を山族に及ぼし、疆界に沿ふて英國の門戸を立つる事を以て其義務となせり。チトラル人の國はアフガニスタンに對して形勢固塞、只彼等自己の通路を有するのみにして、如何なる軍隊と雖、大砲輜重兵器を運送するを得ず。其首府をチトラルと云ふ。チトラルの要塞は河岸に在り、位置最も悪しく邱陵の上より自由に下瞰するを得るなり。

チトラル人は格闘に長じ、騎馬に雄に、水泳に堪へ、打球及び舞蹈を好み。其國は大山四周、其溪谷には花果充實せり。チトラルの君主をメターと云ひ、その眷族と共に要塞の中に住せり。一九八二年大メータルなるアマン・アル・マルク没せしが、チトラルの君主は有史以來未だ其天壽を全うせしものあるを聞かず。アマン・アル・マルクの如きも亦刺客の害に遇へるなり。但し彼は生前人民の尊敬を得る事深く、在位亦多年に互れり。其子は頗る多數なりしが、大抵その母を異にせる猶フリシアのプリアムの如し。而して父に代つてメターを繼ぐに足るべき王系に屬する者四人あり。ニザム、アフザル、アマール、シューチャ。これなり。就中シューチャは尙幼童なりき。アマン・アル・マルクの死せし時、長子ニザムは英領印度遊歴中なりしかば、其弟アフザル其不在に乗じてメターの位を奪へり。是に於てニザルはチトラルの東二百二十哩の處にあるギルジットに保護を求めしが、此處には英國の守備隊を督する武官あり。アフザルは二弟のアマル、シューチャが一は怯弱一は幼孩なるを以て復た畏るゝに足らず。されど其叔父シャル・アフザルを憚らざる能はず。シャル・アフザルは之より先き亡命してカバルの朝廷に在りしが、茲に至り突然チトラル

に歸り、夜に乗じて竊に城中に入らんとし、衛士は之を拒めり。アフザルは鬭争の聲を聞き、室内より出て來りしに、叔父の爲めに其背部を銃撃せられ、シャルアフザル自立して君となれり。然るにシャルアフザルがカバルより來着すると同時に、ニザム亦ギルジットより來り、シャルアフザルは兵士を徵集し、之を拒がんとせしに、兵士は反てニザムに歸せしかば、シャルアフザル復びチトラルを亡命するに至れり。ニザムは人となり、修養あり、英國政府と親密を保ちしかば、英國は以前乃父に於けると同じく保護を與へんと欲し、これに使を送れり。然るに人民の思想は君主が英領印度にて受けたる文明思想と相容れず、ニザムの出獵に際し、其弟アマルは從者を率ゐて之を銃殺せり。

アマルの弑虐は隣邦ヂャントルのウムラガンの教唆に出でたるが如し。ウムラカンはアマルの婦翁なるが、アマルを傀儡として自らチトラルの君たらんとするの野心を抱きたるなり。

ウムラカンは恐るべき會長なり。其風貌優美にして卓越なる才能を有す。ニザムの殺されたる當時、英國の官吏はチトラルに在り、八人のシクに護衛せられしが、

アマルは英國政府が己れの王位に即くの權利を認むべき事を主張せしに、中尉ガルドンは之を拒み、若しアマルが書簡を差し出さば、ギルジットに駐在の上官に向け此問題を具申すべしと言ひ送りしに、アマル之を欲せざりき。是に於てガルドンは纂立のメタを認むるの權利なしとて其説を改めず。

已にして事體漸く迫り、ガルドンは八人のシクを従へて壘壁を攻めんとするに際し、己れの衛士なる五十人のシクは援兵として來り會せり。此兵士はガルドンが初め危険を豫想せざりし爲め、チトラルを隔つる六十五哩のマスターダに留め置きたるものなり。此時に方りチトラル人は激昂して狂するが如く、ガルドンの沈着冷靜を以てせしにあらざれば、生命の無事を得ざりしならん。アマルは力窮つて援を婦翁ウムラカンに求めたり。これウムラカンの竊に望みし所なり。

ギルジット(カシミール北方の門戸)の英國代官ロバートストン氏はチトラルの變を聞き、二百八十人のカシミール歩隊を率ゐてチトラルに進み、中尉ハルレー又三十三人のシクを率ゐ、ペールド大尉キムベル大尉及びドクトル、フィットチャルチ等亦隨行せり。

ロバート・ストン氏はガルドンの上官としてウムラカンに書を送り、チトラルを去り其國チャンドルに歸るべき事を命ぜり。チトラルの富民は英國に糧食を給し又八十人のチトラル人と共に壘壁を攻めたり。英國の宣言する所はアマルを逆賊として其位を廢し、シューヂヤをメターとなすに在り。而して此二人は俱に壘中に在りしと雖、シューヂヤは監禁の身なりき。

シャル・アフザルは忽ちカバルより還りウムラカンに合せり。五月末に報あつて云ふ、チトラルの壘壁は攻圍を被るべしと。英兵は偵察隊を派遣するに決したるがこれ甚だ失計を免れざりし者なり。偵察隊は從來經驗なき二百人のカシミル歩兵、少數のシク病院の助手擔架夫等より成り、大尉キムベル之を總べ、大尉ペールド、中尉タウンゼンド、ガルドン及びフット・チャルチ之に従ひ、バルレーと其シクとは留つて壘壁を守れり。此小隊伍の中に白人は僅に六人を出てず。

偵察隊は不幸に遭遇せり。チトラル人とチャンドル人とは武備を整へ丘上より彼等の四周を圍み、其陣列頗る固く、ペールド先づ打倒され、フット・チャルチ走つて其側に至り傷を檢せしに致命症なりしが、印度の轎に載せて後送し、尋て兩軍奮戦

せし處、敵は要害に據り胸壁の後に匿るゝも、我兵は何等の據る所なく、且つ援兵を有せざりしかば、英兵の主將は退却の外取るべき途なしとせり。キムベル大尉は膝に傷を負ひしも復び戰場に加はらんと、扶けて馬に乗せしめよと叫んで止まず。土人の看護員は交、之を諫めし折柄一彈丸は其頭を貫きキムベル大尉の馬側に僵れ死せり。今や偵察隊は退却に及び壘壁を距る二哩の所に在り。チトラルの村に達せし時は昏黒となりぬ。土人は初より勝者に就かんとて形勢を觀望せし事なれば、今其退却を見るや直ちに敵となれり。ロバート・ストン氏はハルレーのミクを助にせんが爲め只一騎壘壁に馳せ、其間彈丸を放つ者あり、棍棒を以て迫る者あり、石を投する者ありしが、幸にして微傷を負はず、壘壁に近づくや呼んで曰く、五十人のシクは退却を庇護すべしと。豫て準備をなし居りたる事とてハルレーは之を率ゐて壘門より突出せり。

ガルドンの騎從に關し慘話あり。彼は壘中よりガルドンの馬を牽き出ださしめガルドンに授けたる處、ガルドンが乗るを肯せず、之を他處に引去る間に銃撃に遇ふて死せり。

偵察隊は盡く壘中に在り、茲に至て疑問は起れり。ペールドは何れの處に在りや、フイットチャルチは何れの處に在りやと。

ペールドは來らずしてフイットチャルチは所在を失ひ、キムベルは負傷の爲めに人事不省に陥り、傷者は皆フイットチャルチを待たざるなし。

ペールドは最も人に愛好せられたるが、これ其寛裕にして信切なりしが爲めなり。

醫師フイットチャルチ、カシミール兵十二人、擔架夫四人より彼れる病院隊は驕の爲めに阻滯して後れたる處、日暮に近づきて路を失ひ、彼等は皆以爲らく、前途はなほ戦闘中なりと。是に於て一人叫んで言ふ者あり、曰く、壘壁に達するには更に通路あり、迂遠は則ち迂遠なりと雖三哩の迂路に過ぎずと。

ペールドは微弱なる聲を發して醫師に言へり。

余は君を妨ぐるに過ぎず、余は最早望なし。願はくは余を捨て、去れ、君は自己と諸子との安全を謀るべし。

何言ぞ、吾人は負傷せる長官を路傍に棄て、己れの安全を謀るに忍びんや。

擔架夫の一人は曰く、大人よ、吾人は河岸の路を取らんのみと、何人もペールドを棄するの心なし。

敵は直ちに此一行を發見し、次第次第に之を殺せしが、一人の擔架夫の殺さるゝや一人の兵は一語をも發せず直ちに之に代はれり。

竟に一行は殆ど殺し盡され、最早擔架を運する者あらず。印度兵は復た戦ふ心なかりしかば醫師は腕を以てペールドの腰を擁し擔架より之を起せり。

フイットチャルチ、余は君に抗辯す、フイットチャルチ、君は狂氣せるか、願はくば君自ら免れよ、余を捨て置け、余を捨て置けよと。

然れども此醫師はペールドを遺棄せずして全力を盡し之を伴ひしが、暗中惡路を過ぎ身も亦敵彈の爲に足趾を傷けしが、竟に壘壁に達せり。壘門は直ちに開かれ、彼等は跟蹤として中に入れり。

これフイットチャルチがヴィクトリアクロスを得るの名譽ありし所以なり。

ペールドが死に臨みロバートストーン氏に向ひ事の顛末を報ぜし時に、これより見事に成功せし者あらずと云へり。

これより壘壁は圍を受くる事四十二日、敵は壁中に發銃し苟も其身を壁上に現はす者は一々打倒され時計臺も殆ど其兵火に罹らんとし、衛兵の用水を引ける筈道も大半破壊する所となれり。

壘中の者は皆援兵の來るべき事を知れり、而して英國將校の信用とシクの膽略とは人々をして援兵の確實なるを信ぜしめたるが唯其果して時に及ぶべきや否は疑問なり、此時に當り守者の糧食は一日僅に半日分を給するに過ぎざりし故、瘦せ衰へて目も窪み、シクの爲めに蓄へたる少量のラム酒ありしのみ、將校は曰く、勇士よ之を享くるに足れりと、而してカシミルの歩兵には二日毎に茶を與へたり。

英國の將校は攻圍を受けたる初期より其馬を殺して之を鹽漬になしたるも、シクは斯くの如きを食物とするに堪へず、粉と水を以て製せる菓子を食として少しも不平を訴へず、各其擔當の位地に就けり。

已にして敵は國內の涼亭を占領せしが右は壘壁を距る八十ヤードの處に在り、兩日兩夜或は大呼し、或は銅鑼を打つて騷擾を極めたりければ、壘中の者は疑つ

て以爲らく、これ敵が地道を作り、其工事なすに方つて斧鑿の音を聞えざらしむるが爲めに、他の音響を以て之を亂るにあらざるなきを得んやと、ハルレーと其シクとは壘中より穴を鑿ち敵の工夫を逐ひて、地道に入つて之を爆發せり、一説には彼等が地道へ入りし後偶然爆發したる者なりと、幸にして彼等は之が爲めに害を受けざりき。

其次の夜は寂寞として喊聲絶え鑼聲止みたるが、半夜壘外に聲あり、新報、新報緊要なる新報と云ふを聞けり。

然るに或は敵の計略ならんかと疑ひ、暫時の間は報知の齋らせる使者を壘中に入るゝを躊躇せしも、究極其真物なるを知り、驚喜措く所を知らざりしが、稍平靜に反るや一將校は叫んで曰く、余は善き會食を勸むとて、一般の者に二倍の食料を給したり。

救援に來れるは大尉ケーリーにして、雪深き連山を踰えギルジットより二百二十五哩を星馳し、其率ゐたる者は精銳なる自己のシクと第三十二個工兵隊と、其外五百人の召募兵にして、カシミル山砲隊の大砲二門を携へたり、これより三年前

英國はカシミルに密通せる山國の住民ハンザと戦ひし事あり。其後ハンザは英國に服従せしと雖、之を救援隊に應ぜしむる事は望むべからざるに似たり。然れども試に之を彼等に謀りたる處、其首相は二千人の兵を率ゐ二週間の糧食を携へてギルジットに來會せしのみならず、他の山族ビニアルのラヂャも多數の部下に將として來會せり。此人民は輕捷なる事猫の如く、健脚なる事山羊に似たる者なり。又ハンザは髮薄く眼碧なる人種にして、昔歷山が大軍を以てブルヂャプに入りし時留め置きたる兵卒の子孫なりと稱す。

余は此進軍の始末を詳述する能はざるが故に、其の中要を擧ぐるに止めんとす。彼等のシャンガ山路に達するや、大砲を牽きたる騾馬は積雪に身を没し、背重の爲め更に一步を進む能はず。

一將校は曰く、騾馬は決して斯くの如くならざるべしと。

騾夫は答へて曰く、大人よ、騾馬には能はざるなりと。然るに大砲なくして進むは愚と云ふよりも寧ろ危険なり。蓋し高地より敵を撃ち、敵の射手を逐ふは大砲の力に倚るの外途なければなり。

大砲を欠かば此行は殆ど望なかるべし、而してチトラルの成兵は恐らく危急なるべし。

然れども工兵は其大尉の顔色を見て其憂慮に堪えざるを知れり。

其一人は同聲に謂つて曰く、余等は、大砲なくして進むべからずと。

シクの兵士は寂として言なし。純粹節操、慈惠は此種族の格言にして、苟も其機に臨むときは堅忍不屈の勇氣を生ず。

同胞よ、吾人は大砲を運する能はざるかと、暫時の間人々沈黙の後、決心の聲は起れり。曰く、若し主將大人の許可を得ば之を運ばんと。

突嗟にして實行に着手し、其土人の官吏を求めて之に心事を訴へ、總代は陳べて曰く、余等の爲めに大砲を運ぶの許可を主將大人に請へと。其使のケリー大尉に達せし時カシミル歩隊の一武官も亦來つて其部下が此難事に當らんと欲する事を告げたり。

ケリー大尉は之が爲めに意を動かし、其恨は輝けり。答へて云ふ、彼等に告げよ、余は之を謝すと。

翌日は衆皆勿忙を極め、且つ喜び、且つ奮つて其勞に服せしが、其困難は言語に絶せり。殊に其翌日山路の最も峻險なる處に達せし時は雪の深さ三尺に及び、豫定の宿陣地に到らざるに天已に晩れ、此日の行程は僅に五哩に止まれり。

翌日は寒氣烈しく風力又強く、一行は雪を排して進みしも弱視又は凍傷に罹りし者少からず。

天色は漸く暗黒に向ひ、兵士は疲勞の極或は滑り或は倒れしかば、將校は其夜或は雪中に宿せざるべからかを恐れたるに、忽ち前哨より叫聲を聞けり。即ち意外にも山頂に達し降路は稍容易ならんとす。

此時に至るまで救援軍は一回も戦はざりしなり。敵は天然なりしなり。ウムラカンは英人とシクが斯くの如き天候に斯くの如き絶險を踰えて來る事を夢にだも想はざりしなり。

一行の山路を過ぐるや難局は終れり。彼等は何の抵抗もなく進行し、マスターズの壘壁を救ひしが、此處はチトラルより二日程にして、中尉モーペリーは少數の者と共に圍中に在り。

チトラルを攻圍せる敵はマスターズの圍解けたるを聞いて潰散し、ケリー大尉の一軍到着するや、シェーヂはメターの位を認められ、その弟アマールは囚はれて印度に送られぬ。又ウムラカンは會つてチトラルの援軍に屬せし英の一武官が其手に落ちし時、頗る寛容の處置をなせしに拘らず、其所領を奪はれたり。他の救援軍は將軍ガタクル之を率ゐる西方よりマラカンド山路を過ぎて來れるが、此山路は從來白人の兵士が未だ敢て通過せざりし者なり。

此地の土人は一八九七年侵入の敵を撃退するが爲めに、惡戦をなしたる種族なるが、今チトラルを救ふべき目的を以て英人が此山路を冒進せしを見て大に不快を感じ、而して此山路を過ぎたる救援軍はケリーの如く速に目的地に達せざりき。將軍ガタクルは到着より數日の後、ガルテンの壘壁に建てたる新墳に埋葬式を擧げたるが、此中にはペールド大尉の遺骸を埋めたる處あり。一武官は之が爲めに石碑を建て、且つ其死亡の事實を手刻せり。已にしてシク及びカシミル歩隊には定額の外特に六ヶ月の俸金を與へぬ。此回の功に因り、ロバートストーン氏はサー・ジョージ・ロバートストーンとなり、圍城の事を記したる一書を著はし、其他

の將校或は昇級し或は褒賞を得、グイクトリア・クロスはペールドが垂死の願の如く、醫師フットチャルチに授ける、事となれり。

一八九五年の夏より一八九七年の夏に至るまで疆界は殆ど無事なりき。一八九七年五月十日ワーバルトン大尉(サー・ロバート・ワーバルトン)がベッシュワールを去るに方り、アフリディの諸酋長及び有力者は其行を送らんが爲め停車場に來集せしが、これ十八年間氏が彼等の間に在りしを以てなり。

大尉ワーバルトンは何人ぞや、余の氏を知りたるは氏の著はせし、カイバールの十八年に困れり。此書は其死後マルレットの公刊せる所にして一九〇〇年に在り。然れども余は一八九三年有名の旅行家にして通信員なるスベンサー・ウィルキンソン氏の彼に關する話に轉すべきが、豫め一言すべきはヒンド・クシを通ずる重要な路はカイバルとマラカンドなる事なり。之を外にしてはアフガニスタンより來れる山羊の路、此處彼處に在り。其一はチトラルに達す。ウィルキンソン氏は云ふ。

貿易に堪へたる唯一の路はカイバルに由らざるを得ず。而してベッシュワールは印

度と中央亞細亞との間に於ける一切通商の市場なり。

デララバッドはアフガニスタン君主に屬し、ベッシュワールは英國に屬するも、カイバルの山區は此處に住する部落に屬す。これ獨立のアフガンにして方言にてバサンと呼ぶ者なり。此カイバルのバサンは確の地より僅少の穀類を得て食となすに過ぎず。即ち之のみにては生活する能はざれば更に他の利源を求むるの必要あり。而して別途の収入はカイバル山路に外ならず。彼等は夙にカイバルの行旅より通行税を取り來れるが、其起源は遠くして知るべからず。彼等の貧窮なる野蠻なる格闘に慣れたる、自ら其正當となす所の路税を課するに當り、從來疎暴にして且つ不規則なりき。然れども彼等より之を觀れば此税たる因襲にして讓與すべからざる權利なり。而して彼等は又商法的の人種なりしかば、路税を契約に因つて定額となすの方法に出で、最初のアフガン戦争の時英國より路税の代として租借錢を取れり。但し其欺かれたる時に至り頗る葛藤を生ぜしのみ。最後のアフガン戦争終るや再び英國と規約する所あり。各部落は年々英國より租借賃を受け、其條件として一週の中日數を限り特許

を有する旅客に向つて山路を公開せり。輒近に及び更に一種の方案により英國と各部落との關係は益、圓滑に赴きしが、此方案は他なし、カイバル歩兵と名づけたる軍隊を部落中より徴收し、道路公開の日に於て商隊及び旅人を保護せしむる事なり。而して之に與ふる賃錢は自ら村落の利益となりしが故に、住民は次第に英國を尊敬するに至れり。此規約は多年ワイバルトンの權内に在りし者にて、氏の官稱は、カイバル山路の政務官これなり。氏は部落の會計官の如くなりしかば、部落の之を視るや半王の觀あり。氏は其争訟を判じ、其術數と聲望とにより一千方哩の廣きカイバルの疆界を治めて稍宜しきを得たり。但し英國のカイバル租借錢及びカイバル歩兵の給料とワイバルトンの俸金とを併せて一年費す所一萬磅を出てざりき。

ワイバルトン大尉は非常なる難局に處して終始堂々たる正人なる事を失はざりき。大尉は英國の良家に生れ父は官吏たり、一八四一年カバルの大厄に先きだつてアフガン上流の女子を娶りしが、此女子はドスト・モハメッドの親族なり。又婚禮の立合人となりし人はサイ・アレキサンダー・バルネスあり。大尉ストリート

あり。大尉デキンスあり。然るに英人がカバルより逐はるゝや、大尉婦人の諸親族は大に怒りて其夫の住宅を焼き、アクバル・カンの兵士は數ヶ月の間夫人の所在を搜索せり。ワイバルトンは言へり、神は吾母を庇せり。而して一八四二年一子を擧げたるが即ち不肖これなりと。

ワイバルトン大尉は完全なる英國の紳士にして、アフガン及びアフリディスの同盟を得、其個人的威力の大なる歐人が亞細亞人に對して未だ會つて有せざりし所なり。

此山族の政治はブンヂャブ知事の有する所にして、印度中央政府の管轄にあらず。ワイバルトン大尉は以爲らく、山族をして一英官の下に屬せしむるの有益なるに若かず。何となれば己れの意に従て之を治むるを得ればなりと。己にして氏はブンヂャブ政府に向つて英人の補佐を置くべき事を請求し、己れは之を訓練して他日わが任期の盡くる時に當り之を以て後繼者となすべき意あり。然れどもブンヂャブ政府は増費の點より之を喜ばざりしのみならず、其人物も亦之を得るに難かりき。これ英國の紳士より之を觀れば、ベンジャミンに駐在することは殆ど左遷

に同じければなり。ベシウーは八千人の土民之に住し、熱鬧なる商業地なり。英人と其軍隊とは市を距る二哩許の兵舎に寓し、此處より數哩にしてヒンドクシンの山脈に達す。

一八九七年五月、ワーバルトンがベシウーを去りし時、アフリッドは何等の疾苦を訴へざりしが、瑣細の事に就き、微少の不平は固より之れありしなり。但し未だ叛亂を醸すに至らず。然るに八月に至り、諸部落は交亂を作せしが、其原因は凡て同一なりき。

一八九六年より翌年に亘り、英國の諸新聞は土帝とコンスタンティノールの殺害に就て熱罵を極めざるなかりしが、現在土帝は決して正當なる教主にあらず。而して回教界の大部分も亦敢て土帝を以て教主と視做さざるなり。然れども該教の一部に屬し、自らサンナイトと稱する者は尙土帝を以て信仰の防衛者となし、土帝は回教の大君主なり、最重の大人物なる事を失はず。アフガニスタンは所謂天與の國にして、南亞細亞に於ける回教の外廓とも謂ふべき者なり。其君長より人民に及ぶまで皆、サンナイトにあらざるはなく、英國が土帝に禍を被らすや、

多數の回教徒は之が爲めに心中憤怒に堪へずして、窃に報復を圖れり。蓋し英國の侵さるべき處は其最も損害を感ずべき所なり。

勿論ベシウーの族民は英國議院の論ずる所と英國新聞の言ふ所を聞知せざりしと雖、政治的傳道師が其心を煽動し、神聖戰爭を奨諭せる時に方りては固より英國の言論を彼等に示す事なしとせず。

アフガニスタンの君主も斯くの如き使節を受けたるが、直ちに其信徒なる著名のミーラーを召集して、此使節と會見せしめ、之に告ぐるに、各自國に歸つて神聖戰爭を勸諭すべく、之と同時に豫備兵を編成して、機會に應ずべき事を以てし、君主亦自ら宸翰を發し、併せて雜誌を頒布し、以て同上の手段に供せり。

山族の中三種の恐るべきミーラー(神聖なる人、大抵は僧徒あり。是等は特に尊敬を受くる者なるが、其一是セイヤッド・アブカルとて、朴素なる僧院の傍なる絶景の谷中に住す。此僧院はアフリディ七族の會場なり。其一をチャロビのハダ・ミーラーとなし、又其一をスワットのマッド・ファーカルとなす。此中セイヤッド・アブカルは卑俗にして多慾なりし爲め、最も人を服するに足らず。ハダ・ミーラーは閉靜なる生活をな

し其淨潔なるより深く尊信せられ、マッド・ミューラーはスワットのアルカンドの繼嗣なるが狂妄の人なり。此三ミューラーは各、其兵を起し、一軍の中に少なくとも一千五百のミューラーあつて神聖戦争を鼓舞せり。此時に方り土耳其が異教者と闘ひ、終に其國に攻め入り勝利を得たりとの報は遍く傳はれり。茲に謂ふ所の異教者とは即ち希臘人の事なるが、世界の僻地に住する無智の山族の事なれば固より臘の取るに足らざる事を知る者あらず。彼等は只モハメットの衆兒が不信者に勝希てりとして満足せり。知らず、若しアララにして彼を助けたらんには、彼等は果して此勝利を復する事を得べき否や。

山族の軍はミューラーに従つて疆界に在る英人の所在地を襲つて之を焼き、英人も亦其軍隊を召集せり。

英兵の初めて向ひし所の者はマーモンドにして、此戦は六ヶ月に互り、英兵は極熱の爲めに苦めり。マーモンドは遂に敗北を認めざるを得ずして敵の條件に服せしが、此條件の中には價銀、穀物及び三百挺の小銃を包含せり。然るに山族に取り此小銃は其妻より貴重なる者にして、實際彼等は一挺の小銃を購ふ價を以て

幾多の妻を購ふを得るなり。之を以て彼等は多年英國の陣營、前哨或は衛舎より小銃を盗むを以て國民的營業とし、頗る利益する所あり。これ近年山族の射手が甚だ恐るべき者となりし所以なり。

一八九七年の丘戦に於ては殆ど戦争と稱すべき者なく、只將卒人民が絶えず銃殺されし事あるのみ。マーモンドも亦バサンと同じく常に殺伐を事とせしより避難の要塞は全國に充滿し、其形は圓狀にして入口は最高層に在り。此處より繩梯子を下せり。避害の人民は此處に到るや否や直ちに樓上に躍り入り、速に梯子を引上げ、敵をして登るを得ざらしめ、然る後銃眼より彈丸を追兵に發射す。而して麵麩の如き肉の如きは皆婦人之を運べり。但しバサンは婦人を發銃することなければなり。

然れども戦争の大目的はテラーの遠征なり。

左に録する所は、ガゼットに載せたる命令書なり。

この出征の目的はベシニワー及びコーハットの疆界に住するアフリディ、オラクザイ族が故なくしてわが疆土の屯營を侵し英國官民の生命財産に加へたる損

害を賠償せしむるに在り。

而して此目的を達するにはテイラーを襲ふに若くはなしと信ず。但し此地はアフリッド及びオラクザイの夏居にして英兵の未だ曾つて入らざりし所なり。

一八九七年十月三萬二千挺の英軍はテイラーの谷に侵入す。此中一萬は英國兵にして餘はシク及びゴルカなり。テイラーの谷たる豊沃にして秀麗、其一部は回教の種族が「エデンの花園」と名づけし所なり。其周囲は連山環繞し、之が峰嶺は十月雪を被り、之が路蹊は氷の爲めに鎖ざるゝを以て、英軍はこの地に入るに先だつて已に天然と戦はざるを得ず。蓋し從來如何なる軍隊も此處に來りし事なきのみならず、白人の足跡も亦殆ど罕なり。英人は之を荒らすの目的を以て小舎を毀ち、住民の遺したる食糧を以て監督部を充たせしが、其秀麗なる景色と純潔なる空氣とは深く其心を引けり。而してミョーラー、セード、ドアカルの鉅費を據つて建築せし家屋も亦英人の破壊する所となり、其側の僧院の如き亦蹂躪を免れざりき。此僧院はアフリデーの諸會長が議事を開く時の會議場に供せし者なるが、セード、ドアカルの神聖戦争を説きしは即ち此僧院なりしかば、其重要なるは全く政

治上の性質に在り。この時彼は神秘の事を以て其徒を鼓舞せしと云ふ。其言に曰く、夢中に或る物語を開きしが、之に據れば某の地に昔より埋めし粘土の瓶あり。若しカファート戦争の夜間之を掘出し少しも破損してあらざりしならば、テイラーの寇は撃退するを得べしと。然るに敵は凡そセード、ドアカルに關係せる一切の物を焚毀せり。唯其スワットの谷に降りし時アルカンドの廟のみは頗る之を敬し、従軍の回教徒が其墓を拜するを許せり。蓋しアルカンドは非常に神聖なる人物と思惟せられたるに由るなり。

余は言ふ、シクは回教の信徒にあらず。又ヒンドの神をも崇拜せず。其宗教は回教と婆羅門教との折衷なり。彼等は一神を奉じ、神人の間に介存する豫言者の如き者なく、又偶像を用ひず、牛肉を食するとは大惡とせしも、其他の獸肉は之を喫せり。其教祖はラホーアのナンクにして一五〇〇年頃の人なり。又最後の教主ゴヴィンドは最も威力あり。一七〇八年に刺殺せられたり。彼は人に教ふるに迷信を避け、嚴肅の道德を守り、劍を以て生命となすべきを以てせり。其死後道德は全く廢頽せりと雖、彼等は尙ヒンドの清教徒たることを失はず。ステーション氏は云ふ、彼

等は清教徒より鐵腕となり、同様の熱心を以て祈禱し、戦闘し、終にブンチャブの主となり、ランヂェクト・シングの時は印度に於ける最大強國たり。ガフ卿とサー・チャー・ルズ・ナビエが之を攻めたる事は余の已に叙せし所なり。而して此戦争は今なほ余の記憶に存す。

英國人は彼等を征服せしと雖、常に其土人と親密を保ち、殊に其宗教には寛容をなし、尊敬を與へたり。

兵士叛亂英國に服せしより僅か十年の後の時は英人の爲めに頗る力を盡せり。これに就て言はんと欲する所はシクがコンドン及びシーフォルスの山民に従つて其戦闘に長ぜる事を見はし、世界中最も貴ぶべき兵士の一に列する事なり。タイラー攻撃の軍はシクと其他の兵とを問はず、寒氣の爲めに苦める事夥しく、殊にシクは從來未だ霜雪に遇ひたる事なきのみならず、其制服は寒氣を防ぐに足らず、而して山上より吹き降る烈風は膚を裂くが如く、其困難は將校及び通信員の記録に詳かなり。然れども是等の徒は天幕並に毛布を有し、凡そ其土地に於て得らるべき防寒の方法と器具とは概ね之を備へしなり。

英軍の中には多數のアフリッドありしも、彼等は戍兵として他處に送遣せられたり。彼等が自己の種族と遇ふや銃を委て、走るの癖あり。然れども其舊主に従ひたる者は甚だ忠實なりき。

戦争の最も善き梗概は一九九八年四月の布告にして、其終局を告げたる後に在り。

十月の初より一月の終に至るまで決戦に従事し、其間勇敢なる軍隊は未だ曾つて大なる勞苦を受けず、又強梁慄悍なる敵に遇はず。其寒氣濕氣を冒して進ひや、遠處より銃火を受け近傍より襲撃を被りしも、其哨兵線は高處に屯營したる兵士より保護を受けたるも、此哨兵は掩襲を被り易く、退却には紛擾に陥り易し。之を以て軍隊は毫も休息を得ず。何となれば敵は最も便利なる戰場を撰び、銃手を個々四方に散置し、最も精巧なる小銃を連發せしを以てなり。

サー・ロバート・ワーバルトンは軍隊の中に伍せり。これ他日敵が平和を請ふ時の方よりアフリディーに最も勢力を及ぼすべき人なる爲めにして、氏は歩行して軍に従へり。已にしてハッビー・ヴァーレーに起りたる大災害は氏をして痛心せしめたるが、

尙謂つて曰く、

タイラー戦争は英國の將校が其絶頂の能力を發揮せしめたる者にして、士兵及び印度兵に在つても亦然り。而して此戦は余をして深くアフリディーに對し尊敬の念を生ぜしめたり。而して戰士として尊敬するに止らず、又友人として尊敬するなりと。

夫れアフリディーが英國人との交誼を棄て、英國に對する役務より得る所の報酬と特權とを抛ち、恩讎地を易へかるは豈に悔恨すべき事にあらずや。蓋し彼等はミューラーの爲めに戦争に驅られたるなり。即ちミューラーは布告を發し、若し族中の者にして私に異教徒と條約をなす者あらば破門すべしとの事を以て之を脅せしなり。

英軍は已にタイラー谷を蹂躪し、十一月の末此處を去りスワット河の貫注せるベザ谷に降り、その溪流を徒渉するや氷水は膝を没せり。而してその戦は概ね後衛と敵の射手との間に起り、敵は最近の銃を有し丘陵の巖上に據つて我を狙撃せり。サー・ロックハート、ウェストマッコトの二將軍は會つて公言して曰く、平和の條件はタイ

ラーに至るまで之を宣言せざるべしと。冬を通して商議は交渉を重ねたるがその條件は甚だ酷ならず。英國の要せし所は五萬の印度銀と五百の後裝銃なりき。此戦をなすや、輜重の爲め一萬六千頭の駱駝、四萬二千の驢馬、一萬二千の牡牛を要せしを觀るときは、如何に其困難にして且つ鉅費なりしを知るに足らん。縱令英人はタイラー谷を荒涼に歸せしめたりとするも、なほ一事の利益を留めたり。何ぞや、工兵隊に屬する工夫と坑夫とを使役して坦々なる大道を作れり。蓋し戦争以前に在つては只山羊の通ずる小道ありしのみ。

平和の確定せしは一八九八年四月四日なり。アフガニスタンに面する山腹に通路の公開に及ぶや、白色の陣營と方形の堡壘とを現出し、壘の壁角には櫓あり、壁には銃眼あり、英國の旗は其上に翻々たるを見る。これはラング、ニュータルに在り、英領印度の極端なり。

此處には印度中最も聲望ある旅團長の下に、三個歩兵大隊と一個山砲兵中隊並に工兵あり、四圍の人民は大事に服従し、小事に遊戯せり。シンワリの村民は盡く親密なり。而して南方のアフリディーは將軍に服従し、其審判者となせり。その

慣例として土地の耕作に従事する時はデルガに會し、各一片の石を持して己れの前に置き暫く争鬪を停むるなり。然るにシルカイの戦後久しく銃を執らざるや、技癢に堪へざる餘り、サヒブ將軍に向つて同族間の争鬪を開かん事を請ひしに、將軍は之に謂つて曰く、第一着に争鬪を始めたる村落は之を破壊すべしと。彼等は之を聽いて悵然として去れり。然れども能く其命に従へり。彼等は小事に於てのみ唯其なさんと欲する所を行へり。其リーミットフォード及びマルライニスの大隊の眼前をも憚らず、小銃の竊盜を行ふ事の如きは殆ど想像の外に在り。即ち彼等の少年は暗夜に乗じて哨兵の居る處に潜行し、若し哨兵が睡眠中なるときは之を暗殺して其携ふる小銃を奪ひ去る事あり。(スチーヴン氏のアルフリッドは善戰を以て自ら誇るも戦終れば復た害心を有せず。其問題を視るの沈靜にして公平なる宛も球又はフートボールに於けるが如し。斯くの如き事情は果してフイリビノスに於て之を望むことを得べきか。

第四章 印度の疫病と饑饉

印度に於て多事を好み不平を抱いて英國の政治を受くるを屑とせざる二種の徒あり。一は狂熱なる回教信者より成り、異教徒の君臨するを惡む者(所謂異教徒は官府として其宗教を敬するに拘らず)、一は一知半解のヒンド・ペービーにして、彼は歐羅巴主義の假面を蒙る者なり。

更に又終始不平の絶えざる一都府あり。プーナこれなり。プーナはボムベイ省の高地に誇り位地頗る佳なり。此都府はマラッタス帝國の時之が首府たる事殆ど一百年。其後凡庸苛虐の君主暫らく相繼ぎ、帝國の滅亡するやプーナは英國の手に歸したり。これ其不平騷擾の一理ある所以なり。何となれば印度の諸州が英國に歸するや或は割讓に因り、或は會つて其地を征服せる外國と戦つて之を得たる者にして、其英領となれる者は獨りプーナに止らず。然れども百年前其國運の隆

なりしを思へば、英國の爲めに今日卑辱の地に立つに至れるを恨まざる能はずればなり。ブーナ人の喪失せし所は他處よりも大なり。而して其喪失を感ずるや更に大なり。且つブーナは印度に在りて高教派と稱すべき者の根據にして、此處に住する婆羅門の徒は毫も外教を假借する能はず。且つ今や其帝國を失ひ、威權を失ひ、國體を失ひ、宗教を失ひ、名譽に至るまでも亦之を失ひたるに就ては、何人も感慨に堪へざる所にして、以爲らく、これ英國が來寇をなして盡く之を奪へるなりと、其英人を見るや各、其心中に謂つて曰く、余が天國の樂土に在るに當り、彼等は焦熱地獄に在るべき者なり。然るに今や反つて余を治むるの力を有し、余はその羈伴を脱する能はず。然れども余は彼等の計畫を阻害し、彼等の信頼する有司を苦むべし。今力の及ぶ所はこれのみと。之を以てブーナ人は何事に因らず英政府の支持する所に反抗し、而してブーナの婆羅門に由れる勢力は多少全土に擴まれり。

一八九六年ブーボン(鼠蹊腺)の焮衝的腫脹疫ボムベに發生し、今日もなほ存在す。西亞に於ても特發なる此種の疫病なきにあらざりしも、科學と法律の力とに

因つて其蔓延猖獗の勢を止むるを得たり。印度に於ても若し頑固なる抵抗なくして醫術と規則とを應用せしならば多少効を收めたるや必せり。然るにボムベの土人は時疫を視る事平然として、醫師衛生員等の家宅に入ることとを峻拒し、彼等は迷信上より一九〇四年には疫病絶滅すべく、この年に至るまで市民の十分の一は之が爲めに死すべしとて自然に放任せしも、英國人は固より然りとなさず。元來印度に於ては人命甚だ賤しかりしと雖、英人より之を視ればクローリーの生命なほ價値なしとせず。是に於て英國政府は命令を發し、醫師に水兵若くは兵士を附して戸毎に檢疫を施し、百方傳染を防遏せんとせしに、ピンドと回教徒との別なく之を以てその宗門の風習に反し、其階級の規定に背き、其家庭の禮法を破る所の干渉なりとし、步調を同うして抗拒の手段に出でたり。

是に於て英政府は婆羅門教徒及び回教徒の有力者をして衛生員に隨行して無益に宗教家庭の規矩を破るにあらざるとを實見せしむるに力を用ひたるが、最初は此事業に左袒すべき有力者なく、貧人が死亡を見ると同じく己れが階級を失ひ若くは他の災害に遇へる一般、甚しき痛痒を覺えざりしも、稍時日を経るや

優等なる兩教徒は患者救済の舉に出でたるも、これ患者の朋友が甚だ好まざりし所なり。蓋し彼等は患者の死を免るゝには自ら其階級を失ひ、或は回教徒の家屋に於て婦人の室を搜らるゝ恐あり。印度人には衛生思想なし。然れども基督教國に於ても貧民窟に住する者の如きは官府が衛生法を勵行するに當り非常に激昂するは事實なり。

ボムペーは衛生法の改良と公吏の檢察とに反抗せしと雖、傳染病がブーナに蔓延するに至り殆ど忍ぶ能はざりき。

一八九七年一月廿一日女王ダイアモンド慶典の夕、ブーナの隠謀黨高級の婆羅門教徒にして其一人は英國大學に於て教育されたる人なり。は醫師ランド及び中尉アヤルスを殺せり。中尉は檢察の巡行中醫師に同伴せし者なり。暴徒は逮捕に遇ひ其中の四人は絞刑に處せられたるが、彼等の罪は叙論家に比すれば尙輕し。蓋し叙論家は回教及びヒンドの新聞紙に於て、傳染病の防遏の事業に關係したる人々を攻撃し、殊に私人の家屋に於ける英兵の所行を誣ひたればなり。ステイヴン氏曰く、若し東方と比較せんか、歐洲の人民は宗教の何たるを知ら

ざる者なり。印度教は信仰者の生活中如何なる細事にも關係する所あり。即ち何物を食ひ、何物を飲み、何處に衣服を着け、何人と結婚し、何人と接觸せざるべきかに至るまで之を教ふ。諸君は不神聖となすならん。宗教は愚痴の風習を凝成するに過ぎずとなさん。然れどもこれ即ち彼なり。彼等は生活以上に之を貴ぶなり。

抑、英國が印度に輸入せんと欲する所は近世の進歩なり。然るに印度に於ては高級の婆羅門教徒が市内の鐵道若くは電車に乗れる時、車中に醜辱の人あれば此教徒も亦世人より醜辱の人とせらるゝなり。凡て印度に輸入せられたる西歐の新文明は信教の人に取つては、其宗教の害物たるを免れず。最も嚴肅にして狂熱なる婆羅門教徒が宗教に加ふるに繁瑣なる規律を以てせしは衝突を期望して然るなり。一八九〇年の流行病により英兵が戸々を檢疫せしは彼等に取り千歳一の機會なり。若し彼等をして好んで官吏を助けしめんか、其階級の法則を知らざる歐人と雖、決して其宗教を害せざるべく、且つ其同胞の生命を救ふを得しならん。然るに發疫後數ヶ月間、彼等は只手を束ねしのみ。今や毎戸の檢疫は中止せ

ありこれ其實行を得ざるが爲めなり。ブリスベン疫は暑天に近くに従つて衰ふべき者と信ぜらる。こは胚種病にして其微菌は日本の一醫師に因つて發見せられたりと雖豫防の良法に至つては未だ案出せられず。已にして一八九七年印度には更にコレラの發生あり。之に加ふるに飢饉を以てせり。之より先き一八九二年英國は始めて備凶資金を作りしが、既往二年間に於て飢民の爲めに費せし所六千萬磅に及び、而して將來の凶饉を防がんとせば全國の灌漑を善くせざるべからず。則ち又之が爲めに巨額の資金を投ぜざるべからず。然るに印度は世人が想像するが如き黄金世界にあらず、又ダイヤモンド世界にあらず。政府は貧にして費用は鉅なり。其雇人には十分の賃金を給する能はず。ナポポの諸父が一百萬の印度銀を齎らして英國に歸りしが如きは只小説に於て之を見るを得べきなり。政府は時として農民に重税を課するの機を得たるも、何ぞ知らん。租税を以て人民より收めたる者は物質の發達を以て人民に返したる事を、即ち此金銀たる敢て之を嬖幸に私消せざりしなり。敢て之を秘匿せざりしなり。其土地の法律秩序を維持するの用に供したるのみ。古代

に於けるが如く官吏をして土人の財物を掠奪せざらしめんが爲め保護の用に供したるのみ。

飢饉は已に終れり。然れども其結果として貧困の状況は久しきに亙り、數年の間は帝國政府に向ひ、印度政府に向ひ、或は私人に向つて助を呼ばざるを得ざりき。余は救濟の周到なりしに拘はらず、數月の間印度全國を通じて如何なる慘狀なりしかを示さんとす。此事實は信憑すべき出處より取りたる者にして、飢民が貧金を得んが爲めに收容所に工作して尙未だ其家に歸らざりし時の光景なり。余がドーヘッドに至りしは第四回目なり。此地はジューデラットを距る一百餘哩の所に在り。余は十分に此行を記せんとするも、何の處より手を下べきやを知らずして殆ど茫然自失せり。ステーションに達せし時驛長は余に告げて云へり、政府の救濟事業に雇はれたる多數の人民は十日前に二十五哩を隔てたる他處に轉務せり。然れども若し飢饉の概況を知らんと欲せば、第一の信號と共に那の處に往かるべし。二日前餓死したる二人の尸骸を見玉ふならんと。乃ち二人の門衛を嚮導として余を土人の市街に至らしめたるが、余の目撃せる光景は

如何に、余は未だ曾つて此般の事情が印度に存在せんとは思はざりき。目撃の及ぶ所處として死人ならざるなく、垂死の人にあらざるなく、老人あり、壯者あり、孩兒あり、日光は激しく之を射り、風は沙を捲くこと雲の如く、多數の人ありと雖何等の聲響あらず、少くして五人多くして五十人一群をなし、路傍の樹下に坐し或は臥せし者、次第に倒れ死し、生者死者死せんとする者、皆一處に在り。衆中の一人死するも敢て其屍體を移す者なし、何となれば其他の坐臥する者も皆已に氣力なければなり、彼等は皆絶望せり、其言ふ所に據れば、何人も食物を與ふるものなきが故に、只坐して死を待つのみ、市街を過ぐることに一哩其東隅に達せり、涸渴せる河底と其岸上には累々たる屍骸あり、市中處々死人の未だ葬られざる者あり、此地はドーハットの自治區に屬するも區員は敢て顧みず、土人の富裕なる者は之を救ふべき資力あるに拘らず、無心にして坐視せしかば、窮民は石を投じて餘怨を洩らせり、殷富の回教徒及びヒンドの高級に位する人々は、死に瀕する者が咫尺の間に在るも恬として憐まず、蓋し他の優勢なる者より迫らるゝにあらざれば、決して救済の舉に出づるを肯せず。

餓死せる小兒の顔色の如きは最も見るに忍びず、其無邪氣なる容貌と其苦痛と相雜はれる痕跡は歴々として徴すべし、而して其傍には恐るべき悲境に在りて同一の最期を待つ者、左右前後に坐せるを見たり、知らず、何人か之に對して責任ある、何人か斯の如き状態に委したる原因を答ふる者ぞ、宣教師は頗る救済に盡せしと雖、若し之をして資力あらしめたらんには、更に功績を擧げたるや必せり、中には手を擧ぐるの力もなかりし者あり、又餓犬の襲撃を防ぐ能はざりし者あり、これ吾人の目撃せし所なり。

吾人の觀たる中最も豪膽の行爲は、七歳の少女が其母の絶望して兒女の傍に死を待つて横臥するに當り、奮つて二人の弟を養ひ居りたる事なり、少女は破鍋の下に火を焚き、腐敗せる死獸の骨と足とを煮つゝあり、吾人は未だ曾つて斯くの如き斷腸の光景を見ず、實にドーハットの慘狀は從來飢饉の事を叙したる文學の未だ寫し到らざる所なり。

此説話は米國に著名なるバンティタマバイの記事若くはデュリアン・ホーソルンの文章を以て之を補ふを得べし、然れども其事たる傷心の極なるが故に、吾人を

して之を救ふ能はざる以上、一瞥看過復た此書に就て語らしむる勿れ。今より一百年前印度の飢饉は殆ど毎年の事に屬せしが、英國の政府は其荒政の大成功を喜べり。蓋し一地に飢民ある時は他の地方の剩穀を移して之を救ふの方便を立てたるなり。然るに目下の飢饉は是等の時と異り、印度の三分の二に互れる廣大の土地は大旱三年に及び、政府も殆どその資力を盡し、今や如何なる運輸の便と雖、亦焦眉の急を救ふ能はざるに至れり。之より先き一八九七年以後は年々に雨量少なく、終に殆ど一滴の降下なきに及び、印度の雨期は半年風に随ふを例となすに、既往二ヶ年は全く降雨あらず。

印度政府は一八九七年の春、全力を盡くして凶饉に備へ、救濟事業の爲めに使用せる人数は五十萬の多きに達せり。然れども將來數ヶ年に於て將に起らんとする幾百萬の餓死を救ふに足るべき資金なきを憂へざるを得ず。

印度は一年二回の播種をなす處にして、其一は五月及び六月を以てし、其一是九月より十一月に至る。而して葉片の地より出てたる時、冬夏二季の雨に因つて次第に長養を得るなり。然るに既往三年間穀物は地上に出づる能はざりしかば、人

民は之が爲め頗る沮喪せしなり。

一九〇〇年の六月一人の視察家はラヂビナナより報告を寄せて曰く、塵埃、塵埃、處として塵埃ならざるなし。瘦せ衰へたる家畜は脊骨尖つて銳利なる刀鋒の如く、肋骨露はれて明かに半圓形を畫き、荒涼たる原野を徘徊するも食ふべき寸草だにも得る能はず。宛も街上の輓道に食を求むると異なる所なしと。或る地方の如き家畜の斃死せし者一百万頭に及びしとの公報あり。蓋し印度は曾つて家畜を食はずと雖、其耕作上に在りては所有方面に使用するが故に農業には最も缺くべからず。之を以て其斃死の夥しき彼等に取ては凶作以上の苦痛なり。政府は衰弱せる家畜を他所の養病的農場に送り、其生氣を挽回せしめんとせり。印度事務大臣ジ・ン・ハミルトン卿は今春下院に報告して云ふ、縱令此夏中央印度に十分な降雨ありとするも、生畜の損害を恢復するには尙六ヶ年を要すべしと。

一九〇〇年六月時雨の期節に至るまでは事體益々憂懼に堪へざりしが、今年は降雨稍、晚く、平年は六月十日に来るべき者延引數週日に及び、政府は百方處置を施せしに拘はらず。飢饉の災に罹りし者四百萬人に下らず。而して二百萬人は食

物の缺乏に苦しみ、中央及び西部印度の三百萬方哩は縱令窮民が得べき穀物ありとするも、之を得べき資力なく、飢饉の厄は一八七七年より更に甚しかるべき惧あり。但しこの歳食物の缺乏に因つて死せし者六百萬に及びし處不幸にして救濟所には又コレラ病の發作あり。老若男女の患者不備なる衛生法の下に紛亂の狀を極めたり。

印度の人口は北米合衆國の四倍を占め、土地は半を占む。而して三千萬の人民は自家の穀物に生活する者なり。然るに此國は豐作の年と雖其產出は住民の供給に超えず。但し穀種は北印度に生ずるを大麥小麥及び其他の雜穀とし、南印度に生ずるを米及び稷とす。

抑歐洲の記録に上れる印度最初の大飢饉は一七七〇年に在り。ベンガルのみにも死者の數一千萬人なりしと云ふ。この時の計算に因れば百年間に二回の大飢饉あることを免れざるなり。而して印度の英政府は巨額なる備凶資金と日進の運輸便とに因り將來此災を防ぐの望を抱けり。

英政府は最も善く數百萬の飢民に對し責任を盡して善後の方を立て、一大事業

を興し、窮民をして糊口の途を得せしめんとし、又勞力をなす能はざる者の爲めには別に扶養の資金を配分し、英人を選んて之を監せしめたり。余の述べたるド・ハットの慘狀は印度君主の領内に起りし者なり。而して是等の君主は英政府のなせし所に觀感興起して、皆その本務を盡さんとせしも、未だ整然たる救濟の方を立てるに慣れず。而して英人の供資は到底數百萬人を救濟するに十分ならず。救濟の目的に出でたる工作の勞働は甚だ輕易にして、其賃錢の如き吾人より之を視れば言ふに足らざる少額なりと雖、印度に在りては日々の糊口に不足なし。即ち男は一日三錢にして婦人と兒女とは更に少かりしが、尙數百里の路を徒歩して工場に在る處に来る者少からず。

余の已に述べしが如く備凶資金は六千萬磅を費せしが、今や慈善の義捐は之に注入なしつゝあり。初め印度政府は自己の財源を恃み、他人の助を求むるを好まず、私資募集の舉を沮喪せしめたるも、災害の益、大なるや倫敦市長は官邸に於て資金の取扱を始め、今やその額一百万磅に達し、其他英國カナダ合衆國の宗教團も亦鉅資を募り、之を各、其宣教師に托し、カンサスとネブラスカとは一八九七年

印度飢民の爲めに一艘の舟に穀物を載せて之を送らんことを提供し、最近トベカに住するスタンレー知事は人民に義舉を勸告する所あり、又一宗教新聞社は二萬ブッシュルの穀物を購求し、半價を以て印度の農民に賣與せしが、政府はこれを運送するが爲めに汽船クイトー號に特許を授け、右は五月十日紐育を解纜せり。但し其積荷は宗派の別なく宣教師に分配すべしとの訓令を帯びたり。

サー・エドウィン・アノーノルドは「ノールス・アメリカン・レビュー」に飢餓と印度凶饑の結果を述べて曰く、

飢饉局の事務を處辨するが爲めに任用されたる官吏は敏達精勵の人にして或は勤務或は監督或は査察或は報告時として務めざるなく、處として在らざるなく、孜々屹々救濟の效を擧ぐるは、これ從來何れの戰勝者、何れの邦國、何れのマハラヂヤと雖、未だ印度に於て企圖せざりし所なり。何となれば女王の基督敎政府は天に誓つて人命を救ふことに全力を注ぎたれば……飢餓は慢性の病狀なり、其危険の突然に到ることは罕なり。故に其人自ら之を覺えざるのみならず、救濟者と雖亦之を忽にし易し。但しヒンド人種の生理狀態は甚だ強健

ならず、吾人の憂ふる所は彼が菜食の爲めに營養不十分なる事なり。菜食に因つて適當滋養を得んとせば其量甚だ大ならざるを得ず。彼等は日々の飢に因り粘膜は衰弱して其作用を害し、組織中に在る少量の脂肪は速に消失し、血液の循環宜しきを得ず。従つて四支を養ふに十分なる實質を缺き、彼等が政府の救濟員の賑恤に遇ひ、絲の如き指を以て食物を取る時に當つては、最早消化の力なく、營養を得ずして反つて害毒を受く。則ち實際は一週間以前に已に死せる者なり。

第四編 阿非利加に於ける歐洲

第一章 埃及 及

余の十九世紀の阿非利加に於ける歐洲に叙べたる埃及、ソードンの事跡は一八九五年スラティン・ヘー(今のスラティン・パシヤ)がデルヴィッシ回教徒貧窮を貴び苦を脱れたる時を以て終る。之より先き英人はソードンより退却せしが、埃及軍極南の前哨はウエーデー・ハルファに在り。ウエーデー・ハルファはカリファ・アブダラーの領地の將に盡きんとする處にして、アブダラーは一八八五年マードニア・アブダラー・アメッドに繼ぎたる人なり。

ナイル川はカルトームよりウエーデー・ハルファに至るまで二大屈曲をなし、ベルバルを過ぎてアビュー・ハムメッドに達し、南に轉じて二沙漠の間を横り、オールド・トンゴラに抵るや直ちに北の方海に向て直流し、第二瀑布の處にてウエーデー・ハルファ

を經るなり。而してスラティンが其囚へられたる土地を脱れ出てたるは第一瀑布に近く、ウエーデー・ハルファの北に當れる埃及軍のナイル前哨地にして、アソリアン即ち是なり。余は此事に就き已に聊か叙述したれども、今茲に掲ぐるスラティン逃走の記載は之を目睹せしウインストン・スペンサル・チャルナルの言に係る。

一八九五年三月十六日の早朝、疲倦せる亞拉比亞の一旅客は破衣を穿ち跛にして痛れたる駱駝に乗り、指揮官の處に到りけるに、一營驚喜し直ちに之を最上の浴室に導き、二時間の後、埃地利の一小紳士はスラティンがカリファの拘束を脱したる事を打電せり。今や埃及軍はデルヴィー帝國の百事に精通せる人を得たり。其言ふ所は埃及官憲をして益該帝國の衰運にあることを確信せしめたると同時に、ソードンに於ける刀火の慘話、英人の思慮ある者をしてカリファの暴虐を畏怖憤慨せしめ、英國の輿論はソードン再征の舉に向へり。

一八八三年紅海岸のシヤキムに駐屯せる英埃軍のオスマン・ディグナと不慮の衝突に出でたる事は余の已に述べたる所にして、將軍サー・ジュラルド・グラハムの率ゆるエル・テップの英兵が印度より歸途勇戦をなしたる事實の如きも亦其中に在

りしと雖、バルバルト・キチネルの名は之を洩せり。然るに此人はソーダンの歴史に關しゴルドン以後英人の最も重んぜし所なり。

ホラシオ・ハルバルト・キチネルは陸軍中佐の長子にして一八五〇年に生れ、公立學校の教育を受けたる事なかりしも、其稍長ずるやウールウチの兵學校に於て士官候補生に撰ばれたり。在學中別に頭角を露はすに至らざりしが、一八七一年實務を命ぜられ、十年の間無名の一士官として孜々其職掌を勤め上長の満足を得たり。此間サイプラスの測量隊に用ひられ(一八七一年)其後更に探検隊に従つてパレスタンに至り、此に亞拉比亞語を學びたるが如き、適に其銳意智識を求めたるを見るべし。蓋し當時亞拉比亞語は英國の官吏に取りバタゴニア語の實益あるに若かずと信ぜられたる所なりしも、キチネル將來の幸福は茲に胚胎せり。已にして一八八二年英國の艦隊がアレキサンダルに在るに當り、休暇を得て將に活劇を演んぜんとせしに、不幸にして危機未だ到らざるに暇期已に盡き、再び賜暇を得たる時は時期已に去れり。

されどキチネルは最後の機會を賭して更に延期を請へり。其心中には多分却

下せらるべしと思ひたるも、一新聞通信員の計に従ひ、若し電報にて召喚を受くるにあらざれば許可を受けたる者と視做すべき由を附言せしに、豈に測らん、電報は直ちに來れり。然れども電報は幸にもキチネルと親交あるかの通信員の手に達したる事とて、通信員はサイプラスの週航船の解纜するまで之を交付せざりしかば、電報の命令に従ふは不可能となり、従つてキチネルは一週日の延期を得、而して此間に起りたる事件は最も幸運なる者なり。即ち四日の後アレキサンダルは砲撃を被り、軍艦は分遣隊を陸に上せて亂を鎮めしめんとし、英國政府も埃及に出兵を可決せしかば、茲に至つて埃及語に通ずる者の必要を生じ、キチネルは埃及に來ることとなり、功名の路豁然として開けたり。

ウイスレー卿のアレキサンドリアに來るや、亞拉比亞語に通ずる士官より裨益を得るとを喜べり、但しキチネルは二十二名の歐人と共に雜駁の徒を埃及軍に編入せし者なるが、此一隊はエル・テップに敗れたり。一八八三年の耕作軍を指揮せしヴァレンティン・ペーカルは曰く、彼等は銃を扱ふ事すら之を知らず、纜に能く丸を込め引金を引くのみ、之を兵士と呼ぶは滑稽なりと、然るに英人が埃及軍を組織

するや兵勢一變し、之よりして十二年の後埃及軍は英人の誇る所となり、オムダ
ルマン戦争の時の如き其功績烜著たり。
一八八六年少佐キチネルはシニキムの知事となりしも、行政官としては成功と
謂ふを得ず。一八八七年オスマン・ディグナ再び起り、數年の間キチネルは寡兵を以
て奇戦に従事し、或る小闘に於て面上に重傷を負へり。その後埃及軍の高級副官
に進み、茲に軍隊と輸送の改良を行ひ、併せて種々軍事の準備を講じ、一八九二年
にはサルダルに陞れり。サルダルとは埃及軍の元帥を謂ふ。サー・エヴリン・ペーリ
ング(今のクロイマル卿)は其熱心と才略とを信じて以爲らく、若し英國政府が「進
め」の一語を下す時に至らば、ソーダンを再び征服するに就て最も適當なる武將
なりと。

ソーダンの征討に在りては輜重の運轉と云ひ、鐵道の築造と云ひ、情報局の動作
を利用する事と云ひ、十分準備の時日ありしも、トランスヴァールの役に至つては
斯くの如き便利を有せざりしなり。何となれば已にナイル川なく又武力の中心
なく、其交通の如きも多數の鐵道線を守備せざるを得ざるの不便あり、且つデル

ゲイシは軍隊として戦ひ、かの散兵として漂石の間に出没するボア人の如くな
らず。之に由つて之を觀れば此兩役の難易は固より同日の談にあらず。乃ちキチ
ネルがソーダンの元帥として赫々たる武功を立てし後、副將の地位を以て前述
の如き不利の事情ある南阿に發遣せられたる所以は之を想像するに難からず。
余は十九世紀に於ける伊太利に於て、伊太利がアビシニアを攻め、一八九六年三
月一日アドワに戦ひたる事を記せり。伊太利が紅海沿岸の殖民を鉅費にして利
益なしとなし之を撤去したる事を記せり。

英國は歐洲列強の承諾を得、徳意を受けカリファと戦端を開きてカルトームに近
づくべき事を決せしが、戦争の準備に長日月を費せしに拘らず、出兵の斷行は咄
嗟の間に在りし故、列國は爲めに一驚を喫せり。この時宛も政府を退きたるグラ
ドストンの一黨は英國が再びソーダンを君臨する事に反對せしも、輿論は開戦
を主とし、人は街上に呼んで曰く、吾人をしてゴルドンの仇を報ぜしめよと。尙武
の精神の勃然として英國に興り、舉國皆首を翹げて遠征の日を待てり。

英國の輿論は十年間に激變せる所あり、國民はソーダンの放棄を慚恨せざるな

く、フアイザル・オルワルダルとスラティン・バシャとが其君主の性質を報道するに及んで益甚しきを致せり。但し英國は此君主に交付するに數百萬の生靈を以てせしが故に、其仁虐は英國の等閑視する能はざる所なり。夫れ斯くの如し、曩には曠日彌久何等の利益なかりし爲め、ソイダンとの戦争を忌憚せる英國の納稅者も心機一轉し、ソイダン再征は英國輿論の實際問題となれり。

一八八二年英國が埃及を占領せしより一八九八年に至るまで、埃及の上に垂下する險惡なる黒雲は毎にソイダンより來り、デルウヰン國が絶えず埃及の境を脅かすや、埃及人をして枕を高うするを得ざらしめ、其多費なる、其煩擾なる、何れの實戰にも過ぎたり。

一八九八年の初に當り、憐むべきジョージ・ウーリントン・グトン・ステイヴンスは謂つて曰く、吾人が南方の敵を膺懲せざる限り、マディーズムがソイダン人の歸順を妨害する限り、埃及はわが英國の治下に靜謐なることを得ざるなりと。

埃及に於ける英國の政治は如何なる者ぞ、論理的に之を言へば變則なり。

初めグラドストーン氏は漠然たる證言をなして曰く、英國は一旦埃及を占領すと

雖、埃及の秩序已に定まりその能く自立するの日に至らば之を放棄すべしと。然るに英國は一八八二年以來依然として占領を繼續せしなり。

英國の占領以前埃及は殆ど破産の境遇に在り、十五年前に在ては敗殘、叛亂、凋弊を極めたるに、今日は政治宜しきを得て秩序整然繁榮に赴き、其財力は以て負債を償ふに足り、其武力は以て敵を破るに足る。

埃及人の中英兵の撤退と政權恢復とを期待せる許多の階級あり、其最も有力なる者をケディーズ(ケディーズ)の率ゆる貴族の階級とす。されど埃及人をして埃及を治めしめば復び往時の如き國狀に陥るべく、又決して埃及人の埃及たる事を得ざるなり。何となれば官吏の階級は皆外國の産にあらざれば則ち外人の血統に屬するが故なり。アラビイの叛亂の強處弱處は共に其埃及人なる事實の上に存するにあらざるや。但し官吏階級の政治家はアーメニア人にして、武官はサルカシヤ人なり。而してケディーズは勿論保護を免れんと欲し、舊の官吏階級は官職を得んと欲せり。抑、埃及人民は凡て英國の政治に不平なりしに拘らず、若し明日にても埃及を去るなれば己れも亦埃及を去るべしとなせり。一バシャは曰く、智者はその財産

を携へ、英人の退去に先だつて船に乗り退去すべく、愚者はその財産を劫掠せられ英人退去の後に初めて船に乗つて埃及を逃るゝならんと。又一パシヤはステイヴァン氏に謂つて曰く、若し英人諸君が明日にても退去せば、則ちこの國の破滅なりと。而して此パシヤは英國の政府を戴くを屑とせざりしものなり。

埃及に於ける英國政治の最も簡明なる記述は、一八九八年の埃及と題せる小冊子を推さざるを得ず。右は三年以前ジョー・タウル・ステイヴァン氏の著せしものに係り、人を娛ましむべき文體を以て事實上の埃及と法理上の埃及とを叙し、僅々數頁の文字能く吾人をして一目瞭然たらしむ。

理論上より言へば埃及の英國に屬するは、なほシシマ・ファルド・ホテルが之を建てたる旅客に屬するが如く、カイロ、アレキサンドリアに駐屯せる英國の成兵はケデイウの威權を持して秩序を恢復せしが爲めなり。然れども事實上より言へばこれ英國がケデイウを保護し秩序を保つが爲めに自國の威權を持する所以なり。蓋し今や埃及は世界に於て秩序ある一國となれり。若し英國の威權なからんか、ガデイウは其君なる土帝若くは亞拉比亞人の爲めに倒されんとす。抑埃及ケ

デイウ實際の君主は何人も知るが如くクロイマル卿これなり。然れども理論によればクロイマル卿は唯總領事のみ。公使の職名すらも之を有せず。即ち英國の代理と稱せらるゝも、其位地は何等の職權なく何等の意義なし。而して埃及在留の英人中にはクロイマル卿彼等は其管轄を受くるもの下に服職せずして埃及の官吏なる一種あり。是等は司法に於て、公共土木に於て、内務に於て、財政に於て、教育に於て、ケデイウの顧問たり。此外又クロイマルの軍務局には埃及軍の英國元帥なるサルダルあり。理論に従へばこれ皆ケデイウ内閣に屬從する者にして、唯改革に就て意見を陳ずるに過ぎざれどもケデイウ及び其内閣は固より彼等が初より其意見の採用を期する事を知るなり。

埃及に於て満足なる政治を得るの障礙は前に述べる理論と事實との錯綜に止まらず他に二大困難の在るあり。即ち債務管理府と治外法權これなり。

英國の未だ埃及を占領せざるに當つてや、イヌメール・パシヤ財政を誤り豪奢に耽りたる爲め、歐洲は埃及の債主の爲めに、債權を所有せる外國人の爲めに、債務管理府を設け、六人を選んで之を監せしめ、其各所屬の大國を代表せり。是に於て埃

及の歳入を兩分し、半は該府に納れて償債に供し、半は埃及の國用に充て、埃及政府が如何に金錢の缺乏を感じ、管理府には如何に巨額の餘裕あるも、管理府の監督たる六名が盡く一致の承諾をなさざる以上、埃及政府は一錢と雖手を觸るゝを得ず、而して埃及の財政が最も切迫せし時に方つても、佛露兩國は之が流用を阻みたるが、剩餘金は己に公債が悉く償却せられたる時、六七百萬磅に達せり。治外法權は文明國が其臣民を保護するが爲めに公然半開國に強行する所の方式なり、今より一二年前日本は猛然として其文明國なる事を抗論して列強に迫り、自國に於ける治外法權を撤去せしめたり、治外法權とは若し外人が半開國に在つて罪を犯すときは、犯罪人が本國の法律に従つて本國領事の審問を受け、犯罪地の國法に従はざる事なり。

ステューデン氏は曰く、

其一例を擧げんに若し余がシニフォルド・ホテルを出てんとして埃及人を銃撃し佛國人の家に赴くとせば、埃及人は佛國領事の臨場あるにあらざれば其家に入るを得ず、又英國領事の眼前にあらざれば余を逮捕するを得ず、而して余

は英國領事の審問を受くべきものなり。埃及には外國人充滿し、就中希臘人多きを占む、初め希臘人の裁判所は一切の犯罪に就き自國人を庇護し救済するの用に供せられたるが、近來は頗る直道に向ひたり、然れども若し希臘にして其臣民を罪に問ふを欲せざる時は、之を縦して埃及到る處に罪惡を逞うせしめ、何等の刑に罹らざらしむるも亦自由なり。

埃及の疾苦は之のみにあらず、治外法權の爲め自國の人民に課する所の率に由つて外國人を課税するを得ず、而して埃及の富豪は大抵外國人にして外國人は大抵卑陋の人民なるが故に、埃及の治外法權は更に政治上一種の煩累を加ふる者と謂ふべし、然るに英人の生れながら政治の才能あるや、既往十九年の間埃及に於て赫々たる大業を成就せり。

此大業を成就したる第一の人物はクロイマル卿にして、大銀行家パーリングングラザースの一員なり、此會社は亞米利加の事件と關聯せる一朝一夕にあらず、クロイマルは性質溫厚にして品位あり、其聲は緩和、其辯は流暢の人なり、されば

東洋の君主を威服するに足るの天性を有せざるが如し。然れども天鷲絨なるを得る間は長く天鷲絨となり、鋼鐵とならざるべからざれば直ちに鋼鐵となるとはクロイマルの謂なり。卿の背後には英國あり。但し英國は毎に自ら其心意を知らざるの憂ありしも卿は善く己れの心意を知れり。而して極端の事あるに及んで反對黨も亦初めて之を知れり。

今一九〇〇年の春クロイマル卿は埃及の事跡に關する年報を出せしが、其中に言へるあり。

去年埃及は歳入は五千五百萬弗を踰え、剰餘は二百萬弗を踰えたり。而して剰餘金は埃及債務國際監督府の賦課せる減債利息資金の額に超過せり。但し利息資金は現在殆ど四千萬磅に達す。

願ふに卿が經濟界工業界に利益を與へ併せて社會上に裨補を與へたるは此大成功を致せし所以なり。則ち歳入の増加は租税の増加に由りしにあらず。英國が埃及に勢力を植ゑたる以前此國の農工は重税に呻吟したるも、今や反つて負擔の輕さに満足するの有様なり。クロイマル卿は更に農夫を助けんが爲

め近く一割利子の公債法を發したるが、之より先き彼等は實に四割の利子を高利貸に拂ひたるなり。クロイマル卿の埃及に臨みたる時、交通機關は遲緩なるダービアの小船にの過ぎざりしが、今や數百艘の汽船はナイルに浮び、鐵道は四通八達、郵便電信の制度も亦精良なるのみならず、其收入は經費を償ふに餘あり。ナイルは前汎濫期に於て水量の低き從來未だ有らざりし所なりし處、政府の資力は能くこれより生ずる損失を補ふに餘あり。蓋し古代に於てナイルの低潮は凶年と一致せしなり。而して現に着工のアソリアン巨堰は數年を出てずして絶えず河流を分漑するなるべし。これ等の進歩は僅かに租税の一部を用ひたるに過ぎず。なほキーバの森林改良に於けるに同じ。夫れ均しく租税なり。然れども曩にケデーヴが之を無用の文化に用ひたる者、今や初めて其利用を得たり。一九〇〇年五月五日「アットルック」

第二章 ドンゴラ戦役

ドンゴラはナイルの右岸ウーデー・ハルファの南に在り。一八九六年三月十二日サルダルは兵をドンゴラに進め、ソーダンのダルウツシ及びその君主カリファアブダラーと復び戦端を開くべき命令を受けたり。蓋しドンゴラの地たるソーダン中最も肥沃の地にして、アビユー・ハムメッド、ウーデー・ハルファ間に於けるナイル大彎曲の内に横はる。

三月はナイル減水の時節に當るが故に進軍に利あらず。然れども出征の遅延せし所以は之が爲めならず。國債管理府が剩餘金の内より六百萬磅の戦費を埃及に供給する事を拒みたるに由る。是に於て英國は其不足を補ひ、ドンゴラ戦役は兎角軍費の缺乏を感じたれどもなほ着々として之を進行し、キチネルの兵力を盛ならしむるが爲め、紅海シユアキムに駐在軍中用ふるに足るべき者は盡く將軍

の麾下に集め、半ばシクより成れる印度旅團はシユアキムに上陸せしが、これ印度軍隊の精華なり。シク兵は外國の戦役に従ふと聞き、將卒の別なく中心喜悅し、意氣大に振へり。何となれば若し外國の戦役に従つて歸郷せば、下輩より尊崇せられ同輩より敬禮せらるゝが故のみ。彼等はダルウツシ征討の爲め派遣せらるゝ事と思ひ、コレヲ其他傳染病の恐れある紅海の都府に衛戍せんとは豫想せざりしなり。故に其失望は甚しかりしも、これ尙處するに難からず。然るに其給料に就き埃及政府と印度政府との間に生じたる葛藤に至つては一難事に屬し、印度政府の主張する所は彼等は自國の兵役に従ふにあらざるが故に、埃及政府(即ち英國政府)より支給を受くべきものなりと謂ふに在り。埃及政府の主張する所は素と印度の軍隊なるを以て、何れの處に在るも印度政府は之に給料を與へ糧食を供すべく、埃及政府の責は輸送と戦費とに過ぎずと謂ふに在り。これ一は、埃及の資金已に窮乏を告げたるに由らずんばあらず。之に加ふるに印度補充隊の將卒とシユアキムに留まれる少數の埃及將卒との激争あり。印度人はヒツクの時エル・ラブに於ける埃及人の状態を擧げて之を嘲笑せしかば、埃及人は深く之を憤り益

互に疾視反目するに至り、其極數月を出てずして印度兵は歸國の命令を受けたるが、此時はマラリア、コレラ等の爲め已に著しくその數を減ぜり、而して埃及政府は其去るに臨み軍役の例規なる相當の禮を忽せにせり。

最初の計畫に據れば、シヤキムより來りし埃及兵はダルクハシ領のカッサラに進みサルダルの軍がアビームメッドに到るを待て之と合すべき筈なりしも、結局印度兵は沙漠を過ぎドンゴラ征討の爲めウエーデーハルフに集中せる混合軍に合すべしとの命を受けたり、而してサルダルの軍は歩兵一萬、騎兵八百、駱駝隊一千、輸卒二千より成り、外に亞拉比亞の別働隊あり、輸送の中には鐵道歩兵大隊八百人を含みたるが如く、此一隊は其實兵士の訓練を受け兵士の給料を與へらるゝ人夫に過ぎず、蓋し埃及のフエヒンは生來沙泥の中に鐵錘を執つて勞作するに慣れたるが故に、最も此種の兵役を喜び、白人の甚だ之を厭苦するに反し、樂んで之を勤めたり、彼等はソイダンの黒兵の如く天成の戦争に適したる者にあらず、又何等の遊樂にも趣好を有せず、已に鐵道の工事に役されその務むる所は戦争にあらずして版築なり、其執る所は銃劍にあらずして錘鋤なり、均しく版築を

なすなれども、其故郷に勞作するに比して善き待遇を受け、善き賃銀(ピアストル)一日五錢を給せらるゝが故に、彼等の之を喜ぶも亦宜なり、フエヒンは概して強健なり、忍耐なり、愉快なり、勤勉なり、従順なり、而して英國の士官軍曹等の訓練は之を化して精兵たらしめ、其職務を榮譽とし、其長上の白人に敬事し、ドンゴラの戦役に在つてはフエヒン實に軍隊の四分の三を占めると云ふ、又騎兵は盡く埃及人を用ひしが、これソイダンの黒人は馬に不注意なるが爲めなり、土人の聯隊は大抵埃及の軍職にある英國の青年士官を以て之が武官となせしが、埃及軍に在る英國士官はピムバッシ(少佐)以下の者なく、大佐をベトと云ひ、指揮官の義なり、願ふに是等の士官は少壯を以て善く其責任に堪へたるを證せしや必せり、或る聯隊に在ては土人の士官なきにあらざりしも、多くは土耳其人、サルカシヤ人、アーマニア人の埃及軍籍に入りたる者なり。

鐵道をカイロよりカルトームに延長せんとするの計畫は遠くイスマイルの時に在り、此事業を成せしケデー、ハッは濫費の人なりしと共に又進歩思想の人なりしなり、當時ナイルの右岸に沿ひウエーデーハルフに至り、更に沙漠を過ぎてア

ビームメッドに達すべき豫定にして、経験家は盡く之を以て不可能となせしと雖、サルダルは以て然りとなさずして其計畫を復活せり。案ずるにイスマエルの鐵道はウエディールフアの南に當り、ナイルに沿へるサルラスより支出し、サルラスよりアカシヤに至るまではイスマエルの時測量をなしたるのみにて、堤防も已に破壊に及べり。

今や英國の少年技士三四名は佛領カナダ人ビムバシギロールの下に此工事を擔當し、線路を復舊して速に運轉せしめんとし、ハルフアは鐵道の倉庫及び工場之地となれり。この時に當り最も困難なりしは機關車にして、在る所の者は皆舊式の廢物に屬し、中には多年使用せられずして鏽を生じたる者あり。是等は往復の度毎に一々修理を施さざるべからず。ドンゴラ役の間鐵道は力の及ぶ限り改良を行ひしが、此役の終りし後新機關車は英國及びフィラデルフィアのバルドウィン店より送られたり。

サルダルの兵力は四月中旬ウエディールフアに集中し、然る後アカシヤに進みナイルに由り、鐵道に由つて、其糧食を運送し、四日にしてアカシヤに達せり。此處よ

りして向ふ處はフルケイなるが、其地たるナイルがドンゴラを繞つて彎環せる曲處の外角に近く、ソイダン中最も豊饒なる地方なり。六月七日フルケイに激戦あり、初めガルツィシは奮闘せしと雖前後に敵を受くるを見るや驚て潰走し、駱駝武器等の外多數の婦人をフルケイに遺棄し、之に屬せしソイダン黑人の銃手はバツガラバツガラの騎兵が其重なるエマール二人と驅馳するを見ると均しく戦争を止めたり。是に於てサルダルは全勝を得、當時埃及兵の行動は最も賞賛を被れり。

之に繼いで軍隊の向はんとせし處はニードンゴラなり。ニードンゴラは此州の首府にして、ガルツィシが大倉廩を置きし所、エマールエマールワッド・ビシヤワッド・ビシヤがフルケイの敗後退居せし處なり。

此戦役に就て各ページに見る所の姓名は、今日吾人が日常の談話に上るものにして、將軍ハンタル、大佐ブロードウッド、ヘクトル・マクドナルド等これなり。

軍隊はナイル河畔に陣を張り、其高潮を待てり。これナイルが水量を増すにあらざれば砲艦を通ずるを得ず、又第二瀑布を躰えて輸送をなす能ざるが故なり。然

るにこの年はナイルの高潮平年に後れ、而して兎角の間にコレラ病の發生に遭ひ軍隊の困難は名状すべからず。南風四十日に互り、砲艦の通行を妨げたり。第二瀑布は全身の高度六十尺に達し、長さ九哩に及び、其間兩岸狹隘なる處あり。最初は六月ナイル漲溢の時砲艦及び穀物を載する端舟は瀑布を通過すべき心算なりしが、八月に至り尙其望なかりしかば、スタッフオールド・シヤア聯隊と埃及人は一艘の汽船を曳きて岳石を超え瀑布を溯らしめ、他の六艘もこれに倣ひ六日を費して險阻を過ぎて平夷なる河上に達し、これよりは容易にナイルを上つてニュードンゴラに達するを得べし。是に於て軍隊は沙漠を過ぎて進むこと一百二十哩、會河水増加せしかば艇舟は容易に第三瀑布を過ぐるを得たり。此時に方りソーダンは雨期に屬せしかば、軍隊は途中大雷暴風雨に遇へり、斯くの如き障礙はサルダルの豫料せざりし所なり。此雨は獨り進軍を阻せしのみならず、鐵道の堤防を破壊すること十二哩、電線も亦損害を被れり。サルダルは直ち

に現場に臨み、數時間に五千人の工夫を役して破壊したる線路の部分を修繕せしめたるに、忽ち又凶報あり、砲艦ザイフル號は汽罐を損じ復た使用に堪へずと。此舟は種々の望を繋ぎし者なるが故に、船長より報告をなせし時サルダルは暫らく黙して語なく、嘆じて曰く、天なるかな、クローザル、余と汝と孰れか最も否運なると。

然れども一兩日を経るや、サルダルは再び成算を立て、軍隊は前進せり。サルダルの軍隊の進むに従ひ、ダルクマンは其武力をニュードンゴラに集め大軍を擁せしが、其中には九百人のデハディン(異端に對する神聖戰爭に徵集せられたるソーダン土兵)あり、八百人のバグダラ騎兵あり、二千八百の槍兵あり、凡て五千六百人。

サルダルの軍隊の進むに従ひ、ダルクマンは豫定の戰地を棄て、退却し、ビシヤラは自ら弱點を知りしかば、河を隔て、敵と對陣し、己れは右岸を守り以て英國の武装せる小船隊が他の瀑布を過ぐる事を妨げんとせり。

兩軍激戰、ダルクマンは頗る猛勇を顯はせり。只砲兵との衝突なかりしが、若しこ

れありしならんには恐らく優勢を示したるべし。ダルウツシ軍の將帥ビシヤラ、オスマン・アヅラク共に傷を負ひ、ビシヤラは歸路を絶たるを恐れしかば、砲艦がハーファルまで進むに及び、ニードンゴラの防禦を絶念して南方に退かんと決心せり。是に於て埃及軍は河を渡りし處、敵は衆寡敵せざるを見て徐々退却し、復たドンゴラに入らんとせず、而して埃及軍がニードンゴラに到りし時は英國の小艦隊の分遣軍が已に之を占領せし時なり。ダルウツシは次第に追撃を受けて沙漠に入りたるが、此間武器其他の物を途に委すること算なく、嬰兒の父母に離れたる者亦夥しく、砲車を以て之を運ぶに至れり。

これダルウツシを征定せる第一着なり。抑、彼は守勢を取ること十年の後この攻撃を受けたるものにして、英國の輿論が想像せしが如く恐るべき者にあらずしな。

戦役は已に終り、軍隊は休息を得たり。然るに一八九七年に至りアビユー・ハムメッド及びバルバルに赴くべき準備を講じ、此處より遠くナイルを浜つてオムダルマンを征服すべき計畫なり。

ナイルの此部分は航通極めて難き處なるを以て、サルダルはニヒア沙漠を横断してウエーデー・ハルファよりアビユー・ハムメッドに至る迄鐵道を布設するの計を定めたり。ウインストン・スペンサル・チャルナルの「河戰」中、沙漠鐵道の布設を叙したる一章より興味あるはなし。然れども茲には唯言はんとす。ウエーデー・ハルファに於て工を起せしは一八九七年の一月一日にして、同年十一月三日に至りサー・ハルバルト・キチネルは已に此線路に因てアビユー・ハムメッドに達するを得たり。從來十日間を費せし行程は僅々十六時間を出でざりき。而して此鐵道の成る實に氏の判断に因れる者なり。爾來此鐵道は更にフォルト・アトバラよりウエーデー・ハルファに至る三百八十四哩を十三時間にして連絡せり。

ドンゴラ陥落の報カリファに達するや殆ど其自信を失ひ、オムダルマンに於ける一切の業務は停止の狀に在り。アブダラーは其宮中に閉居すると五日の後、寺院に詣つて祀典を行ひ、人民は演說せしが、先づ英軍がコレラ其他の疫病に苦しめりとの報告を説明し、ソーダン人は怯慙にして敵に降りし事を悲むと共に、其英人より擄掠を蒙るべき事を推測して聊か満足の意を述べ、尋て神聖戰爭に背

きたる者は信心の缺乏なりとて之を哭し、己れは飽くまで神を信じ且つ昔のマ
 デーの豫言を信ずる旨を誓ひ、終に臨み更に云ふ、上帝の天使とマデーの靈魂と
 は夢幻の間に神託を傳ふるやう、英人と埃及人とはドンゴラ、オムダルマン間の
 或る地點に屍骸を留め、白骨滿地一望噎々たるべしと。演説終るやアブダラーは
 劍を抜き高音に叫びて曰く、イスラムは凱歌を揚ぐべし。我宗教は勝つべしと。已
 にして人民の喝采漸く静まりし頃、彼は留るを願はざる者に隨意退散の許可を
 與へたり。

是に於てアブダラーはエマールを部署し、英軍を防ぐべき備をなせしが、心竊に
 以爲らくサルダルは必ず一八八五年ウーヌレー將軍が來寇せし時と同一の路
 を取るなるべしと。

然るに暫らくして、土耳其人「ダルツィシ」は埃及人を呼んで土耳其人と云ふが進
 軍せざる事を偵知し、何故にドンゴラの勝に乗じて進まざるかを推測する能は
 ざるに苦めり、已にして一八九七年の初に至り、カリファの君民は大に志氣を振ひ
 敵を逆襲するの策に出でんとせしが、サルダルは大尉ウインゲート及び其情報局

より此事を聞知せり。カリファが盡くそのエマールをオムダルマンに集めし所以
 は蓋し天使とマデーの靈魂との神託の如く大戦争を以て市外に在るべしとな
 せしが故なり。然りオムダルマンの戦争は誠に其地に生まれり。唯其結果に至つ
 てはアブダラーマンの豫期せし所と相反せり。

チャリア族の領土はナイルに沿ひ、埃及の疆界よりメタムメーに達す。カリファはこ
 の族の去就を疑ひ、其主長アブダルラを召致したるが、これダルツィシがチャリア
 族を遇すること最も酷逆なりし故、其或は叛かんと恐れたるなり。カリファはアブ
 ダルラに告げて曰く、マーマドの一軍を卿の國に送つて敵を防がしむべければ、
 卿は之に糧食を供して二心なきを見はすべしと。マーマドは之より先きカリファ
 の招きに因り大軍を率ゐてコルドファンより來會せしものなり。アブダルラは若
 しダルツィシのそが國內に駐屯するに至らば、必ず財物を掠め家屋を害し婦人
 を姦すべきを知ると雖、姑らく忠節を表したり。然れども兵糧供給の事に至つて
 はこれを辭せしかば、カリファは大に怒りアブダルラの君民を侮辱せしかば、アブ
 ダラは歸國の後、事の顛末をチャリア族に語り、チャリア族は直ちにカリファに反し

て埃及に屬せんと決し、アブダルラは二通の書簡を認め、一はサルダルに援兵を求め、一はカリフに向つてその罪を鳴らせり。不幸にしてサルダルの援兵未だ來らざるに、カリフはマーマッドをしてメタムメーを屠らしめ、アブダルラは害せられ、人民も多く毒手に落ち、少數の逃亡せしもの沙漠にてサルダルの派遣せし援兵に遇ひたるも已に後れ、デリアには只殘墟と遺骸あるのみ。

アビユー・ハムメッドはサルダルが鐵道を達せんと欲する所なるが、カリフは之を重視せず、又沙漠鐵道の價値をも辨ぜざりしかば、埃及軍の驍名あるハンタル將軍が占領の爲め送られたる時、僅に少數の成兵ありしのみ。將軍が已に此處を占領するや、鐵道は着々歩を進めたり。

此時の事に就きサルタルの語れるサルダルの談は最も興味あり。サルダルは本營と遊撃隊とを聯絡すべき野戰電信を要し、適材剛氣の士官を遣はして其任に當らしめ、軍隊の進むに従つて架線すべき事を命じたるに、士官は材具の不備にして手を措く處なきに困じ、一々列擧して言ふ、電線を架すべき工夫なく、捲線具なく、柱材なく、又輸送に供する動物なしと。サルダルは之を聞き暫時困却の様子

なりしが、忽ち一考案を得て士官に方法を授け、先づ村中の驢馬を集めしめし處、村民は日々賃銀を得る事とて喜び、遊撃隊に従へり。驢馬の手に入りたる翌日、士官は又柱材其他の用具を得べき場所を問へり。サルダルは徐に電竿の集まれる處に來り、先づ線輪の最も大なる者を摘擧すると共に、最少の驢馬を撰擇し、然る後驢馬の二後脚を左手にて捉へて線輪に挿み、線を擧げて驢背の中央に及ぼし、線の寬端を持ちながら右手を以て驢馬を鞭ちたるに、驢馬の馳せ出すに従ひ線は解け且つ伸び、此方法に因つて野戰電線は遊撃隊に伴つて架線せられたり。

アビユー・ハムメッドの南に於て第二の重地はバルバルなり。サルダルは英國の汽船が尙數ヶ所の瀑布を踰ゆるまで之を占領するの意なかりしなり。然るにアビユー・ハムメッドの急變はサルダルを驚かし、バルバルの指揮官なるエマール・セキオスマンは後援のなきに阻喪し、各部落の二心に恐怖してバルバルを放棄せり。ハンタル將軍は八月二十七日アビユー・ハムメッドに於て此報を聞き、偵察隊を發して之を探らしめしに、四圍の諸國は皆埃及軍を期待するの狀あり。偵察隊は乃

ちバルバルを占領し、其結果をアビユー・ムメッドに報せり。但し此一隊は概ね亞拉比亞の別働團より成りたる者なり。

此一舉はサルダルの計畫に抵觸することを免れざりしと雖、サルダルは之を問ふに暇あらず。ハンタル將軍に命じてバルバルを占領せしめ、九月五日に至り全市に埃及國旗の翻翻たるを見たり。此時に方り砲艦も亦ナイルの上流に達し、サルダルは少數の従者と共に沙漠を騎行してアビユー・ムメッドに到り直ちに種々の經營に着手し、初めは咄嗟の間に成功を得べしとなせるも、翌春に至るまで之を實現するを得ざりき。

バルバルは沃土の中に在り、ナイルに沿ふて連亘すること七哩、分つて二市街となす。其一是十二年前ダルツ・シの爲めに破壊せられ、今ある所の者は之に代れる新市街なるが、其汚穢にして不健康なるに至つては兩者共に一なり。蓋し從來バルバルはソーダンに於ける商業の中心と稱せられたるに、英國の士官が此市に入りたる時僅に男子五千女子七千あり。土地は慘狀を極め、財産は空乏なりしと雖、土人の家屋は宏麗にして清潔なりき。

バルバルの陥落はオスマン・デグナのシユアキム並に紅海附近に於ける勢力を破壊し、曾つて鐵道布設の計畫ありたるシユアキム、バルバル間の道路は開通を得、商隊は十三年後初めて此道を旅行せり。

小砲艦隊はすでに第五瀑布を過ぎ、メタメーに於てマーマッドを砲撃せしも著しき成功なく、而してナイルが再び増水するにあらざれば歸航する能はざるが故に、暫く此地に止まれり。然れども最早大なる危険なし。何となれば川身廣濶なるが上に埃及人は左岸を守り、川居の人民皆埃及人に好意を表せしを以てなり。カッサラは其昔伊太利人がダルツ・シより取りたる處にして、今や其國人はアビシニアを去りたるも、尙少數なる伊太利の成兵あり。然るに一八九七年のクリスマスに至り、カッサラは大佐バルソンの率ゆる小守備隊に引渡され、大佐は埃及ケデーツの爲めに之を守ることとなり、ユニオン・ジャックとケデーツの弦月とは伊太利の國旗に代れり。

一八九八年の春サルダルは屢、カリファが來攻を計る事を耳にせり。蓋しカリファ之を企つること二回に及びしも、エマール互に相思みたるが爲めに志を果さず、

オムダルマンに退いて此處に大軍を集中し、マーマッドをコルドファンに留め、キチネルの進むを待つて其軍の前後を脅さしむ。

サルダルはウエーデー・ハルファより沙漠鐵道に由つて其軍をナイルの右岸に集中し、切に英國歩兵大隊の來援を求め、少將ガタクルは之に應じて來會せり。ガタクルは德量才幹あり、チトラル戰役に英名を轟かし、尋てボムベに赴き便毒の疫疾、土人の迷信と戰ひ、其後印度を去り、久しからずしてサルダルの援兵としてソーダンに送られじなり。將軍は中材瘦軀にして非常の體力と精力とを有し、器量勇氣兩つながら拔群なれど、唯其短處は躁急に在り、激し易きに在り、非常の活動力と雖、之を如何ともする能はず、而して往、其活動力の爲め疲憊に陥れり。

鐵道はナイルの右岸に沿ひ、アトバラとナイルと會流の處に到るまで務めて工事を急にせり。

英埃聯合軍はフォルトアトバラに達し、ラス・エル・ヒューディを距る數哩の地に陣營を設けたるが、これ清水を得るの便あるが爲めなり。

軍隊は此處に在つて進軍の命を待つ間に、遠くナイルを沂つてシンディを征す

る計畫を立てたり。マーマッドはメタムメを劫掠せし後、ナイルの右岸に屯營を布き、シンディに倉庫を作り、エマールの妻とその糧食の一部とを此處に留めたり。英埃軍の分遣隊はナイルを渡り、容易にシンディを略し、獨りチャリンを遣はしてダルウシの敗兵を追撃せしめたる處、彼等は、一百六十人の敵を殺したりと誇稱せしが、その地は即ちメタムメにして會つて其會長と人民とがダルウシの爲めに虐殺せられたる處なれば、チャリンは復讐を遂げて甘心せし者と謂ふべし。エマールの妻等オムダルマンに逃れたれども、稍下級なる六百五十人の兒婦は捕虜となり、この婦人の多くはソーダンの兵士に再嫁せり。茲に一言すべきはソーダン黒人は終身埃及の軍籍に在るが故に、妻帯を許され、其戰場に出づるまで相伴ひ、其時に至れば婦人は後陣の最も要害なる處に安置せらるゝなり。

第三章 アトバラ及びオムダルマン

ウエーデー・ハルフはアビー・ハムメドを距る二百三十四哩にして、隔つるに水なき大沙漠を以てす。今此兩地間に鐵道を布かんとす。何人も之を不可能となさざるなし。然れども斷乎として工事を始め、已に其半を完成せり。而して線路の一端はなほ敵の領土に在り。蓋し英國がマディー主義に對して用ひたる致死の利器は即ちソーダンの軍事鐵道に若くはなし。試に井を鑿ちたるに一鑿して潑然溢れ出て、透明清冽殆ど神秘の想をなせり。但し當時同一の方法にて地を掘ること八ヶ所に及びたるも、之を外にしては一滴の水をも得る能はざりしなり。

鐵道はウエーデー・ハルフに於てナイルに別れ、ニビア沙漠を過ぎ、一八九七年の末に至り、アビー・ハムメドに於て復びナイルに遇へり。之よりアトバラに達せんとするには、なほ一百四十九哩の距離を布設せざるべからず。

鐵道をして一刻も速にバルバルの下流二十哩なる第五瀑を通過せしむるは實に大計畫にして、鐵道は自己の築造に要する材料を運搬して次第に歩を進むるも、只困難なるは其沿道に於て枕木に要する木材をも得る能はざる事なり。アトバラよりカルトームに達するに先だつて、橋梁の架成を待たざるべからず。架橋工事は米國の工場と契約に及べり、これ英國に於ては米國の工場の如き短日月の期限を以て約束するものなかりしが爲めなり。而して米國は西部の河川に於て之と同一の架橋に従事せる經驗を有するものなり。サルダル・サー・ハルバルト・キチネルがカルトーム征服の偉功を立て、大鐵道の經營を遂げたる時は年纔に四十八歳、これ皆其開成の技倆に本づきたるは明かなり。ステューヴン氏は云へり、諸君はサルダルを以て苟も正當と視るときは直ちに之をなすの人なりと想像するなるべし。彼は決して躁急ならず、其自制持重の固き一步未だ堅實ならざれば敢て復た一步を進めず。此性質の實驗を経たるは即ちドンゴラ陥落後十八ヶ月の間カルトームに進むを猶豫せし時に在り、而して部下の士卒は全く主將の人となり信ずるが故に、相謂つて曰く「サルダルは勝

のにあらざれば戦はずと。サルダルの兵卒に若かず。何故に因循して來り攻めざるかを疑へり。カリフはオムダルマンの内外に大軍を集めて唯自ら守り、オスマン・ディグナ、マド(此二人は互に相憎めり)に命じ、ナイルの右岸に陣して敵の進路に當らしめたり。

一八九八年三月、英軍は已に進んでフォルト・アトバラに在り。バルバルの南二十三哩なり。此軍は埃及の歩兵三大隊、英國の歩兵一大隊より成り、英隊を率ゆる者は軍隊の右腕と稱せられたるハンタル將軍にして、マクドナルド之に隨ひ、而して少將ガタクルは印度を去つて間もなく英國より援兵を携へて來會せり。デーリ・メールの通信員はガタクル少將を評して曰く、

ガタクル將軍は大なる名譽を負うて來れり。將軍は機會ある毎に名譽を増さざるなし。其偉大なる天分は人間以上の精力を有し、疲倦を知らず。中材にして輕軀、其骨格は鋼鐵の如く、銅線の如く、人となりは寛和にして禮讓に富めり。其同列は之を稱してバック・エーカー將軍と謂ひ、頗る愛慕せり。或は其將卒を遇す

る稍嚴なりと謂ふ者あれども、將軍は部下の兵士の須用に心を用ひ、何人も其求むる所を得ざるなきかと私に心慮を費し、少しも倦む所あらざりき。

ソイダンのエマール・オスマン・ディグナが多年英人を惱ましたる事は他のエマールを合せたるより甚し。余は曾つて其人種の亞拉比亞に屬すると言ひたるも、其實然らざるに似たり。乃ち土耳其人の如きは其兩親の孰れか土耳其人なるべしとせり。之を要するに其純粹なる亞拉比亞人にあらずる一點は明かに世人の理會する所なり。オスマン・ディグナは將才を以て名あるにあらず、膽略を以て名あるにあらずと雖、才能あり、忍耐あるに至つては復た疑ふべからず。

近く英國より來れる兵士に取つてはナイルの右岸に沿ふて進む事は體力上非常の勉強を要せしも、尙能く三日間に九十八哩を行けり。而してフォルト・アトバラは白人にマリリアの恐れありしかば、獨り埃及人をして此に屯せしめ、歐兵はアトバラより上流數哩の地なるラス・エル・ヒューディに陣を布けり。此アトバラには初めて僅かの綠草あり。ソイダンに在りて罕に見る所なり。

英人と埃及人とが將に接觸せんとする眞實の敵はサルダルのにあらざしてソ

イダンなり。サルダルの軍隊はマーマドがナイルの右岸に在り、アルトラと青ナイルとの間に外ならざることを知り、日々之を搜索せしと雖遂に發見する能はず。然るにハンタル將軍は偵察の結果、三月三十一日に於てマーマドのザリバを認めたり。ザリバとは柵の一種にして、南阿にては車を用ひ陣營を繞らし、ソイダンにては槎枿たる樹枝を編みて之を築き、或は極めて高さものあり。土人はこれをして鐵條網と同じく犯すべからざる者とせり。サルダルの陣せるアトバラの地はナケトラと謂ひ、サルダルの營を距る二十哩に過ぎたり。曠日彌久の間、英軍は將校となく士卒となく頗る艱苦を嘗めたり。蓋し初めより熱帯に戦争すべき覺悟なりしかば、士官の如きも人毎に一枚の毛布を携帶せしのみて外套を有せざりしに、ソイダンに至れば日中は熾くが如き暑氣に拘らず、夜に入れば寒氣烈しかりければ、之が爲めに困苦を感じたるなり。ハンタル將軍の偵察隊の歸陣するや、復命して曰く、マーマドの陣營のザリバは高なり密なり刺多しと。攻撃の先鋒はカメロン(七十九步兵聯隊蘇國高地の人より成る)と定めらる。カメロンの服装は刺ある墨壁を侵すに適せざりしも、彼等は反つて此任に當るを喜びぬ。

攻撃は四月八日(グロドフライデー)の早朝を以て期となし、英埃軍は午前一時月明に乗じて進發せり。此軍は山歩兵野歩兵各一大隊及びマキシム砲の二大隊より成る。サルダンは遠距離の交戦に意なく、接戦を以て常となし、其法敵陣に突貫し槍を擲ち銃を放ち、棍棒を以て馬足を薙ぐに在り。其ビッグの兵を塵殺せしは此手段に由る。然るに今や英軍は遠方より巨砲を以て掃蕩を行ふが故に、彼の兵略は齟齬を生じ、バガラ騎兵は大に沮喪せり。獨りコルドフンより來れるチハデンは一死を分として、各己れの死するに先だつて一人なりとも異教者を殺さんと欲せしが、彼等は曩に神聖軍隊に編入せられたる者にして、深くアラアの助と仇敵の必敗とを信じ、以爲らく、若し戰死せば必ず天國に生ずべしと、已にして英人、黒蠻人、蘇山人、フライン等の混成軍は徐々蕭々整然として動き、黒白の兵士一主將の指揮に従ひ、一軍規の作法に由つて進行せり。初めの報告に據れば、ザリバは甚だ高く、陣營を環る三哩の長さに達せしが如し。然るに之に近づくや、其過算なる事を發見せり。内部には胸壁及び小濠の防備あり。初め敵は挑戰の様子なかりしが、英埃軍が爆彈を發射するに至り、彼等も銃を取

つて向ひ來れる山地人に不齊の射撃を加へ、而して騎兵の一大團は將にザリバを突出せんとするが如き狀あり。會、山地人の隊中に喇叭の響き渡ると均しく、此隊伍はザリバに向ひ、一語を發せず、一步をも亂さず、隊伍整然たり。忽ちにして倒せと叫ぶ者あり、衆皆肉薄し、暫時力を極めて引倒し、一條の道を開くや其處より陣中に斬入れり。陣中には穴あり、坑あり、蜂巢の如く、敵は其間に埋伏し、我兵が其上を踰ゆる時、下より劍銃を以て狙撃するが故に、容易に進む能はず。敵の騎兵法懦にして先づ奔り、黒兵は一團一團且つ逃げ且つ發銃せり。埃及人は敵營の他の一面より柵を破つて入りしが、彼等は山地人より先鞭を着けたりと稱せり。ニミアの部族に至つては多年其國を侵されたる恨を報ひんとて、敵の村墟を壊ち、敵の婦人を虜にし、毫も寛假する所なかりき。短兵接戦は約四十分互れり、而して其激烈なる戦闘に與りたる人々は其二分間なりしや二年間なりしやを覺えざりし程なり。戦は終れり。マーマドの軍は全滅し、マーマドも亦捕虜となれり。此際彼は獨りカルペドに座し、側に武器を置き、傲然として死を待つ者に似たり。英兵は之を引いて英將の前に至り、英將は彼に

向つて問ふ、

「汝はマーマドなるや。」

「然り余はマーマドなり。而して汝と等しき者なり。元帥なりとの意なり。」

「汝は何故戦はんとして此處に來りしか。」

「何となれば余は命ぜられたり。汝と同様なり。」

彼は純然たる亞拉比亞人種にして、その容貌は才智に富みしも殘忍の色あり。年齢は三四十歳の間にあり、寛濶なる股引とギンパーを着せり。ギンパーは綴合せる衣服にして、マディーの徒は今なほ貧人の章として之を服す。而して富裕なるものは金の刺繡をなす。

彼が死に臨んで傲然自若たるに至つては何人も驚嘆せざるなし。

此戦に英人は多く將校を失ひ、埃及人ソダン人も亦多く損傷し、總數一萬二千人の内死者八十一人、傷者五百人あり。然れどもマーマドの軍に至つては全く地球上其跡を絶てり。埃及人は歡喜措く所を知らざりしが、就中其士官の如き己れの訓練を施したるフェリヒンが精兵となりたるを以て狂喜して感慨に堪へざり

し者の如し。

オスマン・デグナ戦争の初め騎兵を率ゐて逃れ去り、神聖戦争に編せられたる黒人の歩兵のみ遼深の中に戦死し、エマールも多く陣歿に及び、ビシヤの如きも亦其中に在り、敗兵は沙漠に逃れ踪跡を失ひしかば追撃は甚だ大ならざりき。サルダルは數日の後バルバルに凱旋の行列をなし、ハンタル・パンシャはサルダルに陪し、騎兵之に次げり、老幼男女は街路を擁して喜色満面に溢れたり、蓋しかれ等は双方の政治を経験して英埃の政治に傾けるなり、行列の中にマーマッドあり、徒歩して従へり、土民は彼を見て深き感慨を催せり、即ち一年前まではマーマッド大王として威力を振ひ、彼等の部族チャーンをメタメーに虐殺せしに、今や斯くの如き末路に至りたればなり、これより四ヶ月は軍隊を休息せしめ、士官通信員等も亦休暇を得たり、ステイヴァン氏は此間を以て印度國疆の新戦況を觀んと欲し、ナイルを下つてウエーデー・ハルファに達し、此處よりソーダン軍用鐵道に乗りアトバラに至れり。

英埃軍がカリフと最後の雌雄を決せんとして次第にオムダルマン及びカルト

ムに近づき、白ナイルを浜らんとせしは一八九八年八月の下旬なり、已にしてオムダルマンの近郊に近づきて觀れば、村落の住民は皆逃れて人影を見ず、オムダルマンを俯瞰せる二山脈は一をケルレリと曰ひ、一をゲベルサルガムと曰ふ、其中間に平野あり、カリフの夢想に由れば戦争は此處に起り、異教徒は骨を曝すに至るべきなり、然るに事は全く豫期に反し、彼の兵は勇猛無比にして劍槍の戦には古來斯くの如き奮闘なかりし程なりしと雖、カリフは大砲に關する智識なかりしかば、其長距離に及ぶべき勢力を測る能はざりしは、抑亦敗を取りし所以なり。

平野の半は沙土にして半は青草なり、ナイルの河邊にはマデーの墳墓なる高塔峻嶒として聳ゆ。

オムダルマン市の壁外には數千の泥屋あり、こは全國より徴集せる兵士を置く處なり、英埃軍が山上に登りし時、カリフの兵はその前に陣し、長さ三哩の間に一列となり、列の深さは八人乃至十人にして旗幟を建てたり、時に八月三十一日の夕陽は已に沈み、翌九月一日戦争は開始せられたり。

午前六時半英軍先づ砲門を開き、ダルウヰシ之に應ぜり、英軍の進むや敵も亦進み、互に一直線を成すに至つて止まり、英人と埃及人と共に一列銃隊を作れり。僅々五分時間に於て斃死せる敵數の夥しき、白軍の曾て實驗せざりし所ならん。ハツガラ、デハディアは之を承けて來れり、英軍は又撃ちて之を殲し、遺屍累々たり。是に於て最早ダルウヰシの進む者なく、カリフの此一隊復た一人を留めず。初めカリフはその軍を三部隊に分ち、第一はオスマン・アツラク之を率ゐたるが、こは前項に述べたるが如く全滅に歸し、オスマン・アツラクも之に死せり。第二は綠旗兵にしてアブタラヒの長子シエキエド・デイン之を率ゐ、英埃軍の右側を衝くの目的を以てケレリに向ひ、第三は黒旗兵にしてカリフ之を率ゐ、其弟ヤグブ之を佐け、カベルサルガムの後に隠れて敵の左翼を包み、然らざればオムダマンの敵路を絶たんとするの計畫なり。

これより戦闘の一慘事に入る。第二十一投槍隊は先登の功を立てんと欲し、妄に馬を驅りワッド・ヘリーの率ゆるダルウヰシの前線を距る僅々二百ヤードの處に到りしに、突然峽口の目前に横はるを見たり、而して其外に黒頭の搖ぎて雲の如く

なるあり。

彼等は全速力を以て馬を驅りたるが故に容易に止まるを得ず、コールと云へる險阻なる涸溪に馳せ入れり、此襲撃は驚神動魄の談なれども、今茲に述べべき必要なし。只彼等の勇敢にして熱心なるを言へば足れり、戦友が傷兵を運するに方り、敵が無益に之を殺戮せし事を述べれば足れり。

最後の接戦はソーダン人埃及人とガベルサルガムに於けるカリフの部隊との間に行はれ、ソーダン人埃及人はリウイス・ペー、マクスウェル、マクドナルドの諸將之を率ゐたり。

大黒旗は彼等の眼前に翻れり、宛も瘴惡なる鴉が翼を展べて空中に舞ふが如くに翻れり。

夫れマディーの政治は如何に土地を荒廢ならしめたるにせよ、カリフが如何に虚偽狡黠と殘酷を逞ふしたるにせよ、ダルウヰシがオムダマンの戰場に顯はしたる比類なき忠勇と義信とは遍く人をして敬崇哀憐の情を起さしめたり。蓋し彼等は曾て河邊の人民を酷虐せし故、今や其寬慈を得るの望なし。是に於て彼等

が目前に擇ぶべき所は自殺するか若くは甘んじて虐殺を受くるに在り。戦況通信員の一人は曰く、斯くの如き勇敢なる舉措は歴史にも小説にも未だ會つて有らざる所なりと。善悪は姑らく之を置き、ダルマンは自ら信じて以爲らく、己れは其宗教の爲めに戦ふなり、教祖の爲めに戦ふなりと。このカリフの傷兵中敵の爲めに殺されたる者ありしが、これ實に己むを得ざるなり。何となれば、バガラの如き地に伏して一見死せるが如き状をなし、白人の士官が其側を過ぐるや、突然起つて之を撃つが故なり。而してこの事たる戰場に於て數百回の多きに及べり。官報に據れば死者一萬一千、傷者一萬六千なり。只如何にして斯く如き多數の負傷者を出せしや審ならず。英人と埃及人との損害は五百人を出てざりしと雖、其中には最も惜しむべき人あり。アトバラのザリバ攻撃は闘争と謂ふべく、オムダルマンの攻撃は戦争と謂ふべきなり。

オムダルマンの戦争は殆ど不可思議なり。されども其最大原因はカリフの怯懦なりしに因る。彼が擇びたる戦法は一種に止り、而も一部分の勝利すら得べからざる者なり。彼は曾つて其兵が常に白人の方陣を破れりと誇稱するも、復た斯くの如き事なきにあらずや。若し勇氣ありせば或は之を能くせしやも知れず。然れども我方陣が以前より大にして且つ堅く、之を指揮する者も亦以前に比して老練の將校なり。

オムダルマンはマデイが營壘として建てたる所の者にして、壁外の市は街路縦横土屋稠密なり。サルダルが其參謀及びハンタル將軍と馬に騎つて市に赴くや、英國聯隊と砲兵中隊と之に従へり。將にオムダルマンに入らんとするや、一老人が驢馬に乘じ白旗を掲げて來るに會へり。これ市民が降参の爲め使者として遣はせる者にして、戦勝者が市民を虐殺すべきや、將た又之を宥すべきやを問へるに對し、サルダルは之を宥すべきを保證せし時、老人は顔を解き直ちに之を市民に報じ、更に市内遺る所なく人をして徇えしめて曰く、抵抗せずして降服する者は罪を問はざるべしと。軍隊は遂に進んでオムダルマンに入れり。オムダルマン

は宛も兎圍の如く小屋より成れる巷は曲折して迷樓の觀あり。何れの處に於ても抑壓銷沈の痕跡を留めざるはなし。人民は其安全の保證を得たるより歡呼して戰勝者を迎へ、盡くそのギバを裏返せり。蓋し三時間前までは英埃人を殺さんとせしも、今や額手敬禮を行つて曰く、平和は君の賜なりと、抑此戰役たる彼等に取りては君主の變遷なり。彼等がカリフとバツガラの虐政に苦しむや茲に年あり。而してその外國人なるの點に至ては今日ナイル沿岸に勢力を占むる英人埃及と毫も異なる所あらず。彼等は已に戰勝者の信用を得るや之に向つて賑恤を請ふに至れり。但し此人民たるダルツイシにもあらず、又亞拉比亞人にもあらず、憐むべき黑人なるが、カリフのゴールドファン、イクトリアに兵を募りし時強ひて編入せし者なり。軍隊は終に進んでオムダルマンの大壘壁の前に來りしが、これ即ちカリフの要塞なり。壘壁は堅牢ならざるにあらず、然れども一面に於て階級なかりしかば防禦に適すべからず、而して曩に水路には英國の砲艦其任務を盡せしかば、益敵をして防禦する能はざらしめたり。

軍隊は進むに従ひ多數の男女が踉蹌として重き籃を運するに遇へり。こはカリフの積み蓄へたる糧食を掠め去るなり。壘中處として不潔らなざるなくカリフの居室と雖亦然り、只浴室のみは稍近世文明の設備を有せり。この時に方りカリフの護衛兵はなほ宮中に潜匿せしが、若し降参せば殺戮を免るべしと聞き、軍隊の前に來集して哀を請へり。其武器を引渡すに至ては最初少しく抗拒せしと雖遂に屈從せしかば、英兵は之を集め番兵を附し更に進んで寺院よりマディーの墳に到り其前に止りし際、不慮の慘事あり。これより先き壘外に屯したる砲兵は或る時機に於て此墳を砲撃すべき命令を受けたるが、恐らく其時機を誤りしなるべし。四個の炸彈は英軍の中に墜下し、其一は少年法律家ヒューバート・ホーワルドを殺せり。右はタイムスの記者として従軍せし者にしてウオタルムにて殺されたるガラン・ト・ホーワルドの一族に屬せり。

サルダルは黄昏の時親しく監獄に至り、チヤールス・ニューフェルト以下三十人の囚を釋きたるが、ニューフェルトは禁獄せらるゝ事十三年の久しきに及びしかば、今や驚喜して狂するが如く、活潑に談話をなして手口共に忽忙を極めたり。されど歩行

を得ざりしが故に、之を小駒に乗せ伴ひ歸り、ウインズトン・チャルチルは半夜其情報局のウインゲート大佐の事務室に在るを見たりと云ふ。

サルタルが軍を率ゐてオムダルマンの近郊に到りし時カリファはなほ壘中に在りと想ひたるに、彼は已に逃れたり、彼は武具を着けず、單身驢馬に跨つて其壘壁を後にし、沙漠に向ひたるが、此處には駿足の駱駝數頭之を待てり、蓋し彼の部下は一人として貳心を抱きたる者なかりしなり、英軍は其逃走せし事を發見するや直ちに第二十一槍兵を遣はせしも、馬疲れ路隔りて及ぶ能はず、彼は敗散の本軍に合し、ナイルを渡つてエル・オビードに向へり、これコルドファンに於ける彼の舊本城なり。

これより三日を経て九月四日に至り、英埃各聯隊より分遣せられたる將卒はナイルを過ぎてカルトームに至り、ゴンドンの紀念葬儀に臨ましめ、ユニオン・デックと埃及の國旗を擧げ、神よ、女皇を祐けよと埃及の國歌とを唱ふるや、アングリカン、カトリック、プレスビテリアン、メソヂイストの四牧師は徐々として進み、プレスビテリアンの牧師は第十五サルムを読み、アングリカンの牧師は祈禱を導き、

カトリックの牧師はゴルトンの兜を地に置き、無帽の儘紀念の祈禱をなし、喇叭の輓歌を奏するに従ひ、ゴルトンの好みたる神歌、吾と共に居れを歌ひ、參會者は皆深く感動せり。

吾人はゴルトンの遺骨が何れの處に在るを知らず、然れども其武職と荒園とは長く其人を念はしむ。

この美舉と相反する者を佛國の雜誌に謂へる、恨事となす、而して吾人は實に此語を以て之を稱せざるを得ざる者なり。

マデイの墳は戦争の際砲撃の好目標を成せり、これ素とマデイの死したる室の上に築きたる者にして、十年の間ダルク・ヴィンシは最も神聖として崇敬せし處なるに、今やサルダルは命じて之を毀たしめ、且つ屍骸を發きて四支と胴とはナイルに投じ、首はカイロに送り、クロイマル卿は又之をウエーデー・ハルファに送りしが、これ曩にアビシニア王ジョンの首を埋めたる所にして、又今アブタラ・アメドと首を葬りしが、其地は彼の生誕の處を距る遠からず。

マデイはカリファと大に其人となりを異にし、凡そマデイズムに關係したる慈悲

の行爲は彼を外にして他に聞く所なし。フリット・オスワルドの言ふ所に據れば常に微笑を含み態度爽快にして性癖偏倚する所なく、基督教の僧侶が其兵士の爲めに害せられんとするや、之を保護するが爲め己れの乗れる駱駝の前を歩行すべき事を命じ、オリヅ・エ・ペーンが沙漠中に惨死せしを聞きし時深く之を悲しみ、爲めに祈禱文を讀みたりとはサラティンの語れる所なり。彼は又多く捕虜を恵み、或は己れの食を與へ、或は職業を授け、或は少許の金を施せり。

マデーの墳墓を破壊せし事に就ては大に英人の感情を激せりと雖、其墳墓を破壊し其屍體を移せしは全く政治上の理由あり。蓋し其墳墓の在る所屍體の横はる所は、凡てマデーイズムの集合點となり、巡拜の場處となるべきが故なり。

アブタラ・ア・メッドより言へば、其骨がナイルの水中に沈むも、ソーダンの沙底に埋まるも亦た何かあらん。吾人は只文明教國の人が政略の爲め此舉を必要とせしを悲まざる能はず。而して此舉たる恐らくはチャールズ・ゴルドンの可とせざる所なり。況んや數時間以前に行はれたる己れの紀念祭に關聯せるをや。

第四章 フアシヨダ カリファの末路

フアシヨダ事件は瑣細なるに拘らず、動もすれば歐洲を震動せんとし、併せて佛國人心に苦痛の種を播きたる者なり。ウィンストン・スペンサル・チャルナルは曰く、

世界は佛國・マルシャン・ミッシンの狡計を審にするや否や覺束なし。蓋し佛國政府がナイル上流の世に知れざる澤國を占有せんが爲めに危険を冒して小遠征をなしたりし事は吾人の明言する所なり。然れども他の事情を斷定するは能くする所にあらず。アビシニア人が何事に與らんとせしか、佛人が何等の力を彼に盡せしか、何物を以て彼等に略はしめたるかは秘密の中に在り。チャルナルの「リ

ヴァー・ウォア」

フアシヨダの企畫は大統領フォルに發せし者の如し。而してオルレアン公子ヘンリーが新聞紙の通信員としてアビシニアに到りし時如何なる規畫を抱きたるや

審ならずと雖、佛人が夙にアビシニアの歡心を得んと欲せしは疑ふべからず、而してアドワに於て伊太利軍を敗りたる武器は多く佛國海峽に由つて供給せられたる者なり。

ファシダ事件の世に知られたる二三の事實を略叙すれば左の如し。

一八九六年の末、佛國の小遠征隊はナイルの上流地方に達せり。右は八人の士官下士と其率ゆるセチガルの黒兵一百二十人より成り、二年以前阿非利加の西岸を出發せし者にして、其目的地を秘せしと雖、英國政府は之を探知し、佛國の内閣に豫告して曰く、若しナイル河邊なる埃及の舊赤道領に干涉せば、英國は之を以て敵對行動となすべしと。此時に當り、英國はドンゴラ征服とカルトームへの進軍を謀れる際にして、準備未だ全からず。然れども一八九七年の初に至り、大佐マクドナルドを遣はしてウガンダを征せしめ、大佐の遠征隊はモンバッサに上陸し、内地に向つて兵を進めたる處、不幸にして本軍と合する筈なりしウガンダのソダン兵に叛亂を企て、英國の士官は力戰死を免るゝの暇あらず、之が爲めにカルトームに向へる軍隊と策應すべき計畫は齟齬を來せり。

オムダルマン戦争の數月後、即ち一八九八年九月七日、ダルゲシンの一小汽船は徐々ナイルを下りしが、これ曩にゴルドン將軍に屬せし汽船の一なり。已にして其英國の陣營と砲艦に接近するや、初めてオムダルマンの陥落を知り、降服に及びべり。乗員は一ヶ月以前カリファの爲めに穀物を求むる目的を以て他の一汽船と共にナイルを流れり。然るにファシダに近づきたる時、不意に黒兵の銃撃を受けたるが、之を指揮せしは白人にして、その國旗は未だ會つて見ざりし所のものなり。是に於て蒼皇歸航に及び、主將のエマールは先づ其兵士を上陸せしめ、稍小形の汽船をオムダルマンに送り返し、遭遇せし事件を報告せしむると共に命令を仰がんとせり。

小汽船の亞拉比亞人はファシダにて目撃せる國旗の如何を的確に解する能はずりしも、英國の士官は汽船の木造船よりナイフを以て彈丸を抹出して之を檢せしに、最近の特許に屬せる佛國の彈丸なりき。即ちコンゴより來れる白耳義人の發射せしものなるか、將た伊太利遠征隊の發射せしものなるか、抑又ウガンダ若くはアンヨローよりナイルを下り來れる英人の發射せしものなるか。

ナイルの英軍は只時日を待て其真相を知るのみサルダルは此目的を以て五隻の汽船と夥多の兵員を従へ自らナイルを下つて進み三日にしてダルヴィシの陣營を發見せしが、一小汽船之を警衛せり我軍は此汽船を撃沈しエマールの兵を逐ひ散らし更に上流に進航せし處兩岸は皆沼地にしてナイルの本流は其水を排しつゝあり生ずる所の者は惡草と灌莽とのみ已に十日を過ぎ十八日フシダに近づきサルダルは此處に屯在せる奇怪の歐人に使節を送りしに少佐マルシヤンは直ちに之に答へ己れは赤道ツィダンを占領すべき佛軍一部の指揮官なる由を言ひ且つ禮辭を以てサルダル近日の戰勝を賀し又佛國の名を以て之をフシダに招請せり。

此小軍は瘴氣の沼地に打上げられ文明世界との交通を失ひ而して又退却の途あるを見ず蓋しこの地はエミン・バシヤの時代には政府の所在地にして官衙も之ありしなり唯その武官に至つては已に費消して餘る所のものなし佛人は突然英人を見て驚けり而して之より先き土人は不平を抱きダルヴィシの來寇を促すの恐ありし處英人の來れるが爲め稍安堵を得たり。

佛人が中央阿非利加の沙漠を越えて進みたる事は實に非常の偉蹟なり其ナイルに達するまで二ヶ年を要し、シャルチルの言に従へば殆ど六ヶ月間全く人間の皮膚色を失へり。

彼等は蠻人と戦へり熱病と戦へり群山を踏えたり深林を穿てり五晝夜の間深き淵に達する澤水に立ちたる事あり之が爲め全隊の五分の一を失ひしも遂に能く使命を遂げ六月一日フシダに達しナイルの上流に三色旗を建てたるなり。

彼等の英人を迎ふるや殷勤を極めたるがサルダルは敢へて佛蘭西の國旗に干渉せず又其旗の翻れる廢壘にも干渉せず舊政府の留めたる他の保壘の一角に莊重の式を以て英國及び埃及の國旗を掲げ守備の爲めソィダン兵の一隊と大砲六門を留め大佐ヂャクソンをして之を監せしめ自身は其餘の兵を率ゐてオムダルマンに歸れり。

佛國人がフシダを占領し本國に二倍せる土地に權利を扶植するの報告英國に達したる時は、上下方にオムダルマン戰勝を祝せし際なり嗚呼親交國は英國戰

勝の最好果を黙奪せんと欲するか。數週間は英佛兩國互に相怒視せり。然れどもフシダに於けるマルシンの境遇たる到底守る能はざる事は明白なりしかば、佛國政府は遂に屈讓に及び、外交の當局は西部及び中央ア非利加に於ける佛國の勢力範圍に同意して兩國の争を落着せしめたるが、フシダ問題に關し佛人の憤慨は今日に至るも尙未だ止まず。フシダの佛兵は本國の訓令を待てる間熱病の爲め大に苦惱せり。而して士官等はヂクソン大佐と和好の關係を維持し、就中マルシン少佐とヂクソン大佐とは最も親密の間柄となれり。然れども職務上互に相警戒し互に相監視せしは當然の事と謂ふべし。

十月中旬カイローを経てマルシんに宛てたる公文はサルダルに達し、サルダルは之をフシダに送り、マルシンは直ちにカイローに赴き親しく電信に因て本國政府と通信せんと欲し、己れの次席なるヂェルマン大尉に部下を托し嚴命を下して曰く、宜しく英國の守備兵と和好を保つべしと。然るにヂェルマンはマルシンの如き持重なく深慮なく、偵察隊を内地に送り土人と争端を開きてサルダルと

マルシンと約定せる區域外に出兵せしかば、遂に英の守備隊と釁を生ずるに至り、双方の兵士は炎熱疫疾と同調とに疲倦し一活動を望む折から、形勢頗る切迫せしも、ヂクソンの忍耐にして慎重なる、其部下を戒しめて列外に出でしめず、而して又萬一の備を怠らざりき。

已にしてマルシンはカイローより歸り此事を知るや、深くヂェルマンの僭妄を責め、又ヂクソンに向つて悔恨の意を表せり。マルシンはフシダ放棄の命令を齎らし、佛人は將に退去せんとするに臨み壘上に掲げたる國旗を降せしが、此時英國の士官等は心を用ひて此不祥なる儀式を見るを避けたり。三色旗の降下するや一人の佛國下士は旗杆の下へ幕進して之を地に仆し、悲憤の極拳を揮ひ己れの頭髮を引裂けり。

此一隊の佛兵は恙なくアビシニアを過ぎて印度洋上の佛國殖民地オボークに達し、其處より本國に歸りしが、マルシンのみは捷路を取り兵士に先だつて歸着せり。其英國に上陸せし時キチネル卿は之を款待し、少佐がフシダ事件の終始行動の最も卓偉なる事を贊揚せしと云ふ。

巴里に於ては狂熱を以て少佐を迎へたり。然れども當時はドレーフォー審問の際し佛人は自國の政府と英國に對し激昂甚だしかりしかば、マルシャンをして成るべく公衆の目に觸れざらしむを得策とせり。而してマルシャン自身も亦愛國の眞情よりして之を希望せり。キチネル卿が英國に歸りし時公場に於てマルシャンの人となりて説くや一にして足らず、毎に尊敬の意を表はし殆ど傾倒を極めたるが如し。

一九〇〇年の夏、マルシャンは命を受けて在清の佛軍に赴くこととなれり。巴里の國民黨はなほ之を一個のブーランゼーとなすの望を捨てず、其出發に臨み停車場に於て熱心なる言動を示せり。

オムダルマン已に陥りカリフが殘兵を率ゐるコルドフアのエル・オペードに退却するに當りサルダルはナイルの東西に散在せるダルヴィシを一掃するに意を用ひたり。カリフの姪アーメッド・フエディルは尙大兵を擁せしがこれ皆シアキム周圍の諸國より強ひて軍籍に驅り入れたる者なり。オスマン・ディグナは一將アーメッド・ラエディルの處にありしも、アトバラの敗將マーメッドを助けんが爲めにメタ

ムメーに赴くべき命を受けたり。而して爾後ベッガラと共にメタムメーを逃れ、一九〇〇年の初めエル・オペードに至つてカリフと合せり。

伊太利の所領カッサラも從來ダルヴィシの占領を蒙りたる處、英國の大佐バルソン殘兵と別働隊(ソードン人亞拉比亞人)を率ゐて之を取り、此地を以て英國の治下となせり。バルソンはオムダルマンの頭末とアーメッド・フエディルが大軍を擁してアトバラの上流に在るを知りしかば、一計を案して以爲らく先づ嶮強なるゲダレフの都邑を襲ふて之を取り、アーメッドがナイルを渡つてカリフに合せんとするの途を斷つべしと。

バルソン大佐のゲダレフ遠征は此戰役中最も赫々たる者にして、チャルチルは之が爲めに十五ページを費せしも、今や斯くの如く詳に叙するを得ず。アーメッドは一旦力敵せず、ゲタレフを敵に委せしも復び兵を返し、逆にバルソンを圍みし處、遂に又撃退せられたり。バルソンは其援軍の將ルイス・ペーと共に追撃して綠ナイルの岸に至り、アーメッドの軍はローザールと稱する地點に於て河を渡つて逃れんと欲し、此處の戰に多數を失ひたるも遂にダケイラに至り河を渡るを得た。

りダケイラはローザル瀑上に在り。彼等は途すがら劫掠を行ひ、白オイルに星馳し、河を過ぎてコルドファンに入れり。但し其道はベッガラの中に取りれり。カリファブダラヒーの生長したるはコルドファン。此地方にして、今や其人民の中に潜伏し其父の墓に至り、拜跪之に久しく祈禱を行ひし後、從者に誓つて曰く、余の夢示を受けたるマデイの豫言は已に遂げられたり。オムダルマンを繞れる平野には不信徒の屍體狼藉なりしが、此不信徒は敵にあらずして此役に熱心ならざるダルヴェイシなり。即ち成功は生存せる人々の上に係れりと。

エル・オベードに穀物貨財及び武器を貯へたる大府庫あり。カリファはこれに據つて其軍を再造せんとせり。サルダルはカリファを追踪せしと雖、其位地堅固にして成功を必し難かりしかば再び無水の沙漠を過ぎ、暫く最後の打撃を加ふべき企圖を中止せり。

中佐ウインゲートは埃及に於ける情報局の長官として有名なりしが、一方に於てはカルトームの知事たり。一八九九年十一月二十四日即ちオムダルマンの戦争より十四ヶ月の後、追撃軍の指揮官として進行中、間隙よりアブダラヒーの近距

離に在りとの報を得、夜間進んで一帯の丘陵を占領せしが、天明に及びダルヴェイシの陣營を俯視して敵の情形眼中に在り。已にして暫時激劇戦の後ウインゲートは咄嗟に全軍を進めて敵營を掃蕩せり。カリファは萬事休するを見て肯てその陣を離れず、其兄弟及び重なるエマールと共に泰然として天命を待ち、主徒盡く一團となつて死を同うし、その後には馬の遺屍あり。カリファの親兵なる黒人も亦皆斃れて地に伏し、カリファの處より十ヤードの處に一列として其面は敵に向へり。ダルヴェイシは其主の死を知るや一齊に降参せり。而してカリファに殉せしエマールの中アリスッド・ハリニー並にアーメッド・フェデルあり。

陣中には六千の婦人小兒あり、戰士の捕虜となりたる者凡そ四千人。これマデイズムの滅亡なり。三月英佛はファシダ問題の條約を批准せしが、佛國の人民と兵士とは折角蠻地の廢壘に掲げたる國旗を撤せざるを得ざるに至りしを憤つて已まず。今日なほ然り。

英佛の間に勢力範圍の疆界を劃し、西は佛國に屬せしめ、東は英國に屬せしめたり。

勢力範圍とは某の文明國が豫め列國より其勢力の範圍たる承認を得て征服し統治し、其他隨意に處理する事を得べき國土の區域を云ふ。斯くの如にして佛國の勢力範圍は一八九七年三月の契約に據り、アルジェリアのヒントラント(中にワダイのマサルマン大帝國とバジスミール、カチムを含む)チヤド湖の北東岸とを包括す。チヤド湖の北東岸は多年英佛兩國の争點たりし處なり。佛國は又トリポリの南方なる領域を得たるが、右は内地に通ずる主要なる商路を扼するの利あり。而して後年伊太利との争端をなすべき者なり。又南部に於ける佛國の勢力範圍はコンゴ自由國に接す。佛國はバル、エル、ガザルの沮滌を通じてナイルに入る諸川の航權を有し、ナイルは海に達する公道として白耳義、獨逸、伊太利と共に之を用するを得。而して之が報酬として佛蘭西は英埃のナイル流域に於ける事實上(若し法理上にあらざれば)の權利を認む。之を要するにソリスベリ卿とデルカセー氏との外交術と遠慮とは恐るべき戦争を防止せり。然れども平和の爲めに自國の正當なる口實を犠牲となしたりとの譏は兩つながら免れざりしなり。

第五章

トランスヴァール

大統領クルーゲル

拙著第十九世紀の阿非利加に於ける歐羅巴中南阿に關する一章は一八九四年の屬稿なり。政治文學界に重きをなせる一紳士は之を評して、著述の時に至るまでの南阿歴史として善く要を得たる者なりと云へり。而して余も亦竊に自ら然りとなすなり。然れども爾來此地に於ける事變は急轉直下の勢をなすが故に、一八九四年に吾人の全く知るに及ばざりし人士にして今日其姓名の戸傳家誦を致す者あり。

余の南阿略史は一八九四年に終り、正にこれオーレンツ自由國が平和にして繁榮なりし時なり。トランスヴァール一名南阿共和國が近世文化の侵入を拒み、一方に於てウイトランダル輻輳に因つて大に金錢上の利益を占めたる時なり。余

は思ふ、ウイットランドと云へる語は未だ余の著書に出てざりし者なり、此語は和蘭の訓話に従ひオイトランドと讀むべし。

トランスヴァール共和國は英國の勢力範圍に入れる地方に在り、而して未だ曾つて干渉を受けざりしが、一八八七年其邊隅に住する蠻族の脅す所となれる處共和國は固より金銭を有せず、而して大統領バルジャルスの威權は市民の半数より無視せられたる故實際は政府をも有せず、従つて自衛の道なく、何等の舉に出づる能はず、遂に保護を英國に求めたり。

此協商の衝局に當りたるサー・シオフィリヤス・シゴプストン深く共和國の狀態の望なきを感ぜり、何となればデラス族が此國の人口稠密なる一大地方を劫掠するの際なりしを以てなり、蓋し其心中にはボア人の請求を承諾するは未だ早計なり、若かず、少しく延引して和蘭農民が滅亡を免るゝには併合の外他に途なきを認むる日を待たんにほと、時なるかな、三千人の農民は英國南阿領に編入の請願書に連署せり、英國政府は深く思慮するに暇あらず、人道の名の下に直ちに責任を受けたるが、併合の數週以前ボア大統領のバルジャルスはラートに演説をな

し、人民に告ぐるや、彼等は信神の心を失へり、自恃の心の失へり、相互の依信を失へり、若し武器を執つて蠻人と戦はゞ自滅の道なるが故に、彼等は今や英政府と交渉せざるべからず、而して之に就ては剛膽快活ならざるべからずと。

一八七七年四月十二日併合の公表あるや、人民は靜穩に満足の意を表し、落々合ひ難きボアの首領等も亦皆新政府の下に職を受け、獨りジョーバルト將軍のみ英國の臣民たることを拒み、クルーゲルは英國の官吏となりて俸給を受けたり、大統領バルジャルスは私財を公庫に收め、ケープ・コロに退隱して其處に終れり、トランスヴァールの併合に就き英國は六百萬磅を費せしが、その中カプファアの會長セコニート交戦の費を含めり、トランスヴァールは二十五萬磅の負債ありしに拘らず、其國庫には僅に十二志六片を有せしのみ、然るに地方の自由民が納税を拒みたる爲め政府は目下之を償却す、べき方法なく國を擧げて癩痺の狀態に在りき。

一八七九年に至りトランスヴァールはその負債を脱し復び平安を得たり、然るに市民等は危難を免れ、蠻族の侵略を免れ、其國の破産を免るゝに至るや否や、昔日

の如く英國を憎むの情を生ぜり蓋し此情は彼等の祖先が和蘭より移住せし以來世襲せし所にして英人が己等を抑壓すべしと信ずるを以て愛國なりとせり而してボアの愛國心ある新聞紙は人民の變節を責めて曰く、危険の事情にして繼續せば吾人は英國々旗の下に聯邦を冀ふべしと言ひたるは數ヶ月以前にあらずや吾人は何れの日に於ても善良にして堅實なる政府が無政府にも愈る事を知ると。

不幸にして大佐サー・オーウェン・ランヨンはサー・シオフィラス・シタプストンに代りしが、ランヨンは嚴酷にして專横の人なり蓋しトランスヴァールは堅固なる政治を要するも又之と共に寛裕なる取扱を要す。

四圍の部族の勢力を打破し而して永續すべき堅固の政府を立つるまでは、トランスヴァールは殆ど國家として立つを得ず此國が併合以後の歴史は其大統領の個人の歴史と謂ふべしこれ余が十九世紀史の叢書に於て好んで傳記を挿みたる所以にして今又大統領クルーゲルの事に就て述ぶるあらんとす但し其出典は一九〇〇年六月の「マックグリア」雜誌に出でたる著名の南阿記者エドマンド・ガレン

ト史の叙論なり。

ステファナス・ジョアンテス・クルーゲルは一八二五年ケイプ・コロニーに生れ英國の臣籍に在り其祖父は獨逸人にして和蘭東印度會社よりケイプ・コロニーに派遣せられ其用務はキャベージを種ゆるに在り會社の船が同地に寄航の際之に鹹菜を供給するに在り彼はウイトランダルなり従つてケイプ・コロニーに於ける純粹の和蘭移民より冷遇を受けたり然れども其種族の婦人と結婚の結果己れは其子と共に全く歸化するに至れり。ポール・クルーゲルの父はコロニー疆界の農場に於て牧畜を事とし一八三七年大旅行の起るに當り彼は其第一伴に在らざりしと雖其後亦隊を結んで旅行せり途中蠻族と戦ひ屢々危難に瀕せしも遂にラ
イジャル 壁を排列して 困つて之を脱することを得たり或る場合の如き五千人のマテロブ戦士に襲はれたるがポール・クルーゲルはなほ童子の身を以て成人同様の働をなせり。

五十輛の車を連結して方陣を作り多數の農民は其眷族と共に敵の攻撃を待てり蓋しボア人は車上に住し又凡ての器財を載することゝて其車の製は巨

大にして天幕を蔽へり。此方陣は敵の槍を防ぐには最も効力あり。敵は槍を擲するに皆中途に落ちて達せず。而して車と車との間隙には含羞草の束を綴つて裸賊を防ぎ、ボアの成人と童子とは車を守りて敵を銃撃し、婦人は近く其背後に在りて装弾せり。黒人は一團となりて車に肉薄せしも味方の屍體に妨げられて進む能はず。非常なる損失を受けて退却し、ボア人は僅かに二人を失ひしのみ。之に繼いで二年の間クルーゲルは毎に防戦に與り、今日所謂トランスヴァールの國よりマテイベールを驅逐せり。

フィッパトリック氏はクルーゲルが野蠻人と争闘せし時の事を記して曰く、一日少年のクルーゲルは歩行にて遊獵をなし一丘を攀ぢて其頂上の平地に達せり。之より先き讎敵の土人は之を見たるが茲に至り彼を襲はんとして或は丘を攀ぢ或は丘の四方を圍めり。クルーゲルは以爲らく己れが丘を降り盡すまでには已に平地に居る敵の爲めに路を絶たるべし。此際出づべきの手段は只威壓在りと。即ち敵より十分見るを得べき突出せる巒角に進み徐に其銃を地に置き靴を一足づゝ脱ぎて其中の沙を排出して復び之を穿てり。此間敵

は何事をするならんと止つて注視せり。彼は再び銃を執り丘背の擬軍に向つて初めに右に揮り、次いで左に揮り、宛も丘陵の各端を繞つて突撃すべき命令を傳ふる者の如し。カッパルは之を見て伏兵ありとなし倉皇退却せり。

ミナルヴァと雖ユリセスにこれ以上の智を貸す能はざらん。

ポール・クルーゲルは十六歳にして野戦旗手なりしが、數年ならずして將軍となれり。

ボア中疊に「大旅行」の一部をなし、而して最初ナタルに殖民し、尋てヴァールを超えたる者は後來來れる者をウイトランダルと呼び、全力を盡して其政治に關係すること妨げ、之に相互の間に争闘あり、終に四個の共和國を立つるに至れり。彼等は共に一のヴァルクスラッドに議員を撰出するも、各自國の大統領を有せり。

この共和國はライデンバルグ、ゾートハンズバルグ、ポッチェフストルーム、及びツトレヒトにして四色旗を定めしが、これ今尙トランスヴァールの國旗たり。ポッチェフストルームは舊共和國にしてブレトリアス大統領となり、クルーゲルは軍の指揮官たり。時に年三十歳、大統領と共にオレンジ自由國をポッチェフストルーム共

和國に併せんと欲し、クルーゲルはその疆に侵入し、ヴァールを過ぎてプロームフンタインに進めり。然るに平生敵視せる一共和の市民豫め河岸に待ち之を攻撃せり。平和の成るやポール・クルーゲルの仲裁を以て侵入に與りたる自由國人に罰金を課して解放せしが、ジームソン侵入の始末は殆ど之と其揆を一にし、只其役者の立場が相反せしのみ。

クルーゲルは一たび其死を免れんが爲めにオーレンジ自由國に逃れたり。而してトランスヴァールの政治は十年の間叛亂あり、獄訟あり、救免あり、放恣の黨争あり、殆ど混亂を極めたり。

諸共和國が聯合に合意せし時、プレトリアスはトランスヴァール即ち聯合共和國の大統領に撰ばれたる所、一八六〇年に至つて其地位を失へり。此時に方りクルーゲルは其後任たらんと欲せしも、彼の黨は未だ勢力を得ざりしが爲め市民は之を捨て和蘭の牧師バルジャルスを撰舉せり。此人はケイプ・コロニーに於て異端の罪に問はれ、亡命してトランスヴァールに來りし者なり。而して其實クルーゲルとジューバルトの二人はバルジャルスに比して一層強固なる要求を有せしなり。但

しクルーゲルはドッパル黨の首領にして此黨は進歩思想と近世の改良を嫌忌する教法家なれども、バルジャルスは教育あり且つクルーゲルより進歩したる意見を有し、鐵道教育の發達を願ひ、移民を誘引し、國債償却の道を講ぜり。然れども彼の人民は納税の意なく、クルーゲルは事毎彼を沮せしかば意の如くなる能はざりき。

ボアの農民は單に經濟上政府を扶くるを欲せざるのみならず、カッファアの會長セココニと長日月の戦争方に起りし時にも亦戰役を拒めり。是に於て大統領は己れに在りては名譽を損し人民に在りては侮辱を招きたる一事件の後、人民の一人に向つて己れを殺すべき事を求むるに至れり。

從來英國はトランスヴァールの内政に干渉せざりし處、一八七七年に至りトランスヴァール住民の半數は英國の力に因て保護を得るの外他に方法なかりしが如し。クルーゲルは其僻地の農民と共にバルジャルス並に其率ゆる進歩黨を除かんと欲せり。

一八七七年合併の成るや、トランスヴァールのボア人は獨立時代に得る能はざり

し利益を得たり。然るに合併より四年の後彼等は此契約を悔恨せり。吾人はなほ記す。ジョージ・カンニングが莊重なる外交の辭令中に引きたるアンドリュー・マルヴェルの詩句に云ふ、和蘭人の賣買に關する過失は少きを與へて多きを求むるに在りと。南阿に於ける和蘭人の子孫は實に其例證なりと謂ふべし。

一八八一年英國は讓與の形式を以てトランスヴァールを其住民に交付せしが、其國民の防禦に就き英國が人命財産を失ひ併せて經濟上の困難より之を救ひたる等の事を斟酌して或る條件を設け女王を以てトランスヴァール國の君主と認めしめ、英國代官の住所をプレトリアと定めたり。但し彼は内事に干涉するの權利を有せず、纔に領事若くは公使の地位に過ぎざれど、四隣の蠻族と文明國との間はず凡て外交の關係は其掌中に在り。白人は市民と同一の權利を有し、同一の租税を納め、トランスヴァールには奴隸を置かず、黒人を善遇すべき等は條件の重なる者なり。而して國疆は委員の定むる所にして、これを踰えて遷移をなし侵略をなすを得ず。是等の外なほ甚だ緊要ならざる規約あり。

然るにトランスヴァール人は一般に疑て以爲らく、英國は規約を廢し不平黨に國

土を引渡すの意ありと、一八七九年四月ミカエル・ヒックス・ビッチは本國に通信して云ふ、トランスヴァールの智慮ある人士中には吾人をして此國を去らしむべしと思ふ者あり。蓋し此人民に我政府の實權を覺らしむる實際一大難事なりと、一八八三年の終トランスヴァールは英國に使を遣はせしが、其目的は一八八一年の規約を商議し或條件の免除を得るに在り。使節は三名にしてクルーゲル之が主たり。英政府は該國の外交條約に於ける女王の可否權を維持して彼等が獨立の主權を得んとするの要求は絶對的に之を許絶に及びたるも、規約中の瑣事に至つては改正を許せり。譬へば將來ポア政府の外交を監すべき英國代官の住所をプレトリアとなさざるが如き是なり。而してトランスヴァールは公然南阿共和國と認められたり。

一八八一年の規約を改正せる第二規約書は一八八四年二月二十七日を以て調印を了れり。

この協商の結果としてクルーゲルは倫敦の流行旅館に寓し、新聞紙上に公告して英人のトランスヴァールに移住を勧誘し、約するに歡迎、保護及び和蘭人と同一

の權利を付與すべき事を以てせり。

クルーゲルは又和蘭獨逸に赴き移住を懲慥せり。

一八八一年に至りトランスヴァールは三頭政治となりたるが、三人は各意見を異にし互に相疾視せり。三人とは即ちクルーゲル、ジューバルト及びブレトリアスにして、クルーゲル最も勢力を占め、一八八三年に至り南阿共和國の大統領に撰ばれ、繼いで三回重選せられたり。但し大統領の任期は五ヶ年なり。

一八八三年ジューバルトはクルーゲルと大統領の撰舉を争ひしもクルーゲルは詐偽の手段に因て當撰を致せり。蓋し大統領を撰舉する事を得る者はウルクスラードの議員二十三名にして、ジューバルトは實にウルクスラードの撰擇せし所なるに、反つてクルーゲルの爲めに敗られたるが爲め頗る落膽し、其黨派の如きも亦失望を免れざりき。然れどもジューバルトは以前トランスヴァールに於て選舉干渉の結果内亂を醸したる事を記憶するを以て、二年の後此事に就き人に語つて曰く、かの事たる不義不正なりと雖、余に在つては之が爲めに血を流して更に一の不義不正を犯す事をなさざるべしと。

此際に方りクルーゲルは獨り大統領の撰舉に干渉せしのみならず、ウルクスラード撰舉人なる第一級の市民の投票にも干渉を行ひ、己れに左袒すべき人のみを以てウルクスラードを組織するに至らしめ、且つ又法曹の抗議を無視して大審院の判事を左右せり。

クルーゲルは前年ジュームソンがトランスヴァールに侵入をなせし時、深く之を咎めたる事あり。然るに己れが大統領となるや間もなく英國の勢力範圍に同一の侵入を懲慥せしが、英國の勢力範圍は規約に定めたる所なり。又南阿共和國とケープコロムニア間の通商は自由なるべき約束なるに、クルーゲルはヴァル河を渡るに必ず通過すべき淺瀬を封して英國殖民地との通商を遏め、トランスヴァールとの貿易は是非とも葡萄牙の領内を過ぎざるを得ざらしめたり。これ新鐵道の利益を起して私利を營せんとするの意に出でたるなり。

不幸にして聯合の後サイ・シオフィラス・シニブストンの後任者が施政の局に當りし時、英國政府はボア人の疾苦を鳴らすべき原因を作れり。サイ・バルトル・フリヤは一八七九年四月ブレトリアより其妻に與へたる書簡に曰く、ボアの大多數の人

民を激發し、煽亂者をして勢力を得しめたる所以は、聯合にあらずしてシキブス
ンが政府に立ちたる時の約束と期望とを遂行するを怠れるに在るは明かな
りと。

シオファイラス・シキブストンはボア人が其朋友として具瞻せし所の人にして、其英國
を代表してプレトリアに入るや數千人の歡迎を受けたり。然れども兩黨の間に
は絶えず激動あり。一は獨立を主とし、一は聯合を主とし、一は近世文明の進歩を
主とし、一は孤立を主とし、舊思想に盲従を主とし、舊約全書式の曲解を主とせり。
之に據れば天擇人民ナショナルが生出して他の國民と分離すべき運命を有するなり。
一八八四年の規約後に及び、不平黨の所執は稍一變する所となり、純然たる獨立
國となり、女王の君主權を廢止せんとせしが、これ實に挑戦の聲なり。但し從來と
雖、女王が共和國の君主として其權を行ひたることは未だ之あらざりしなり。而
してボア人は君主と云へる語は規約中に見ざる所なりと稱するも、これ固より
トランスヴァールの代議人も人民も共に十分理會せし所にして強辯に過ぎず。夫
れ然り、曩に代議人と英國政府員との第一會見に當り、一も二もなく直ちに拒絶

せられたるにあらずや。

一八八六年に至り、共和國の不平は甚しく農民は復た納税を拒み、トランスヴァー
ルは破産すべき惧あり。然るに突然新方案を發見せしが、これに據れば他の人民
をして租税を納めしむるのみならず、各市民が富を得べき者にして、即ち近代の
金儲思想に因り局外者を共和國に收容する事これなり。クルーゲルは之に就き
深く考慮せし所のものは他なし、如何にせば局外者(ウイトランドル)をして市民
に福利を供せしむると同時に、之を束縛して政權に參せしめざるを得べきやと。
クルーゲルはボア農民の權力獨占を論じて曰く、其喪失は聯合より更に不可な
る者なりと。アルフレッド・ミルナルはクルーゲルに改革を勧めたれども容れられ
ざりき。

一八九三年の撰擧はボア人が政治上殆と言ふに足らざる事を證せる者なり。何
となれば彼は其國に忠ならず、又ドロバアの政治に忠ならざればなり。但しドロ
バアはクルーゲルの黨にあらず、又その政略に左袒せざるものなり。

ボール・クルーゲルが其心力を用ひたる國民は佛國及び和蘭の産なる數千の

家族に外ならず其言語は和蘭のポトアにして概ね牧畜を事とし或は官吏となり或は一身兩者を兼ね結婚宗門及び政治上の任命權により關聯せる者なり。

然れども此状態を一變すべき氣運は方に來り、ボア人の中に眞正なる愛國の感情を生出するに至れり。

第六章 ジェームソン侵入

余は一八九四年十九世紀の阿非利加に於ける歐羅巴に於て南阿の事を叙せし時、キムバレー(南阿共和國の疆外)の金剛石坑とヨアンニスベルグの金穴とに説及せしが、この金穴の發見は一八八五年に在り、即ち倫敦第一條約がトランスヴァールに外交上女王の主權を遵奉せしむる外獨立を許せしより四年の後に當る。トランスヴァールは一八八四年に於て獨立の點に就き多少の讓與を得て、トランスヴァール共和國の名を更め南阿非利加共和國と稱せり。

吾人が獨立の語を口にするに當り、須らく記すべき事は他にあらず、ボア人の此語に於ける世界中凡ゆる人民の解釋と異りたる意義に之を取るなり。即ち吾人の所謂獨立は國家が永遠に自治自期の状態に在るを指すものにして、眞の共和國これなり。然るにボア人に在りては高級の市民が國家の主位に在るを謂ふ、但し

ボアの民團はその地の粗野なる農民とブレットリアに在る官吏の少數有権者より成る。是に於てフイツバトリック氏は曰く、歐洲人民はボア人が如何に獨立の意義を認解するかを會得するにあらざれば、トランスヴァール問題を理會する能はざるべしと。

一八九六年ウイトランダルの成年男子の數は同階級のボア人に超過せり。抑南阿共和國の建設以來外國人に課するに各種繁瑣の税を以てし、四ウンドの麵包一塊毎に四片を課し、半パウンドのバター毎に六片を課し、四パウンドの肉若しくは芋に一志を課し、斯くの如き輕種の租税の外ダイナマイト及び採鑛機械專賣の鑛業者より巨額の税を徵收せり。

一八八一年トランスヴァール國の再造に及ぶや商業は舊に復し、セヨコニ、シエテヲヨロを擊破して全く其敵を撲滅し、或は其國債を償ひ或は償ふ事を得べき時を期限として英國より新債を興せり。然るにボア政府は此責任を顧みずして一切の權力を掌握せんとし、其撰擧權を付與せしは一八七七年の聯合以前に入國したる八千のボア人の子孫に止まれり。一八九六年の白人の總數七十萬に達せ

しに拘らず、之を代表する所の有権者は僅か二萬二千に過ぎず。

一八八一年の規條中トランスヴァールの人民は其國疆外に移るべからず、又英國勢力範圍の内は在る近隣の諸國を併合すべからざるの規定あり。然るに條約の調印後未だ數月を経ざるに、ボア人は英領ベキアナランドの土着酋長の土地を侵し、併せてメーラキングを襲へり。加之大統領クルーゲルは之を版圖とするの宣言を發せり。斯くの如く曩にボアの大統領とツルクスラードが署名調印せし規約を公然無視するに至つては、グラッドストーン氏と雖之を不問に付する能はず。トランスヴァール共和國に向て此宣告を撤回し、又其併合せんとせる土地の放棄を要求し、チャーレス・ウオンを遣はしてベキアナランドを守らしめたるが、之が爲め費せし所一百五十萬磅に過ぎたり。

ボア政府はデリランド及び其他近隣の國に對しても亦同一の企をなせり。これ印度洋の門戸を得んと欲するに外ならず、然れども併合の策は遂に成功を得ざりき。

ウイトランダルは幾度となく疾苦の救済を請願し、一八八四年の條約に従ふて

己等の権利を承認せん事を要求せしむ、大統領クルーゲルは之を峻拒して曰く、不可、不可、不可と。之を終るにウイットランドルはヨアンニスベルグに國民聯合なる者を作れり。然るに凡そ煩擾の事柄は損失を蒙るべき恐あれば、地方の資本家は之に關係することを拒み、久うして後始めて入會せり。蓋し此會員は必ずしもウイットランドルのみならず、大統領並にヴァルクスライドの政略を不可とせるボア人の如きも亦其中に在り。此ヴァルクスライドは兩院より成り、議員は各二十七名なり。而して上院議員は行政顧問と稱し、全く大統領クルーゲルの意志を承順する者なり。トランスヴァールの政府は租税其他の方法に因つて得し所の収入は巨額に達するに係らず、常に貧困を憂ひたり。勿論濫費の弊なきにあらざれど、これ亦斯くの如き巨額を消耗するには足らざりし者なり。今や吾人は其真相を解せり。即ち一八八四年後大統領クルーゲルは女王の主權を廢棄するの争を豫期すると共に、竊に自ら南阿聯邦の君主たらんとするの野心を抱き、歐洲より秘密に近代の武器を購入し、最近の特許に係る大勢力の速射砲及び新造の小銃等枚舉するに暇

あらず。而して是等の武器は密にローレンゾ、マルケイを経てトランスヴァールに輸入し、非常の秘密を以て之を貯へ、英國人が共和國の武器を検せんとするの意思を示すや、直ちに之を一二の武庫に誘引せしが、此武庫に在る所の者は皆陳腐にして廢物に屬する砲銃のみ。英人は實に斯くの如き武器を閲覧検査して安心せしなり。これ故にケーブコロニーの統兵官ウィリアム・ブトラルが幾何か真相を知り、英國政府に向つてトランスヴァールが許多の武器を歐洲より輸入し、之を隠匿する事を報知するや、政府は氏が妄に人の視聽を驚かす事を譴責し、當局者は之に告げて曰く、我信用せる僚屬はトランスヴァールの武庫を搜索するの自由を有する者なるが、其報告は全く貴下の言ふ所と異れりと。トランスヴァールの國民同盟は住民の中投票の資格を奪はれたる部分の爲めに憲法上の運動を固持し、以て一八九五年に至れり。但し余の已に述べたるが如く、ヨアンニスベルクの資本家は多くこの中に在らず。これ政府とボア人との大部分が猜疑を抱ける協會に入るを憚れるに外ならず。然れどもボアの大多數は未だウイットランドルに反對すべき行動に出てざりしに不幸にして、ジエムソン博

士が一隊の武夫を率ゐてトランスヴァールを侵すに及んで事情一變せり。トランスヴァールの公議を代表する者と見做されたる撰舉人の少數團は、其投票權を固守して他の之に參與するを許さず、これ此權利が貴族の特章なればなり。勢力の原動なればなり、又富の本源なればなり。南阿諸州よりすると遠隔の地方よりするとを問はず、凡て國外より移住せる者に投票權を與ふるは則ち彼等の所謂「獨立」を損する所以にして、之を與ふる愈、多ければ之を失ふ愈、大なり。而して此「獨立」たる權力を占むる徒が其意のなさんと欲する所をなすの權利を謂ふ。然れども一八九五年に至るまでは、資本家と云ひ富裕なる地主と云ひ、最後の手段たる暴力を用ふるには不賛成なりしと雖、ヴァルクスラードが改革を拒絕するの決意を發表するに及ぶや、漸く改革黨の意見を以て用ふるに至れり。而してウイットランドは共和國の租税十分の九を負擔するに拘らず、請願をなすも、委員を派遣するも、一八八四年の規約に訴ふるも、慰藉を得る能はず、勞して功なきに終れり。大統領クルーゲルは已に一八九二年に於てこれを認め、己れに會見せるウイットランドの委員を逐ふて曰く、歸つて汝の人民

に語れ、余は彼等に何物をも與へざるべし。余は決して余の政略を變ぜざるべし。今や風雨をして起らしめよと。

尋で一八九四年三萬二千人のウイットランドが連署して苦痛の救済をラードに請願するや、ラードは之に答へ、若し撰舉權を得んと欲せば戦ふべきのみと。

ジュームソンの侵入に至るまで南阿共和国中最も不平なる殖民は南阿のウイットランドなりき。

これ等の人民は南阿に生れたる者にあらざれば則ち南阿に於て生涯の最も大切な時期を經過せし者にして、深くボア政府を惡みし所以は、其少しも物質上の利益に與るを得ざるが故なり。而して之と深く結托せし者はトランスヴァールに永住の決心を有し、政治的要素と貶稱せられたる一階級の諸國人なり。彼等は南阿の將來を左右せんとする人々なるが、之に繼いで來れる者は更に大なる一階級にして、其改革を利とするは平生政府の積弊重税に苦しめるが爲めなり。

この他別に一階級あり。こは區々たる鑛夫にして、其トランスヴァールに於ける利

害は一時の物に過ぎず。此地に永住するの念なく、只短日月の間に富を作らんとし、保護を得るが爲めには政府に何物を償ふも願みざる者なり。此種の徒は過去二年間に合衆國、英國及び其他の諸國に散布せしが、彼等は戦争の爲めに困廢したる經驗あるを以て甚だ之を忌憚し、皆曰く、ウイットランドルは何故自然に放任する能はざるかと。

進歩的なるボア人はヨアンニスベルグの資本家に囑望して以爲らく、彼等は平和の手段を以て改革を扶くべく、又全力を盡して疎暴の方法を排斥すべしと。蓋し資本家が疎暴の手段に與せざる所以は他なし、若しヨアンニスベルグに革命の激動あらんか、其利益を損せざるを得ざればなり。然れども改革の舉は社會の正直なる人士と一様に利益に浴すべきが故に、亦敢へて之に努力するを憚らざるなり。ケープロニー及び英國に住する鑛主は數百萬金をトランスヴァールに投資せしかば、今やトランスヴァールの現状は鑛業にも關係を及ぼせる結果、最も損害を受けるや勿論なり。彼等は實業家なるが故に改革は之を望むも革命は喜ばざるなり。然れども改革の希望稍衰ふるに及び革命の精神漸く興り、茲にローデ

シアの指揮官ジームソン博士と協約する所あり。ジームソンはトランスヴァールの疆上に一萬五千人とマキシム砲及び野戰砲とを集め、ヨアンニスベルグは銃五十挺、マキシム砲三門、彈藥一百万個を密輸すべき計畫なり。但しヨアンニスベルグ人の手には已に一千挺の小銃あるが故に、兩者を合す時は武器は已に十分なり。

ジームソンがトランスヴァールに來つて其兄弟を訪ひ、之と商量せし最初の計畫はヨアンニスベルグ人をして市の咽喉を扼するフォルト・プレトリアを取らしむる事なり。偶、墨壁の一方は修繕の爲め破壊せられ、而して守備兵は僅か百人に過ぎず。其武庫には許多の小銃を藏する事も分明なりしかば、最も好都合なりと謂ふべし。

抑、今日何人もジームソンが兵力を以てトランスヴァールに侵入せる事を可とする者なし。蓋し爭論がトランスヴァールのウイットランドルに限れる間は何人もウイットランドルの壓制せらるゝを憐んで之に心を寄せたりと雖、一たび外國の來寇者と結托するやみな離心せり。改革黨の企圖は市民の虐歴に堪へざるに及んで

ジームソンを招くに在り。然るに一八九五年九月ジームソンがヨアンニスベルグに来るや遂に之と相應じて事を擧ぐるの計に出でたり。この年十一月ジームソンは復びヨアンニスベルグに来れり。但し其同胞は此地に於ける改革黨の一員なり。ジームソンはリオチル・フリッブ・フランシ・ロード、ジョン・ヘーアンモン、ジョルジ・アララル等の連署せし書簡を受けしが、其主意はヨアンニスベルグに發すべき革命運動を共にするに在り。此書簡には日附なかりしも、其後倫敦の「タイムズ」新聞に擧げたる所に據れば一八九五年十二月二十日に書かれたる者の如し。

最初ヨアンニスベルグに事を擧ぐる二日以前にジームソンはメーフキングを出發すべき豫定なりしも、最後に及び改革委員より信號を送るまでは敢て動くべからざることとせり。この時に至り人々の心中ジームソンを助くるに就ては何等の問題なく、彼はヨアンニスベルグ人を助けんが爲めに來るも、ヨアンニスベルグ人は彼を助くるにあらずと思へり。然るに一八九五年最後の週に於ける事情は殆ど期待せし所と異り、ヨアンニスベルグ人が小銃を市中に密輸するの事

段は失敗に歸し、ジームソンの一千五百人は五百人に減ぜり。而して第一擧はフォルド・プレトリアを取るべき心算なりし處、なほ重要なる豫備の手段を講ぜざるべからず。之が爲め三人の改革委員をケーブ・コロニーに遣はし、シシル・ロードを訪はしめたり。若し進撃の目的がボアの「獨立」を奪ふにあらずとするも、ユニオン・ジャックは適當の國旗にあらず。ユニオン・ジャックは合併の國旗にして英國が耻辱と苦痛とを以て之を引き下したる者なり。

ロードは改革委員に向つて曖昧なる答をなして曰く、國旗に關しては可なりと。然れどもトランスヴァールの國旗を主持すべき豫想を以て運動に與せし人々はロードが國旗に關しては可なりとの答を以て満足となさざりしなり。

南阿共和國に移住せるアフリカンドルはケーブ・コロニー若くはオレンジ自由國より來れる和蘭人なるが、ボア政府が和蘭人及び獨逸人を偏愛するを見て深く之を嫉めり。但しクルーゲルがロングトム、マキシム「其他新發明の小銃を購入するに就て、和蘭人及び獨逸人に交渉せしは最も其不平とせし所なり。是を以てアフリカンドルは革命的改革者として武器を執るの外、トランスヴァール國旗

の下に戦ふを欲せざるなり。

一八九五年十二月最終の一週に至り、書簡、使節、電報のジュームソンの手に到れる者數ふべからず、而して其述ぶる所はジュームソンがヨアンニスベルグの人民より進軍を求むるまで、メーフキングのピサニーの陣營に待つべしと言ふに在り。ジュームソンの返信は日々其短氣を發露し、改革委員の志望と警告とを無視して自由行動を取らんするの意を示せり。

一八九五年十二月二十九日、即ち日曜日の午前ジュームソンの同胞は彼より電報を受け取りし處、其文字多くは隱語なるが上に傳達の途中破損甚しく、其意味明瞭ならざりしも、余は今夜間遠なく出發すべしと云へるが如し、乃ち直ちに少佐ヒトニー大尉ホルデンの二人を遣はし、決して右の企を實行せざるべき旨を告げしめたるが、ヨアンニスベルグの人民は皆此使がジュームソンの出發前に到着すべき事を信じ、己等の志望を無視してトランスヴァールを侵すならんとは思はざりしなり。

此時に方りプレトリアとヨアンニスベルグに於ては一般に何事か起らんとす。

るを知り、而して大統領クルーゲルも亦之を疑はざりしにあらず、然れども彼の政略は其慣用の譬喩の如し、曰く、龜の頭を切らんと欲せば先づ龜をして頭を出さしめよと。

ベキアナランドの巡查と綱纏せる一少女あり、一日情人より信書を得たるが、意はヨアンニスベルグに至り途次其同僚と共に彼女を訪問せんとなり、これは眞偽甚だ疑ふべし、何となれば他の説話に據るにベキアナランドの巡查は何れの處に派遣せらるゝやを知らず、唯鐵道を妨害する土人の會長と戦ふが爲めなりと思ひたるを以てなり。

ジュームソンは一八九五年十二月二十九日、其ピットサニーの本營及びメーフキングより兵を發せり。

これより數日前市の一故老は大統領に告ぐるに、民間各種の不平が將に潰裂して敵兵の侵寇を致すべきを以てせしに、クルーゲルは之に答へて云ふ、暴動の兆あるは己れも亦之を聞かざるにあらず、されど之を信ぜざりしとて、例の慣用の譬なる龜と甲との話を反覆せり、然れども幾何もなくして急騎を發してヨアン

ニスベルグ、メーロフキング間に徇へしめ、各市人をして馬に跨り銃を負ひ異變に備へしめたり。

暴動前數週日の間、人民の總代は交、大統領に向ひ何人も必要正當と認めたる改革の許容を迫れり。然るに大統領は盡く之を斥けたるのみならず、或は侮辱を以て之に加ふるに至れり。米國人の總代は一たび大統領の排斥する所となりしが、第二次の總代は之が爲めに沮喪せず、復び大統領を訪問せし處、大統領は之を見て頗る怒氣を含み告げて曰く、ワシトランド人、米人、英人、其他の者に投票權を與ふるは不可能なり。若し之を與ふる時はわが勢力を失墜すべく、政府は復たその掌中の物にあらずと。總代は之に問ふて云ふ、若し吾人にして臣従の誓をなさば閣下能く吾人を信ずべきかと。大統領は暫時躊躇の後之に答へて曰く、今や是等の事を談ずる暇なし。余は卿等と何事をも約する能はざるなりと。

十二月三十日即ち月曜日に至り改革黨の首領は奇怪の電報に接せり。其終に月曜日の午後四時と四時半との間にローレン氏は衆首領の會合せる室内へ倉皇として入り來り、謂つて曰く、萬事休せり。彼は萬事を排して出立せしぞ、こ

れを觀よ。改革黨は覺れり。ジュームソンは自ら事を起してウイットランドの義舉を賊へり。即ちウイットランドの準備が未だ十分ならざるを知りながら之を危機に陥らしめたる者にして、又武器彈藥を得べき確實なる機會を破れり。これ他なし。ブレトリアの武庫を取る能はざらしめたるに因る。

加之ジュームソンは、初め一千五百人を率ゐて來るべき筈なりしに、現兵は僅か五六百の間に在り。

ヨアンニスベルグの人々は革命の騒亂と外寇の侵入と一時並び起りたるが爲め大に驚惶し、直ちに其都邑の防守に着手せり。彼等は、大砲を有せる七百人の精兵、彼等が爾か思ひたるが間に合はざるべしとは思はざりしなり。

改革の運動に與らざりし多數の人民はヨアンニスベルグの防備を助けんとし、て來り警察と力を併せしが、これ鑛業閉鎖の結果解雇せられたる土人等の輻輳せるが爲め一層危険の虞ありしを以てなり。この臨時巡査の努力に因り、擾亂の間ヨアンニスベルグに於ては十分なる秩序を保つを得たり。委員は當時僅に三千挺の銃を有せしに過ぎず。二萬の人民は大砲なきを恨とせり。改革黨は責任を

帯びて酒保のカッフルが法律に反して同教人に酒を沽る所の會飲場を閉して其現品を沒收し、而して其所有主には損失を償へり。

ヨアンニスベルグの人民が疑懼の間に彷徨する時に方り、ジエムソンは其部下に日附けなき一封の書簡を読み聞かせたるが、右は二ヶ月間其手に握り居りたる者なり。書簡の主意はヨアンニスベルグ人が助を求むるが爲めにジエムソンを招くに在り。ジエムソンの部下は之を以て今纔に接手したるものと謂へり。ジエムソンは之に語つて云く、余はボア人が此舉を疑ふに先だち、血を流す事なくしてヨアンニスベルグに入らんとするの心算なりと。部下の中之に問ふ者あり、己れ等は英國々旗の下に女王の命に因つて戦ふ者なるかと。ジエムソンは彼等が南阿に於ける英國の國威を張るが爲めに戦ふ者なる事を證言せり。

曩に改革委員の急使としてジエムソンの出發を止むるが爲めに派遣せられたる大尉ホルデンは、十二月二十八日即ち土曜日の夜を以てメーフキングに達し、其儘軍中に留まり、少佐ヘンリーは迂路を取り特發列車にてメーフキングに至り、此處より更にジエムソンの建てたるピットサニーの陣營に馳せ、これ亦其陣中

に留まりしが捕虜となれり。彼は明かに其使命を達せしと雖、ジエムソンはこれより先き已に其計畫を完うせしが故に、毫も之が爲めに心を動かさざりき。

ジエムソンは自ら其舉を説明して曰く、吾人は彼等が國民全體の企求する政府を建つるが爲めに不直なる現政府を變更せんとするに方り、何人をも保護するが爲めに往くに過ぎずと。

來寇軍の首領等は大に兵法を誤り、兵を馳すること迅速に過ぎ、休息飲食の時をも與へず、而して一軍は百三十哩の行程を過ぎ、初めてボア人と接せし事故、途中の疲労甚しく、其一瞬間の休息を與へらるゝや馬鞍より轉下して地上に睡臥するに至れり。

ヨアンニスベルグよりジエムソン及び其部下の士官に書信を齎らせる一騎兵は、ボア人に捕はれしが、數時間抑留の後、其書信を所持の儘護送せられたり。此書信は結局ジエムソンを動かすに足らずして、喇叭の聲と共に軍隊は進行に及び、幾何ならずして中尉エロフを虜にせり。エロフは大統領クルーゲルの孫にて一行九人偵察の爲め來れる者なり。已にして暫時拘留せられしも、忽ちにしてクル

イダルスドルフに行軍中なる夥しきボアの兵の裡に混ぜり。尋てプレトリア駐在の英國代官サー・ジャコブ・ド・ウキトはジームソンに使を遣はしメリフキングによるべき事を忠告せしに、ジームソンの答に曰く、余の人馬は食料なし、余輩は已に來路を取つて歸る能はず、只前進するあるのみと。ジームソンはヨアンニスベルグより助を求めざりしが如し、而して又最初より之を沮したるの觀あり、然るに彼は遂に言へり、敵はヨアンニスベルグに余を護送すべき二百の兵を視ると海賊よりも輕し、而して余の兵は少しく疲勞するとは言へ、もと勇氣ある者なれば反つて發奮するならんと。乃ち進んでクルーゲルスドルフに向ひ、一八九六年の元日即ち水曜の午後三時を以て到着せしが、若しクルーゲルスドルフに屯する少數のボア兵を突過して路を其間に取り通宵一直線に進みしならんには、安全にヨアンニスベルグに達せしなるべし、然るに不幸にも二人のボア人を選んで嚮道となせし處、彼等は之を誑き迂路を取つて、クルーゲルスドルフに屯する兵を避くる爲め、ドールンスコップに至らしめたるが、此處にはボア兵の強兵平頃邸の層上に陣を布けり。

ジームソン軍隊の指揮官ジョン・ウイロービーの取りし計策は、從來歐洲の兵がボア人と戦ふに當り最も不利なる事を經驗せし者なり、即ち彼等は前面攻撃に出で、以て敵陣を奪ふべしとし、従つて空濶にして勾配の緩温なる草地を進むに際し、敵は岩石の背後に臥して銃銃、マキシム、其他大砲を發射せしかば、ジームソンは奮闘して之を破らんとせし、遂に力盡きて降参せり、ヨアンニスベルグより來りし、タイムスの通信員ヤングスバンド大尉は言へり、

余輩はジームソンの勇敢なる一小隊が武器を帯びず、ボア護衛兵に圍まれながら、意氣銷沈馬に乗つてクルーゲルスドルフに引返すを見たり。蓋し此勇敢なる一小軍のなせし所より更に暴虎憑河の企に着手せし者あらざるべきや明かなり、而して之を稱賛せし者は、獨り余に語れるボア市民のみならず、ヨアンニスベルグ全市民も亦然り、是等のボア人は粗野なり、單純なり、平服を着て肩に銃を擔へる兵士に過ぎず、而も深く感激して其敵の勇敢なるを賞せり、彼等は十分沈靜にして自負心あり、其談話は毫も誇大の弊なし、彼等は土地を指して言へり、元來不可能の事に屬せり、其結果は彼の如しと。

ジームソン小隊の死亡者は殆ど二十人あり。而してこの時ボア軍を指揮せし者はクロンジューなるが、クロンジューは敵の指揮官なるウーロービーに書を送りて曰く。

若し貴下が南阿共和國に負はしめたる費用を擔任し、降服の上武器を致さば貴下及び貴下の率ゆる人々の生命を恕すべしと。

其答に曰く、

余は衆人の盡く助命せらるゝ保證の上に條件を承諾す。余は今如何なる方法を以て又何れの場處に武器を引渡すべきやに就き貴下の命を待つ。之と共に余が貴下に記憶を乞ふことは、余の部下が二十四時間食はざりし事なり。

此約束己に終り、而して武器の引渡あるや否や、指令官マランは來つてクロンジューが俘虜の生命を宥せし事を責めて曰く、俘虜は當に總指令官ジューバルト及び其軍事顧問に引渡すべき者なり。之を免すと免さざるとは其權内に在りと。

此點に就ては頗る感情の衝突あり。降参人の目前に於てボア人は大に議論を聞はせし處、クロンジューの處置を非とする者多く、ジームソンの徒に關し不穩の語

を吐く者あり。ジームソンはこの討論の席に在るを欲せず、低頭して他の處へ赴けり。蓋しクロンジューは一八八一年の戦争に犯したる所行に因つてボア人の中に譽を失ひ、又之より二十年の後セント・ヘンナに捕虜となれり。然れども吾人は寧ろ英雄として彼を視ざる能はず。クロンジューは總指令官マランの嚴命を受け脅迫を被り、降参の條件を苛酷ならしめしが、其言に曰く、余がジームソン主従の生命を保せしはわが手中に在る時に限れるなりと。

これより先きクルーゲルスドルフに赴きたる隊伍は懇遇を受け食料を給せられたる處、彼等の之を食ふこと殆ど餓鬼の如くなりき。又彼等の進行中ボア人は到る處己れの缺乏せる食物を割いて其飢を救ひ、且つ皆其勇敢に對する尊敬の意を表せり。

抑、此戦争に於てボア人は個人として懇切の意を表せしに拘らず、ボア政府は少も約束を重んぜず、而してクルーゲルに従へる大官は唯誠實を欠くのみならずして酷虐なりと謂ふべし。

之を要するに俘虜はブントリアの官吏に引渡さるゝまでは敵の好遇を受けた

り。ジェームソンはプレトリアの街上に於て不逞の徒に襲はれしが、之を守護せし官吏の爲めに保護せられたり。但しボアの自制自重とは彼の遭遇したるが如き場合に於て甚だ見るに罕なる所なり。

然るに大統領クルーゲルに至つては若し彼の前にウイットランダルと云へる語を言ふ者ある時は、暴怒を發し殆ど狂妄の言を吐くを常とす。彼は平生己れの約束を履まず、何ぞクロンジエの結びたる約束を重んぜんや。只其敵の來寇を知て之に應ずるの準備を講ぜしが如きは其思慮智計膽勇を見るに足るものあり。而して其無事の時に方り己れの遭遇したる一切の事件を回顧し、其如何に凡ての人を瞞着せしかを思ふ毎に頗る得色ありしなり。

當初ヨアンニスベルグの人民はジェームソンの降伏を信せず。彼の才略は必ず能く該市に達するを得べしとて毫も疑ふものなく、武装せる者も否らざる者も彼を救はんが爲めに將に出發せんとし、改革委員がジェームソンに援兵を送らざりしを咎めたり。

已にしてヨアンニスベルグの人民はトランスヴァール政府がジェームソンの降伏

を無條件とせしとの報を聞き、危疑憤怒に堪へず。而して第一に従事すべきはジェームソン及び其一行の安全を致すに在り。

ケープコロニアの知事ハルキールス・ロビンソン、倫敦のチャムバレーン及びプレトリアの英國代官サー・チャコピニド・ウエットとの間に往復せる電報はこゝに掲ぐるの要なし。

クルーゲルは普通の罪人として凡ての俘虜をプレトリアの獄中に禁錮せしが、クロンジエが其生命を宥すべき事を約束せし事あるに因り、其約束を有効ならしむる條件としてヨアンニスベルグに於ける一切の武器を差出さしめ、以て利益を謀らんとするはクルーゲル及び其政府の目的なり。英國の代官の受けたる忠告に曰く、改革委員の威權を以て製出せるヨアンニスベルグの武器を放棄したる以上は、ジェームソン及びその徒を英國政府に引渡し、英國法律の審問を経て正當なる刑罰を受けしむべしと。而して改革の首領は、其罪を問はざるべく、其哀訴する所の痛苦は之を審議に付すべしとの事なり。改革委員は此約束がプレトリアに於ける英國の代官のなせし所なるを以て必ず信頼すべきものとなし、咄嗟

の間に武器の蒐輯に着手せし處、其夜改革黨の重なる首領は俄に逮捕せられ、翌晩改革委員六十四人は監視に附せられたる事情此の如し。苦痛の哀訴の如き其聽かれざる勿論なり。而してヨアンニスベルグの武器は已に正直に引渡せし後なれば、これ全く欺騙に罹りし者にて、改革黨の首領は所謂クルーゲルが赦免すべしとの宣言に誤られ、知らず知らず逮捕せられてフレトリアの獄に在り。ジームソン及び其同僚の運命に至つても容易に決定せられず、種々の口實の下になほ拘留中に在り。而して彼に附隨したる五百人の徒は本命令を遵奉せしに過ぎざるが故に、英國政府は之を米國に送つて審判を受けしむるの理由を見ざりしが、大統領は英國政府に告げて云ふ、斯かる場合にはフレトリアに於て審問を受くべしと。然るに若し其言の如くせばジームソン等の運命は甚だ危険ならざるを得ず。是に於て數回の協商、電報、通辭を重ねたる後、英國は此捕虜をダルバンに移し、此地より本國に移すの許を得たり。

ジームソン及び其僚屬等は倫敦に到ると齊しく、一八七〇年の外國募兵條例に據て罪に問はれ、六月に至り審問の後有罪と決し、禁錮の刑を宣告せられしが、其

期限は各、差あり、乃ちジームソンの如きは十五ヶ月なりき。但し彼等の禁錮は甚だ嚴ならざるが上に、多くは満期前に赦免せられたり。

當時歐洲歴訪の使命を帯びたるレリス博士は多く武器を購入する事を擔任せしが、英國をしてシニル・ロードを隠謀の罪に問はせ、其南阿會社の管理權を奪はんとする望願る切にして、遂に能く國會をして該會社の方法處置を調査せしむるまでに至りたるも、公衆は此問題を喚起せず、従つて事件は此に止れり。

少壯の英人グリーンが老年のデコビッドウマに代はれるや、人皆以爲らく、かれ或は恰例なるクルーゲルの勁敵たるを得べしと。此時に方りクルーゲルは已に十分の勝利を得、社會の上流に立てる六十四人はなほ彼の掌中に握れり。

余は此人々がフレトリアの獄中に呻吟するの状を述ぶるの暇なし。彼等が監獄に護送せらるゝの途次、無頼漢は之を圍んで叫號し、六十歳になれる一老人の如きは此輩の爲めに打倒され、蹴躐せられ、辛うじて同僚の爲めに救はれたり。而して其監獄に達するや、普通の罪人の如き待遇を蒙り、四人或は五人縦九尺横五尺の室に監禁せられ、空氣の流通なく、必須の供給なく、或る時の如き一人の囚徒は

熱病と赤痢とを患ひたるが他の四人と共にこの一室に閉さるゝこと十二時間に亘れり。典獄はデュープレシーと云へる人にしてクルーゲルの親族に當り、クルーゲルトは絶えず消息を通じ、其猛悪なるに至つては殆ど言語同断なり。已にして其惡事の著明となるに及び其職を免ぜられしも、久しからずしてクルーゲルは又之を諸監獄の監視人とせり。

一八九六年四月二十七日に始まり數日間交互たる改革黨の審問に就ては、今之を詳説するの要なし。但し英米の司法手續と異り、宛も輓近ゾラの審問の如く將たレンヌに於ける軍法會議の審問に類せり。而してプレトリアの大審院判事は無用にあらざれば則ち信頼するに足らざる者なりしが故に、クルーゲルはオレンジ自由國より判事を聘せり。其名をグレゴロスキと云ふ。彼は其宣告文を豫想して初より黒帽を準備せり。彼の此事件を辦するや南阿共和國に用ふる法律に因らずして和蘭羅馬法に據れり。此法に據るときは苟も有罪を決する以上被告の重なる者に死刑を宣告する事を得。被告の重なる者は四人にしてライオネル・フリツプ、大尉フランシス・ロード、ジョージ・フルラル、ジョン・ハムメント。

れなり。

ヨアンニスベルグの改革委員にして囚徒となりし者六十三人の内もと六十四人の内一人死亡せしなり。二十三人は英吉利人、十六人は南阿人、九人は蘇格蘭人、六人は米人、二人はウェールズ人、一人はカナダ人、一人は瑞西人、一人は土耳其人なり。

グレゴロスキは檢證に際し、陳述して曰く、ジェームソンを招きたる書簡に連署せし五名は、ドールンスコップに於てボア市民の血を流したる罪を負はざるべからず。乃ち眼前に出頭せる四名は羅馬和蘭法に由つて死刑を課すべく、行政府と大統領の寛典を得るの望あると否とは別問題に屬すと。

在廷の人は此宣告文を聞いて驚かざるはなく、被告に勸めて服罪せしめしが、これ斯くの如くするときは只名義上の刑罰に止るべしとの考に出でしなり。法廷は寂として死せるが如し。

改革黨は其犯罪の性質、習癖、人種、事情に拘らず、凡てデュープレシーに引渡され、他の罪人と同一の待遇を與ふべき事とせり。但しボアの監獄には何等の區別をなさ

ず。

囚徒の一人なるフイツパトリックは監獄生活に就て一章を記せり。之れに據る時は一人は發狂し、同囚は之を監視せしと雖時に自殺を謀り、他は熱病赤痢等に罹りしが毫も救護の法を取らざりき。

大統領クルーゲルは改革黨就中死刑の宣告を受けたる四人の者を誘ふて、寛典の請願をなさしめんとせしが、これクルーゲルに取つては頗る重要な問題に屬せり。但し一部分は此請願が罪狀の自白を含蓄する者と思惟せしが故なり。又一部分は世界が大統領の大度を諒する事を希望せしが故なり。

彼が隨意に起稿せる請願の内容は、彼等が宣告を正當となし、其所爲に就ての悔心を表し、將來改悛の約束をなす者にして、最後には政府の寛典を望む諛諛卑屈の文句を用ひたる者なり。然るに囚徒は凡て此請願書に署名するとを拒めり。クルーゲルは己が囚徒が現に存在せる報告を受くるに先だつて、請願書に接せざるべからざる事を主張せしも、大統領の司法官は囚徒の辯護士に請願の不必用なる事を語れり。

クルーゲルの屬僚は日々囚徒に迫り、之をして其判決に就て熟思する所あり、政府に書面を提出して其罪惡を自白し、併せて審問の正當なるを認せしめんとせり。然るに囚徒の中にて其妻子の爲め多少修正を加へたる請願書に署名すべき事を諾せし者あり。然れども死刑を宣告せられたる四名と其他十一人は絶対的に之を拒絶し、且つ署名人に語つて同く、クルーゲルの約束は恃むに足らずと。果して其言の如く署名人は只禁錮の輕減を得たるのみ。而して政府の寛典は死刑を宣告せられたる者を十五ヶ年の禁錮に處せしに過ぎず。

ブレトリアの獄中に於ける十五ヶ年の禁錮は緩慢の死刑と一樣なり。デニブレ、シーはかれ等の一人に語つて曰く、若し獄則を勵行する時恐らく一ヶ月間の生命を保つものもあらざるべく、白人に在つては何人も耐ふる能はざるところなりと。

已にして南阿全國が此囚徒に對する同情は實際に見はれ、寛典の請願書には二萬人の連署を見るに至れるも、政府は一葉に之を排斥せり。然るになほ南阿二百都市の市長は親ら連署の請願書を携へてブレトリアに來り、オーレンジ自由國

の都市も亦其中に雜れり而して其已に途中に在るやクルーゲルは之を阻止せんとし、死刑の宣告を受けたる者四人と最後に至る請願書に署名を肯せざりし者二人を除くの外盡く之を釋放し、市長等はブレトリアに達せしも最早手を措く所なく空しく歸郷せざるを得ざりき。何となれば大統領は市長等の使命を重視せず、只之に不正式の會見を許せしに過ぎず。而して會見に方り頗る彼等を侮辱して其感情を害せり。即ちクルーゲルは彼等の行爲と職責とに對し、圭角ある談話をなせしなり。

囚人は釋放の時各、即座に二千磅を拂ふべきことを要せられ、又この日(一八九六年四月三十日)より三ヶ年の間、直接間接に南阿共和國の内政外政に容喙せざるべき事を要せられたり。

然るに其中の一人は、ナインティン・シエンチユーリ雑誌に一文を寄せたるが爲、契約違反を以て目せられたり。其論説たる純粹なる歴史の談話的の者にして、寄稿の目的は侵入問題に就き、サー・ジョン・ウーロービーの謬説を匡すに在りき。行政會議は之に追放の令を下せしと雖、彼は已に歐洲に籍を置きしが故に南阿共和國より追

放を受くるも復た痛痒を感ずる所なし。

クルーゲルは放免の人士が伺候して寛典を謝すべき事を切望せしと雖、概ね之を肯せずして曰く、我徒の逮捕は反間に因り、吾徒の處刑は協定に因る。大統領に對して何等の義務あらずと。

此説は誠に根據あり。只少數の囚徒は朋友の勸告に因りクルーゲルに謁見せしが、此會見は所謂謁見なり。何となればクルーゲルは彼等に謂つて曰く、余は往々余の犬を罰する時あり。而して犬の中に二種あるを見る。其一は戻り來つて余の長靴を舐むるものなり。其一は遠く走つて余に吠ゆる者なり。余は今なほ吠ゆるものを見る。而して諸氏が之と異なるを喜ぶと。

通譯は之を英語に譯するを躊躇せり。クルーゲルも少しく其不穩當なるを悟りしかば叫んで曰く、今の話は戯言に過ぎずと。然れどもボア和蘭語を解せる列席者はクルーゲルの談話せし時の様子に因つて其極めて眞面目なるを知れり。死刑の宣告を受けたる四人をして請願をなさしむるに就ては格外の壓迫を用ひ、之が周旋者にとつては實に金錢の問題たり。

結局四人の囚人は許可を受け總代を大統領に送り、大統領は判決變更の請願に就ては書面を要するや否を確めたるに、然りと答へたり。乃ち一書を行政會議に呈せしが、書中少しも卑屈の文字を用ひずして十五ヶ年の禁錮に代ふるに金刑を以てすべき事を諷示し、而して若し幸に採用を被らば誠實に復業すべき意を洩せり。

然るに此事に關しては宗教上顧慮すべき所あり。死刑宣告を廢棄するが爲めに金錢を取るは猶太人が贖命金を受くると其揆を一にする者と謂はざるべからず。然れどもポア人及び大統領は枉げて之が道理を作り、贈與として若し囚人が差出す事ならば之を受くるも妨なしとせり。

改革黨が遊説せられたる處に據れば、贖刑金額は一人一萬磅即ち四名にて四萬磅にして、皆之に信を措けり。然るにクルーゲルは彼の期せし所は一人毎に四萬磅にして一萬磅にあらずとなせしかば、事務局亦困難に赴き、囚人は此事を告げらし時皆増額を峻拒せり。

行政會議は彼等に諭して曰く、金額の點は判事グレゴロスキと商量すべく、又

其金は慈善の目的に使用すべしと、而してグレゴロスキの意見に據れば、行政會議の課すべき金額は一人二萬五千磅に下らず。

行政會議が囚人に諭したる主意は左の如し。曰く、宜しく一人一萬磅の額を増して四萬磅となすべし。然る時は大統領は慈善事業の爲めに斯くの如き巨額を受理すべからずとなし、結局人毎に二萬五千磅を受くるならんと。囚人は之に従ひ約束の上右の料金を納め、首領四名は放免を得たり。之を一八九六年六月十一日となす。此四人は大統領を徳とせずして言へり、吾徒は金を納めて出獄せしのみ、乃ち一種の賣買的取引に外ならずと、而して究竟此取引の爲めに慈善院が何等の利益を得たるを聞かず。

フライッブ・ファルラル、ハムモンドはトランスヴァール政治には内外となく干渉せざるべしとの約束を結びてヨアンニベルグに歸り、大尉ロードは反つて追放を希望し、護送を受けて國疆を蹶え、數週の後ピラワヨアの附近に於てマタベールと小争をなせし時殆ど射殺せられんとせり。尋てキチネルに従つてカルトームに赴きしが、思ふに目下倫敦一新聞の通信員としてロバルト卿に従ふならん。

サンブソン、デイヴィの二人は獄中に留まれり。彼等は一切請願をもなすを屑とせず。デブレッシは公言して曰く、若し餘人みな此處を去り政府彼等を以て余の手中に托すとあらんか、余は彼等をして如何なる文書にも署名せしむべきにと。然れどもかれ等は之より一年の後、即ち一八九七年の六月を以て放免に遇へり。かの大尉ロイドは他囚の放免後、デブレッシの虐待せることに就き、ケーブ・タウンの英國南阿高等委員官に訴ふる所あり。英國政府が之を以てトランスヴァールの行政會議に照會せし結果、デブレッシはブレトリアの典獄を罷められ、諸監獄の監視となりたる事は前章に述べるたる如し。

第七章

ボナ戦争

レディースミス

トランスヴァールは静謐を享くること三年に及びしも、獨りヨアシニスベルグは政府の市制壞廢の結果頗る亡狀に陥り、巡查の如きウイ・トランドルを劫殺すべき場合の外其用をなさず。ニドガル氏の如き自宅に於て一人の巡查に銃殺せられしも犯人は輕き罰を受けたるに過ぎず。これ其一例なり。又土人に酒を公賣する事は法律の禁ずる所なるに政府は之を默過せし爲め、鑛地と市内とを問はず秩序大に亂れたり。然れども改革黨の諸氏は三年間政治に與らざる事を誓ひし爲め其市制に容喙する能はず。

大統領クルーゲルはこの時に乘じ所有の巨資を抛つて軍需を購入し、新式の大砲の外夥しき線銃を手に入れ、その數はトランスヴァール及びオーレンデ自由國のみならず、ケーブ・コロニーの和蘭的阿非利加人をして盡く之を携帯せしむる

に足れり。蓋しクルーゲルが武器の購備に着手せしはジュームソン侵入以前に在り。而してウイットランダルに限り法律を以て武器の輸入を禁ぜしかば心に深く之を銜めり。

大統領クルーゲルとシュシルロードとは共に大志を抱いて相容れず、互に競争の策を講ぜり。蓋しクルーゲルは南阿合衆國を建てんとし、ロードは南阿聯邦を建てんとし、クルーゲルは自ら大共和國の大統領たらしめんとし、ロードは南阿聯邦を以て帝國聯邦となし、ケープ、カイロ間の鐵道をして其中央を貫通せしめんとす。二人の企圖はそのに其志を達し易からざるもクルーゲルの希望は高しと謂ふべし。曩にウリアム皇帝は電報を以てクルーゲルのドールンスコップに於てジュームソンに勝ちたる事を賀せり。然れども未だ久しからずしてクルーゲルの目的が南阿共和國の名を藉つて和蘭帝國を立つるに在る事を看破し、以爲らく、クルーゲルは將に獨逸の西阿非利加を併せざれば已まざらんとすと。但し此地に大西洋に面せる良港のウォルフ、ン海あり。皇帝は乃ち謂ふ、獨逸の爲めに謀ればケープ、カイロ鐵道の設計者と親交を結び、其阿非利加に於ける殖民地を開通

するに若くはなしと。是に於てシュシルロードを伯林に好遇し、私に之と會見して阿非利加問題を商議し、遂にボアに關する意見を一變せり。

ジュームソン侵入後ウイットランダルは最早戦争を起すが如き危険なきが故に、若しクルーゲルにして幾分か其疾苦を軽減せしめたらんには之を融和するに於て何かあらん。然るに彼は茲に出でずして遂にトランスヴァールの共和國を鞏固にすべき機會を失へり。

改革委員中米人を代表せるハムメント氏は曰く、吾人はボアの主權を顛覆する事を非とす。英國其他外國の國旗をトランスヴァール住民の上に翳すが如き從來已に行はれざりし所なり。而してトランスヴァールの社會に屬する英人自身と雖亦斯くの如き企圖に力抗すべしと。

ステイヴン氏が開戦の初め戰地に赴く途中、ドバル神學校の講師にしてブルガルスドルプの牧師なるボア人は之に左の如き意見を語りたるが、クルーゲルの内心之と符合せしものありしは毫も疑ふべからず。

余はトランスヴァール政府を以て計を得たりとなさず、屢、彼等に向つて之を語

りたる事あり。乃ち人民を鑛山に收容せしが如きは一大失錯なりと謂ふべく、余は彼等に告げて曰へり、此金は汝をして獨立を失はしむべきものなり。然れども已に之を許せし以上、許應に何くに出づべき。若し撰擧權を授けしならばこの共和國の政柄は三四人のヨアンニスベルグ人に歸し、其政治は彼等の私腹を肥すに過ぎざるべし。トランスヴァール市民はヨアンニスベルグ共和國に屬せしよりも寧ろ英國の殖民たるに若かずと。

クルーゲルが實際家にして盖世の智慮を有するこの牧師の比にあらず。彼亦私腹を肥すが爲めに政治を行へり。一八八六年南阿共和国の収入は一百萬に下りしも一八九九年には二千萬に達せり。而して彼はジュームソン侵入に因つて得たる機會を誤る事なく、ジュームソン主従を英國に引渡して審問を受けしめたるに就ては自ら其寛大の處置を誇張すると共に、一方にはヨアンニスベルグの改革黨を掌中に收めて大利を占め、侵入より生じたる實際の損害六十七萬七千九百三十八磅三志六片を鑛主に要求せしのみならず、道徳上智識上の損害として算入せる一百萬磅を加へ、而して囚徒より科料として取上げたる二十五萬磅の差

引勘定をなさざりき。

彼果して南阿聯邦共和国の首長たらん事を望むとするも、如何せん政治家たるの資格に於て缺くる所あるを、何となればケープコロニー若くは自由國の商業家を慰撫すべき策に出でざるを以てなり。又其ヴェルトの百姓に人種上の偏頗を行ふ事に至つては自ら明言せし所なり。

クルーゲルはケープコロニーに對する、其生産品と工作品とに課税するに止らず、ヴァール河の船路を閉塞して其商業を妨害せしが如き、殆ど戰端を開かんとせし者なるが、彼は之に由つて和蘭鐵道には貿易事業を他處に轉ずる事を許せり。

又己れと血族を同する人種が來つてこの國に移住するや、最も緊要なる權利を與ふるを拒み、其オーレンツ自由國に對するも亦全く同一なり。クルーゲルは殊に實際家にして何事も私利上より打算し、其トランスヴァール國內に施す所の政治に至ても亦皆然らざるはなし。

ケープコロニーの一人はステイウン氏に語て曰く、然れども激昂の時機に於け

る人種感情の及ぶ所は殆ど測るべからず。吾人社會上の關係に於ては、通常人と人との間に成立せずと雖、唯人々互に結合せる際に至つて甚だ激烈を致すと。凡そ異郷に在るに當つては、英人は英人に與みし、米人は米人に與みず。血は水よりも濃し。是に於てか和蘭人は互に相結合す。クルーゲルの其實験せる朋友に處し、猜疑せる仇敵に處るや、兩つながら其方を誤れり。而して彼が之を自覺すべき時機に遇ふは、必然なり。ジエムソン侵入より三ヶ年間會つて改革黨審問に就て彼を助けたる者は、漸く其愛を失ひ疎外侮辱を被むるに至れり。

余は從來和蘭人に就て述ぶる所あらざりしが、共和國に於て不人望なる此民族より甚しき者なし。然るにクルーゲルは之に與ふるに最も豊富なる財利を以てし、之に授くるに最も顯榮なる官職を以てし、ボアの牧畜者の如きは概ね政治上己れの權力を強うするに足らざるを觀て、和蘭獨逸より冒險者流を輸入し之を富まし之を庇護せり。

余の聞く所に據れば、ヴェルトの農民の如き全くトランスヴァール以外の事情に通

ぜず、其避遠に住める者に至つては、戦争の以前萬一致直ちに英國を攻撃すべき事を決議し、之を政府に迫りし云ふ。之を以てその無識の一斑を窺ふに足る。然れども、此人民は何に由つて其智識を得たるや、其言語は他國民の文學と關聯を絶ち、自己の文學を有せざるのみか、和蘭語をも讀む能はず。而して新聞紙の如きも極めて僅少なるが故に、之が爲めに誤らるゝの憂なきと共に、又啓發せらるゝの利益なく、其唯一の書は即ちバイブルにして、彼等の最も意に留るは神擇の人民なる猶太人戦争の日曆のみ。

富裕なる人民は概ねジエムソン侵入に激怒せし結果、トランスヴァールの事に就きては、今なほ百事辯疎を試むる傾向あり。即ち英國的教育の制限は、其和蘭人を亡ぼさんとせし暴舉を思ふ時は、自然の事と視做さざるを得ず。非常の軍備は、既往の事件を思ふ時は、十分道理ありとなさざるを得ず。要案の建設は、普通の警戒のみ、公會の禁止は、勿論不可なれども、亦決して怪むに足らず。抑、彼等はこれ等の事を以て一八九五年より六年に至れる改革運動の結果なりと誤想するも、これ其結果にあらずして原因の一なる事を知らざるや。

ザムトは新聞雜誌に乏しかりしも、巡回報告の機關に富み、之を派遣して同情を振興し、都邑村落より隔離せる人民に不實の報道を傳布せり。英國は從來南阿共和國の内事(所謂獨立)に干涉を企てたる證據なく、其市民を保護すべき立法を協商するに務めたるのみ、これ他の友邦政府に對してなす所の者と異なる所あらず。

英國政府がクルーゲルの所爲に就て怒りし所のものは、クルーゲルが叫かに獨逸皇帝と同盟を求むるの意志ある事なり。トランスヴァールに於て英國人の利益を代表する人々の政治上及び社會上の權利を拒斥する事なり。ポータル及びケイフ・コロニーに擾亂を起さんとして已まざる事なり。蓋し英人は此土地に數百萬金を放資し、礦産にして丘陵多き不生産の地を一變したる功績あり。又トランスヴァール、ケイフ・コロニー間の公道は英國がトランスヴァールより讓與を得たる鐵道の利益を増進すべきものなるに、クルーゲルが之を妨害せしが如き亦英政府の怨を買ひし所なり。而してケイフ・カイロー間の鐵道計畫が實施の時に方り之に反對するが如きは個より豫想するに難からざるなり。

是等の争點を商議するが爲めに英國の南阿高等委員サー・アルフレッド・ミルナルと大統領クルーゲルとは一八九九年プローム・フォン・タインに會見せり。クルーゲルは已むを得ざる事情の下に此會見を承諾せしが、これ恐らくは會見せざる時は何等の得る所なきも、會見せば何物か得る所あらんとの希望に出たりと謂ふも豈に亦誣言ならんや。而して彼は終に與る所なかりき。又得る所なかりき。

一八九九年の夏を通じて英國とトランスヴァールの罅隙は益々深く、英國政府は和蘭種阿非利加人を鎮撫し、以て英國の保護を望める王黨の心を固うし、併せて緩急に應ずる爲めにケイフ・コロニー、ナタールに送兵すべき事を促されしも、敢て大兵を送るの心なく、尙外交を恃んで事局を了すべしとせり。これ蓋し半熟の出師準備に因つてトランスヴァールの戰意を挑發するを恐れたり。抑英國が阿非利加に於ける王黨を等間に附し、其權利を顧みず、其義務を怠り、其約束を忘れたるは、茲に始まらず、又其阿非利加領に於て博愛心に感溺して自家の領民を不問に附したるも亦茲に始まらず。

南阿共和國の住民と之に同情を寄する人士は英國々會がジェームソン侵入の調査をなせることを咎めたるが、之に因つてクルーゲルは國會の調査は何等の結果を生ぜざるべき幾微を看取せしかば、強ひて英國の求めに應じ、ヴァルクスラードをして産業委員を撰ばしてヨアンニスベルグの苦情を視察せしめたり。蓋しヨアンニスベルグの苦情の如きは從來彼が屢無視せし所なり。産業委員の調査は最も細心を極め、又仁慈の精神を以て種々なる手續をなせしが、其結果は全くクルーゲルの意に満たず、報告書のラードに提出せらるゝや、議場に一大暴狀を現じ、大統領は斯くの如き報告に署名したりとてその賛成者の一人なるスカルク・ハルジャルを嚴譴し、呼ぶに叛賊を以てせり。是に於て産業委員の調査を廢棄し、更に柔軟なる員を撰して之に代へたり。若し戦争にして一ニヶ年延期せられたらんに、必ずトランスヴァールに反動ありしならん。何となればクルーゲルと其内政が漸く人心を失ひたればなり。然るにチャムペレーンの君主なる語を重複するや、乾燥せる木片にマッチの火を點せしが如し。

余はこれまで專賣の弊害に就て言ふ所あらざりしが、此弊害の中殊に甚しきをダイナマイトとなす。之が爲め鑛業會社に賣渡す所の價格は約二百バルシメントに上れり。

吾人は吾邦に於てトラストに反對の言を出す。然れどもトランスヴァールの如くトラストの夥多なる事は吾邦に見ざる所にして、一八九九年の政府目錄に據ればダイナマイトに於て、鐵道に於て、酒精に於て、鐵砂糖、羊毛、煉瓦に於て、陶器、紙、蠟燭、石鹼、カルシウム炭火物、石油、マッチ、ココア、酒壺、ヂャムに於て、皆トラストあり。

是等の細目に關しては更に詳述するを須ひず。請ふ戦争に關する事柄を説かん。クルーゲルは如何に之をなさざるべきやの術を解せる人なり。又改革委員の囚徒に對せし舉措の如く如何に大度を示して人を窘しむべきかを知れる人なり。乃ちそのサーアルフレット・ミルナルと協商せし時の如き讓與をなして平和を保たんと欲するの態度を執り、撰擧權擴張の提議をなし、其中にはウットランドも包括せしが其提議は一として條件を附せざるなく、彼は必ず英國政府に承諾せられず、又決して承諾せざる事を知れり。而して其條件は第一、女王が主權を辭

すべき事これなり。第二、ウイットランドルにして撰擧權を望まば先づ歸化の志願を通告し併せて其政府に對する臣民の關係を絶ち、七年若くは五年無所屬の市民として歸化の命を待たざるを得ざる事なり。而して此歸化も亦條件を有す。斯くの如くにして初めて投票權を得たるも大統領を撰擧するの權なく、只ウオルクストラードの下院議員を撰擧するを得るのみ。

英軍の南阿に動くや、クルーゲルとオーレンジ自由國の大統領とは怨言を吐けり。然れども其兵數は以て事に應ずるに足らず。而して其行動は甚だ遲緩を免れざりしかば、ナタル及びケープコロニーの王黨は本國の保護に冷淡なるを見て失望せり。蓋し彼等はクルーゲルの計謀を揣摩して或は其襲撃に遇ふべき事を豫想せしなり。九月二十五日クルーゲルはボア軍隊に動員令を發して之をナタルの疆上に聚め、トランスヴァールに於て苟も兵器を帶ぶるに堪へたる者は、盡く之にモーゼル銃を配布し、如何に年少の者と雖亦皆經驗ある射手となりしが、これ最後通牒の發せらるゝ三週日以前なり。但し通牒は此時已に成りたれども、只未だ公付せられざりしのみ。

十月九日クルーゲルは海底電信に因り最後通牒を倫敦なる英國殖民大臣に送て曰く、若し己れの提議(英國は之を以て不可能にして且つ屈辱なりとし已に拒絶せし者なり)が四十八時間内に承諾を受けざる時は開戦に及ぶべしと。但し開戦の日に至らばオーレンジ自由國はトランスヴァールに與みせんとす。これ英國と争端あるにあらずと雖、其人種上の利害南阿共和國と同一なるが故なり。四十八時間の盡くるや、ナタル疆上に準備せる八千のボア兵は最新のクルーヅ、グループ等の大砲を携へて國疆界を出て英國の領土に侵入せり。

若し人あつて吾人の家に侵入せば極力之を外に逐斥するの外あらざるなり。然るに不幸にして英國は敵對動作に因つて戦端を開くに就き内地の民心を顧慮するに過ぎたり。

ボアの計畫はナタルに二軍を突進し、英國が抗拒の準備をなすに先だつて、沿海の地と良港ダルバンを奪はんとするに在り。而して殆ど其志を遂げぬ。

トランスヴァールのウイットランドルにして従軍を欲せざる者は外國に逃れ、十月の初ケープタウンに輻輳せり。彼等は國疆の鎭夫にして一の會社を組織せず、一

の株式を所有せず、一の財産を有せず、只、一百磅の金を得て其小屋を設け其女子を嫁せんとするに過ぎず。而して今や其業を失ひ、家畜車に混載し、晝は熱日に曝され、夜は寒風に吹かれ、飢餓を忍んで此宿に來れり。鑛山に服業せし土人の如きも亦家畜の鞭打に遇へると一般家畜車に乗り白人より一層稠坐してケイブ・コロニーに送られたり。

英國政府とトランスヴァールと協商のなほ酣なるに方り、重なるボア人が家族の安全を謀り、之をケイブ・コロニーに送りたる者多かりしは亦た奇と謂ふべし。各聯隊士官は處々の殖民地より、印度の諸王國より、相率ゐて英國政府の下に集りカナダ、ニュージラランドも亦補充兵を出願せり。英國政府は最初甚だ之を歡迎せざりしも、暫らくして方針一變し、南阿及びベキアナランドに義勇兵を募りてキンバレー、メロフキング間の鐵道擁護に充て、ナタルに於ては帝國騎歩兵及び輕騎兵を新募せしが、これ等は大抵ヨアンニスベルグの亡命者なり。抑、英國に於ては二萬五千の豫備兵あり。これ皆會つて軍隊に服務し、必要あらば復び其隊に歸籍するの條件を以て年金を受くる者なるが、其内の八割は直ちに其所屬の聯

隊に集り、舉國慷慨事に當り、如何なる寒村僻邑と雖、ボア戦争に利害を感ぜざるなし

幸にして開戦に先だち印度は英兵一萬二千をダルバンに派遣せり。而して英國政府は埃及より來ると印度より來ると將た西印度より來るとを問はず、凡て黒兵は之を用ひざる事に決し、又パシエートス、デューラス等の將校を排斥せり。此戦は白人の戦争なるが故に、蠻人は勿論黒兵は縱令訓練を経たる者と雖、復た之を用ひざるの精神なり。

英國に於ては何人も戦争の速に終るべき事を信ぜざるなし。其然る所以は南阿共和国は四隣の間介在せる小國にして、其人口は倫敦の近郊若くはブライトン市の上に出でず。英帝國の富強を以て之に臨む、縱令數週日の短日月にあらずとするも、數ヶ月にして之を撲滅するを得べきは理の見易きものなればなり。然れども此小國は巨資の費すべきあり。外國の同情を得べき道あり。而して其軍隊は小なりとは云へ、多く外國人を雜え、ボア軍に服役したる米國一鑛夫の計算せし所によれば、戦士の數十萬に達す。又トランスヴァール大尉シーエルの率ゐたる

獨逸の義勇兵あり近代の戰術を以てボア人國有の兵法を捕へり蓋しボア人の兵法は最も其國情に適したる者にして交戰の初め英兵は全く之を解せざりしものなり。

ナタルの戰爭に於てボア人を指揮せし者は將軍ジョーベルトなり夫れナタル殖民地はボアが土人の苦戰して得たる所なるに之を奪はれたる事情に至つては恨骨髓に徹し未だ會つて忘れざるなり。

十月十二日オーレンジ自由國の兵はナタルの東南より入りトランスヴァールの兵は北疆より入るこの時に方りクロンジューはベキアナランドに進みキムバレイ、ザリイブルグ、メーフキング等に威を輝かせり但しボアの政治は英軍の勢力なほ微弱なるに乗じて之をナタルに包圍し其背後の鐵道交通の便を絶ち之と共にグレンコー、ダンディーに屯するベン・シモンズ將軍の兵とサー・シー・ジ・ホワイの率ゆるレディ・スミスの本軍とを遮斷するに在り。

レディ・スミスは逆透たる邱陵之を繞つて俯瞰するが故に決して防禦上の好地形にあらず然れども鐵道の交叉點なるが故に此地を以て衣食彈藥の屯倉と定

めたるなり。

此地にレディ・スミスの名を附したるはサー・ハーティ・スミスの夫人を尊ぶ所以なり。サー・ハーティ・スミスはケープ・コロニーの太守としてナタルを治めたる時最も令名あり其少き時副官となつてバダヂスの攻陥に與り西班牙婦人母子兩名を救ふて之を保護し裝資して英國に送りしが後其女兒と結婚せりこれ即ちレディ・スミスなり。

一八九九年十月二十日、サー・ダヴル・シモンズ將軍の率ゐたる四千人の兵はナタルの北部に於てボアの軍に遇へり將軍はテラ戰役に於て印度に其名を著はせし人なり英軍は其慣用の兵略を用ひ巍峩たる丘陵を襲撃して利を得たるが彼は其敗りたる所を以て敵の全軍と思ひしに何ぞ料らん其分遣隊ならんとは乃ちコック將軍は全軍を率ゐて俄に至り英兵を驅逐して騎兵一中隊を降しシモンズ將軍は致命傷を負へり。

次はエランドスラートの戰にして此役やコック將軍致命傷を負ひ獨逸砲兵指揮官シーエルは捕虜となれり埃及戰役に有名なるフレンチ及びハミルトンは此

戦を指揮せしも、その任務は偵察をなすに在り、鐵道を保護するに在り、エランド
 スラートはレディースミスの東北十七哩に當れる一小村にして停車場の在る所
 なり。然るに數日以前ボア人は陰溝を破壊し、列車を拿獲し、レディースミスとダン
 デーとの交通を斷絶せり。是に於てサー・ジョージ・ホワイトは送るに援兵を以てし、
 偵察軍は之が爲め三千人に達し、砲十八門を有せり。援軍の中に最も有名なるは、
 ゴルドン・ハイランダルなり。英軍は例の如く丘陵を攻め登りしが、此丘陵は群峯
 の連接せる者なる事を發見せり。ボア人は善く銃を操りしも、其破裂彈は甚だ利
 ならず、滿地皆磊砢たる圓石にして其背後には各ボアの射手あり。帝國輕騎兵及
 ビハイランダルは拔群の働きをなし、適、大雨注ぐが如く雨衣を透すに至り、砲兵
 の馬は殆ど如何ともすべからざる程なりしも、なほ進んで最後の攻撃をなし、士
 官は次第に陣歿するに拘はらず、兵士は驀進して止まず、一峯一峯漸次我手に歸
 せり。然るに無數の飛丸は空中に充ち、石を碎き、芝を削ぎ、其勢猛烈なりしも、遂に
 進みて最後の峰頂に達せり。其下はボア人の棄て去りたる陣營の在る處なり。
 此處に至るまで行軍に偵察に準備に十二時間を要し、攻撃に半時間を費せり。

今や終日戦に疲れたる兵士は終夜負傷兵をボア人の陣營に運し、岩石間の滑々
 たる路をば雨中光暗さ一二燈を便にして、一前一却頗る艱苦を極めたり。
 此夜戦争の慘憺たる方面に關する寫實はステューヴンの手に成り、最も人を驚か
 すに足る。余は其、ケープタウンよりレディースミスに至るより之を轉載すべきな
 れども、太だ長くして茲に收むる能はざるが故に之を省けり。
 彼は云ふ、吾人の英國一醫士は欣然として其職に勞し、剪刀を操つて傷兵の衣服
 を切開して患部を診察し、巧に細帯を施し時々刻々人毎に手宛を行つて盡力せ
 り。

トム・ミアトキンスが敵味方の別なく診治を勤めたる事は一生忘却すべか
 らず。午後岩背に伏して彼を狙撃せんとせし敵にも、彼の斷金の友を射殺せし
 敵にも、末期の水を與へ、末期の介抱を與へ、末期の慰藉を與へたり。
 濕氣と寒氣を防かんが爲めに少數の人焚火の周圍に坐し、負傷せざるボアの
 捕虜も之と共に車座をなし、傷兵に苦痛を覺えしむるが如き一語をも發せざ
 りき。トム・ミアトキンスは午後に於て英雄たり、暮夜に於て紳士たり。

之と同時に敵の醫士をも亦忘れざらんことを要す。吾人は敵の傷兵を見る毎にわが傷兵と同じく之を陣營に運びしが、中にボア將軍の師父にしてトランスヴァールの行政員なるコック氏あり。黒のフロックコートと黒のツポンを着し、丘上に臥せしが、簡率なる態度を以て勵聲呼んで曰く、余を扶けて丘を下り、天幕の中に臥せしめよ。余は三弾を受けて傷けりと。この外又獨逸の客將シーエルが股に一弾を受けて、其最も力を用ひたる二門の砲側に倒れたるあり。ザルクスラーの議員四名の内三人の擧旗者あり。二人の檢察官あり。其外何人の在りしかを知らざる者は只天のみ。わが醫士が彼等に達するや否や、彼等の醫士も亦來れり。

英國軍隊がエランドスラートよりレディースミスに歸ると引違へに、グレンコーに圍ひたる一隊はダンデーより到達せり。然るにボア人は新に援兵を得たりしかば、シモン將軍の負傷後之に代れるユール大佐はレディースミスの本軍と遮斷せられん事を恐れ、倉皇ダンデーを退き、輻重彈藥を放棄するに止まらず、瀕死の將軍をも棄て去りたり。而して大雨泥濘を犯し三十二哩の間息をも繼かず、辛う

じてレディースミスに達せり。

聞く處に據れば、大統領クルーゲルがサーアルフレット・ミルナル及びチャムバレンとの協商を延引せし所以は、宣戰の前に雨期の來らんことを望みしが故なり。果して其目算の如く本役の初に於ける戦争は毎も大雨に際せり。

然るに十月三十一日の午前レディースミスの諸營は敗報に接せり。新に加はりたる一中尉の外士官としては、軍醫監督部長の二人、別に二十五人の中五人の士官は食場の天幕内に於て朝食を喫せしが、かれ等はロイヤルアイリッシュ・フュージリエルの六隊より離れたるものなり。此時余の如き婦人をして感慨に堪へざらしむる事は、右の天幕の中央に防水布を以て包みたる諸士官の書簡あり。これ其朝七千哩を隔てたる故國の母より妻より到着せしものなるに、之を受け取るべき其人は方にプレトリアの競馬場に設けられたる俘虜の營舎に赴くの途に在り。余の引く所は重に、ゲーブタウンよりレディースミスに至るの中に載せたる隣むべきステーションの最後に於ける數通の書簡これなり。彼は六週間の後腸熱に罹り、砲聲の轟ける最中レディースミスに死去せしかば、校訂の暇もなく又公刊する

が爲めに彙輯するの暇もなかりしなり。之より先き十月二十九日日曜の午前、一千の兵をニコルソンズ・チャックに送つて之を取らしめんとせり。ニコルソンズ・チャックはレディ・スミスの西北七哩に當れる諸丘の間を通ずる山路なり。この軍の險を冒して進むや、ポア兵が一千人も頭上に聳ゆる絶壁に屯するを認めたり。而してわが軍の隊伍忽ち亂れたるはポア人の銃撃に由るにあらず。幾塊の大石が懸崖より行列の間に墜落し、之が爲め彈藥の曳ける騾馬は驚いて逸走し、後に控えたる砲兵の騾馬に唐突せしかば、これ亦驚いて奔走に及び、これが爲めに混亂を致せしなり。

分遣隊を率ゐたる士官は其隊が大砲を有せず、只彈藥を携帯するのみなるを以て、レディ・スミスに歸るを欲せず、一座の平頂丘に逃れ、固く自ら守つて援兵を待てり。而して此地位を保たんとせば、一萬の兵を要するに、今や現兵一千に過ぎず。敵は二千の多數なり。愛耳蘭人及び少數の英兵は本と生死を顧みざるが上に、今やその陣せる丘陵が四面敵を受くるを見、苦戰力闘、殆ど其彈藥を竭し、銃劍を揮つて敵に當る者あるに至れり。然れども統率の任に當れる士官は目的も立たざ

るに空しく、勇卒の生命を失はしむるに忍びず、終に白色のハンカチーフを振れり。

一千人の内最も精良なる兵士と其武器、彈藥及び四門の山砲は敵の捕獲する所となれり。茲に至つてポア人はダンディーとエラントスラートの役に酬むたり。而して今や敵の捕虜を待つに懇切を以てし、英人がアトキンスに於てその傷兵を介抱し、その捕虜を慰藉せしと同一の態度に出で、彼等は盡く自家の水筒より水を酌て之を與へ、その鞍上の毛布を引放して之を援け、而して自らヴェルトの内に睡れり。已にして彼等は樹木の下に於て悲哀なる感謝の神歌を歌へり。然れども著しく昂然たる容子を表はさざりき。

サー・ジョージ・ホワイトは此際電報を本國の政府に發し、先づフー・ジョー兵、ウー・シエスタ、兵の行爲を稱賛し、自ら敗戦の罪を負ふて曰く、虚偽の報道に誤られて、ニコルソンの進軍を命じたる者は自身の外はあらず。故に己れ獨り敗北の責を負ふべき者なりと。此明白、俠勇なる舉措は戰役中最も嘉尙すべき事にして、深く外國人を感動せしめしが、佛人の如きは殊に然り。

ボア人が其捕虜に對せし愛護懇切の著しかりし所以は一方に其反照ありしが故なり。即ち政府は雇吏を僻地に派して誣報を傳へしめ、之が爲め人民は英人が其手に歸したる負傷の俘虜を毒殺すべしと信じ、モッダー河上に英兵と戦ひたるトランスヴァールのボア人の如き之を信ずる最も深く、其虜となりし者は概ね英人の給せし飲食を口にせず、或る時看護人が傷兵に粥を與へんとて之に近づくと、傷兵は脚を以て之を蹴り、叫んで曰く、毒殺人と。

斯くの如くにして無智の人民は非常に英人を忌疑し、或時二人の従軍記者中一人は米人はロバルト卿がヨアンニスベルグを占領せしより間もなく其附近の溪間に至り、一人の蘇國婦人を見たるが、其夫はボア人にして方に從軍中に在り。此婦人は英人の目的がトランスヴァールの土地を盡く略取し、婦人の田宅も無論其中に在り、之をカッパルに與ふるに在る事を誣告せられたる者なり。米國記者は曩にクロンジエの車陣に於て之と同一の事を耳にせり、即ち其處に在りし婦人は問ふて曰く、彼等は我々の家屋を焚くべきかと。米國記者は且つ答へ且つ問ふて曰く、卿等が窓戸より彼等を射撃するにあらざれば、而して何人が右様なる事

を卿に語りしかと、一人の婦人は曰く、余は新聞紙にて之を讀めりと。一人は曰く、わが指揮官斯くの如く告げたりと。請ふレディースミスに復らん、其攻圍と砲撃とは一八九九年十月七日を以て始まり、一九〇〇年二月二十八日を以て終れり。

ボア人は凡て附近の丘上に山砲を据えたるが、其中最も著名なるはロングトムこれなり。何人も其製造所を知る者なく、其黒色の火薬を用ひたるが爲めに老朽の物と視做され、英兵少も之を怖れず、看守を置いて砲烟の揚れる時合圖を與へしめ、彈丸の來るべき事を豫測せしが、市中の者は常に十分之を避くるの暇ありき。

なほフィドリングナムニあり、ソフティングビリーあり、サイレント・シーサンあり、輕砲の中にはニコルソン・ネックに於て英人より鹵掠せし者あり、砲の大なる者に至ては或は六千ヤードの射程を有するに拘らず、レディースミスの陣中には斯くの如き遠距離に送彈すべき巨砲を有せず、只ダルバンより輸致せる二門の海軍砲あり、海軍員之を取扱へり。

ボア人は甚だ進取的にあらず。平地に於て敵を攻撃せしは全戦中僅か一回に過ぎざるが如し。而して其善く動くや驚くべく、平項丘の麓に其馬を繋ぎて丘上に攀援し、圓石の背に身を潜め、鬆石を身邊に繞らして壘を造り、其端より窺つて銃を敵に擬することなほ鹿を狩る時に於けるが如し。即ち其闘法は少しも獵獸の法に異らず。而して英兵は未だ曾つて之に慣れず、従つて敵より暗誦せられたる経験なし。然れどもステイヴァン氏は曰く、吾人は今やボア人の獵法を知つて自ら之を行ふなり。わが歩兵は已に耐忍に於て狡智に於て彼と齊し。伏兵に撃たるゝにあらざれば伏兵の用を知らず。今や英軍も経験に因て伏兵を有すと。英人の利益より言へば、ボアがレディースミスを圍むに大軍を用ひんことを欲す。何となれば若しかれ此地を棄つるなほターム大佐がダンディーを棄てたる如くならんには、一大積倉は敵手に歸すべきが故なり。レディースミスの成兵はダンディーの軍に因つて勢力を加へたりと雖、ニコルソン、ネグの敗後英人は僅々二回美事なる突撃をなしたるのみにて、専ら持重固守を事とせり。

レディースミスに在りし者は倦怠無聊に堪へず、ステイヴァン氏は一新聞紙を興し

倦怠の状を寫し出し昔話と頓才とを以て紙面を掩へり。爆裂彈は時に市内に落下せしも破裂せざりしが故に殆ど騷擾を來すことなく、砲撃を受けたる最初の二週日に於ける損害は、一名の歐洲市人、二名の土人、一頭の馬、二頭の騾、一輛の車、六頭の馬なり。而して空屋の潰崩に因つて負傷せし者も甚だ多からず。彼等は多く防備を設けたる庇難所に居り、或は地下室に住せしを以てなり。

守備隊は未だ全く市中に封ぜられざりしなり。レディースミスの周圍丘陵の麓には廣平の地あり。此地はボア人が只砲彈を注ぐのみにして未だ敢て過ぎんとせざりし處なり。守備隊は此處に屯營を設け、暫時馬及び其他の家畜を牧養せり。又イムピースプリットに於て野戰病院を設け、一大丘陵を以て之が蔽となし、赤旗を立て、之を保護せしが、これボア人が赤旗を敬重せしが故なり。然るに悲しむべきは此病院に於て傷病の平癒せし者も其強壯を恢復すべき滋養物を缺けるが爲めに死亡せし者少からず。甚しきは一日平均十五人の多きに達せり。

已にして英國政府は漸く事跡の容易ならざると其準備の不十分なるを知り、サーレドヴァルス、ゼーラルを以て南阿征討軍の元帥とせり。將軍は舟に乗じてケ

イブタウンに向ひ、一八九九年十一月の初め此地に上陸せり。然るに土民が將軍に對せし態度に至つては二説あり。一は歓迎となし、一は(佛國新聞)嘲笑となせり。抑、サー・レドヴァルスが阿非利加の戦役に勤めたるは此時に始らず。嘗つてデューラストの戦争に於て要職に立ちし事あり。又、テイラーの役に於ては印度に功名を輝かせし事あり。將軍は力戦者なり。人を御するに長ぜり。英國はグレンコー及びエラシドスラートの二戦に自國の軍隊が勇を見はせしに係らず、何等の利する所なく、一は空しく退却し兩つながらレディースミスに盛められ、最初の目的たるナタルの防禦に應ずるの暇なしと聞き、頗る將軍の任命を可として將來の望を屬せり。

サー・レドヴァルス・ピョーラルはデヴォレシヤに於ける田紳の子にして、兄弟七人姉妹六人あり。彼は即ち第二子なり。兄弟の一人に文學科學の好望ある一少年ありしが印度に於て虎の爲めに半身を啜はれて死せり。

サー・ロバート・ピョーラルは豫め作戰計畫を抱いて阿非利加に來りしも、其上陸するに及び兵力の十分ならざるが爲め之を實行する能はざることを發見せり。但

し其計畫は全軍をオーレンジ自由國の疆上に集め、雲霞の如き大兵を以てプロムフォンタインとプレトリアに向ふに在り。而して此計畫たる他日ロバート卿が用ひて以て功を成せし所のものなり。

ピョーラル將軍は其未だ阿非利加に達せざるに方り、已にナタルに在る部隊が該地を守るに足ることを心算せり。然れどもナタルの防備なき國疆は六百哩の長きに亘り、而してトランスヴァールの良將精兵は將に之を侵さんとし、之に當るべきわが兵はレディースミスに封鎖せられ、是に於てナタルの北部は擧げて敵手に落ち、擧國全殖民地の王黨は周章せり。英國政府は曩に縱令帝國の全力を用ふるも之を保護すべき事を約したるに、此時に至るまでも救援の兵來らざりしかば、其首府なるピータルマリツブルグ、其海口なるダルバンは纔に義勇兵を以て之を防衛せしのみ。此義勇兵は熱心にして勇猛なりしと雖、兵事の經驗を有せざる者なり。故に其初め十分の軍隊を備ふる者と見做なされたるナタルは反つて南阿中最も速に援兵を要し最も先づ顧慮すべき處たり。

サー・レドヴァルス・ピョーラルはその國の性質を解せり。是に於てポア人の利は山間

の戦に在る事を計り、直ちに自らナタルに往く事を決して曰く、
此擧たる實に最大難事なりしなり。余は其如何なる意義なるやを知れり、而して我軍は果して能くレディースミスに到るを得るや疑なきを得ずと雖、余は巨人なり、必ず自ら往くあるのみ。

開戦の以前何人もボア人を誤解せり、而して自らボア人の事に精通すると思惟せし者は其誤解も亦従つて大なりと。

サー・ダヴル、ベン・シモンズは曩に殖民地の指揮官にして最も計を運らすに適せし人なりと想像せられたるも、なほボア人の戦鬪力を過少視せり。サー・ジョージ・ホワイトと其參謀長サー・アルキバルド・ハンダルはシモンズの信任せし人なるが、ダンディーに孤軍を留むるを不可とし、頗る忠言を試みたるが、シモンズは之に告げて曰く、此位地を退却する時はナタルの殖民を失望せしめ、而して政府に不平を抱かしむる所以なりと。

二人は之に従へり、然れどもサー・ジョージ・ホワイトはシモンズ將軍と其兵を分ち、一半をレディースミスに留め、一半をダンディーに送れり、然れども究竟秩序的にダ

ンディーを放棄するは俄然退却するに比して得策なる事を發見せり。
サー・レドヴァルス・ビーラルはガタクル將軍とポール・メッシュエンとを留めてオーレンジ河上の行動を監視せしめ、己れはナタルに急行せしが、これ恰もナタルが危険に際したる時なり、今や茲に四ヶ月に亘れるレディースミスの攻圍を詳述するの餘地なきが故に、余は只ビーラル將軍が之を救ふが爲めになしたる事實を擧げんと欲す。レディースミスの拒守宜しきを得たる爲め、敵將ジョーバルト將軍の作戰計畫は晝餅に歸せり、何となればジョーバルトは初め四ヶ月を以てナタルを覆さんとせしに、この間圍城の爲めに抑留せられ、而してオーレンジ河上のボアに合すべき一萬八千の兵は空しく小都會の側に屯して用をなさざりしを以てなり。乃ち英兵は失望の地に在り、時として又敗戦を免れざりしと雖、なほ未だ全く機會を失ひたる者と謂ふべからず、唯其勇兵は往々山腹に死し、其病院に在る者は銃丸、爆彈に斃れ、否らざるも營養不足の爲めに死したる者反つて多きに居れり。

レディースミスをダルバン、ブレットリアに連絡すべき鐵道の間中に在るコンソ

イはボア人の略する所となり、エストコートより此地に發せる最後の列車はボア人の爲めに鐵道を破壊せられて襲撃を蒙り、之に乗りたる一百三十人の兵士は悉く俘虜となり、只傷兵二十六人のみは機關手室若くは炭水車に雜乗してエストコートに歸り變報を傳へたり。

チャルチルに其著倫敦よりプレトリアを過ぎレディスマスに至る中に於て慨然此事を記し併せてプレトリアに俘虜となれる顛末を述べたるが、余は今只其書を紹介するに止めんとす。

ビーラル將軍の到着するに至るまではナタルの形勢日に非にして、ボアの大军はデリランドを過ぎてナタルに入り、ナタルの人民は英國の恃むに足らざると、其廢止の近きに在るとに因り、大に驚慌を來し、終に其人種の本能に因りボア軍に従へる者あり。

已にして英國及び諸殖民地の聯隊は來つて英兵を援け且つ失望せる王黨の元氣を作興せしが、未だ幾何ならずしてサイ・レドヴァルスはナタルに着し、先づコンソニーに於て一戦を交え、茲に初めて如何にボア人と戦ふべきかを知れり、何と

なれば將軍の曩に阿非利加に於ける經驗は蠻人との戦争に過ぎず、今やこの兵法を用ひて前面の突撃を試みし處、空しく許多の兵を損して退却するに至りしを以てなり。

レディスマスは鐵道兩線の交叉點に當り、一線はトランスヴァールに通じ一線はオレンジ自由國に通ずる者なり。此點を外にして別に軍事上の價值あらず、宛もセマンと均しく盆底の如き地勢なりとは佛國一將軍の言なり。レディスマスの盆底の四端を繞つてボア人は遠距離砲を据え附けたり。

サイ・レドヴァルス・ビーラルの思慮する所は如何にしてテゲラ河を渡るべきやに在り。但し此河岸は南方低くして北方は頗る屹立せり。

而して此北岸には一萬五千餘のボア兵或は塹中に潛み、或は岩背に匿れ、河中の淺瀬は防備周到にして殆ど寸隙を留めず。蓋しボア人は天性心計に長ずるが上に其智巧を極盡したるが故なり。

抑レディスマスの圍を解くは一大難事にして、苟も勝たんと欲せば多數の兵を損せざるべからず。然れども英人は豈に敢て之を放棄するを許さんや。此市は包

圍を受け砲撃を蒙ること已に二ヶ月に渉り、糧食已に盡き、彈藥亦竭き、病疫は日に増し、戍兵は剛堅なりと雖、其辛苦は殆ど名狀すべからず、故に速に之が處分をなさざるを得ず。

ホテージョータルの渡よりテゲラ河を過ぐるの準備已に成り、軍隊はシヴェーの陣營を發せしが、右は歩兵一萬九千、大砲十六門を以て構成せし者にて、一軍はクラリウ、將軍之を率ゐ、一軍はサー・チャールス・ワーレン之を率ゐ、騎兵を指揮せし者はダンドナルドこれなり。

此軍はレディ・スミスの餓兵を救はんとせしが故に、牡牛車に糧食を載せて携帯せしを以て自然遲緩を免れず、其啓行は一月十一日に在り、ダンドナルドは遂にテゲラ河を渡り、前岸の一丘を占領せしが、全軍の之を渡りしは五日の後なり、但し此河は屈曲比なく、時として乾涸し、時として激流雷の如し。

然るに之より前大雨ありしが爲め水勢暴漲せしも、二條の舟橋を架し、時を経て軍隊を通ぜり、チャルナルは之を記して曰く、戦争は明日なり、今日は決して之あらざと然るにこれよりレディ・スミスに至る途中險阻なる平頂丘の横絶するあり。

而してこれ皆ポア人の占領する所に係り、其中の最も高さものをスピオン・コップと云ひ、アルクアット山と云ひ、此地の咽喉を扼せり。

一月十八日の戦は小なりしと雖、功烈著しく、騎兵は一丘を取り、二十四人を虜せり、英兵は戰場を闊して哀憐の心を動かし、敵の傷兵を環つて毛布若くは防水布を蔽ひ、以て降雨を防ぎ、又その馬鞍を釋いて枕となさしめ、己れの水筒食糞より水又はビスケットを給せり、チャルナルの言に、由ればフィールド・コルネットは一岩石の下に奮闘して終にその傍に倒れたるが、年已に六十を踰え、髪は灰色にして容貌は鷲の如く、短髭を有せり、其石の如き顔は沈靜なるも正義の爲めに死せる決心を表せり、ポアの俘虜は言へり、彼は降參を懇懇せし者あれとも凡て之を拒絶し、其左脛が彈丸に碎かれたるに拘はらず、死に至るまで發砲せり、これ當に然るべし、而して其死せるやなほ其夫人の書簡を手に握れり。

翌朝は大佐ウッドゲート兵を督してスピオン・コップを攻むべき豫定にして、帝國歩兵隊の大佐ソルニークロフトは攻撃の方針を擔任し、峻險を踰えて山南の支脈に至るを得、山嶺を守りたるポア兵は之が爲めに度を失ひ、十人は死傷し、六人

は月下の鬼となれり。英兵は地歩を固めんと欲せしも丘形甚だ便ならざりし處、天明くるや敵は猛烈の爆裂彈を放ち、ウードゲート大佐は負傷に及び、ソルニークロフト之に代て兵を指揮せり。但し大砲あるにあらざれば此丘の守り難き事は此丘に登りし者の凡て知る所なり。茲に於て大佐ソルニークロフトはチャルチルをワレン將軍の處に遣はして大砲を要求せしめしに、陸軍技師は以爲らく斯くの如き高所に大砲を引擧ぐることは殆ど不可能なりと。而して海軍の共働隊は之を試みんと欲せしも時已に後れ、ソルニークロフトは上官の命令に接せざりしかば、獨斷を以て退却するに決し、部兵は徐々意を用ひて丘を降り、スピオン・コップの戦は其局を結べり。

余は此事に就き武人界に起りし大爭論を洩らすを得ず。又ロバート將軍が陸軍省に致せし通信を掲ぐる能はず。思ふに將軍は此通信を發表するの意なかりしならん。蓋し皆ピニラル、ワレン、ソルニークロフトを咎めたるものなり。チャルチルは陸軍省の倚子に安坐して出征の諸將の失計を罵倒せし語を擧げ、且つ曰く、然れども英人は須らく記すべし。此諸將は到底勇敢にして能力あり、貴ぶべき紳

士にして、多數の人が不可能となせし所、人力に於て最大難事たる所の者を遂成せんとせし人なり。

軍隊は復びテグラー河を過ぎ舟橋を撤し、それより一週日を過ぎたる後、ピニラル將軍は軍隊に告ぐるやう、彼等は一日も早くレディ・スミスに達せざるべからず。而して將軍は自ら之を率ゆべく、之に就ては確たる成算を得たるが如しと。曩にスピオン・コップに進むに方り、一千六百の兵を失ひたれども、今や援兵を得て其數は従前の失を補ふに足れり。

是に於て二月十四日軍隊は復た河を渡りしが、此回は二ヶ處よりし、一はマンガルスドリフトを取り、一はブレイクフォントインを取り、ヴァールクランツに於けるポア人の地位を轉せんと試みたれど亦成らず。軍隊は秩序を保つて河を隔てたる陣營に退却せしが、これ實に第三回の退却なり。

次に又左面に於けるポア兵の地位を轉せしめんとし、其手段としてモンテ・クリストと云へる高丘を取るべき計畫を立て、以爲らく、丘上に大砲を備ふる時は以て河の別路を扼し、軍隊をしてレディ・スミスに直通の道を、くを得しむべき

なりと。

モンテクリスト及び之に連れるシンゴロ丘とは多大の損傷なくして之を占領し得たるが故に、軍隊はこれを以て殆ど勝利となせしに、何ぞ測らん計畫の齟齬に因つて大に狼狽し、ビエラル將軍は再びボティジェタルス・フェーリーとトリチャード・ドリフトに兵を返へせしが、兵士はモンテクリストの放棄を悦ばずして曰く、余輩はわが占領せし高地を下り、巨大の丘上に於ける巨砲を引放せり。テゲラの流域に於ける平頂丘の中に拘制せられ、宛もコリシニムに在るが如く、何れの處よりも狙撃を受くる者なりと。

果して其言の如く、愛耳蘭の三箇聯隊の如き堅忍力戦せしと雖、レディースミスの通路を得る能はず、我軍は再び河を渡れり。サー・レドヴァルスはなほ「再び試みよ」を以て格言となしたるや必せり。インニスキリーングの攻撃は最も偉なりしかども、守禦も亦視るに足れり。愛耳蘭人は丘陵を攀ぢ、壑深の敵と面々相接せしも、只其兵を亡ふのみにて何等の得る所なく、僅々一千二百人の兵中戦死せし者大佐二人、中佐三人、其他の士官二十人あり。

軍隊は茲に四回テゲラ南岸の障營に返り、又もモンテクリストを占領するの策を立て、劇戦五日にして纔に志を達せしが、これをビエタルの戦となす。英將は死傷者をインニスキリーングより運搬するが爲めに休戦を請ひしが、最後に待ちに待ちたる勝利は來りぬ。

レディースミスに達する道は開通せり。ポアは退却せり。夫れ然り、レディースミスを距る六哩以内に来りし兵は望を失へり。彼等は初より此地に入るに先だち一戦を豫期したるに、ポア人はマデューバの日に於てクロンジェアの降服を聞き已に退却の途に就きたればなり。レディースミスに於ては其放てる經氣球に因つて援軍の近きにあるを知り、ビエラル將軍の麾下は白幕を蔽ひたるポア人の車が北西に動くを見たり。而して望遠鏡を以て望めば高地のロングトム砲の上に一大剪刀の如き者を見たるが、忽ちにして此砲を引擧げ何れの處へか運し去れり。

ドリッドは如何にして幾碗の大石を丁字架の上に載せたるか、埃及人が如何にして二十四方尺の花崗石を三角塔の上に置きたるか、今なほ不思議に屬すれど

も、ボア人が竊に大砲の所在を昏ませしも亦殆ど之に譲らず。平和恢復の後吾人が金鏡を探求する時地中よりボアの大砲を発見するやも計るべからず。モルニングポストの通信員が其伴侶と共にレディ・スミスに騎行せし時、突然呼び止むる者ありて曰く、止まれ其處に行く者は誰なるやと答へて曰く、レディ・スミスの救援隊なりと之を聞くや數名の敵は林叢に蔽はれたる藪中より跳り出てたり。彼等は蒼顔にして瘦せ弱々しき聲を以て喝采し、中には哭する者あり。殖民地の騎士は鞍上に立ち、聲を限りに答辭を與へたるが、此時彼等は已にレディ・スミスの哨兵線内に入りたるを知れり。

三月三日救援軍は凱旋式を以てレディ・スミスに入れり。荷上に整列せし勇士は善く防ぎたる事を以て敵よりも賞賛を受けたる人なり。彼等は力の限り、場合相當の外観を修せしも、色青く身瘦せて細腰なるは如何ともすべからず。

ジョージ・ホワイトは參謀と共に麻馬に跨つて市廳の前に在り、其前面にはゴールドンの山人の喇叭卒が歡迎の曲を奏するあり。

函簿の第一はサー・レドヴァルス・ビョーラルと其參謀にして、二人共に騎馬なり。次は歩兵、次は砲兵、次は留守の任に當る愛耳蘭兵にして、兜上に綠色を蔽へり。最初は各、其班次を保ち、肅然として一語を出す者なかりしが、ゴルトン山人の先づダヴリンのフーシの兵を喝采するや、救援軍のデヴアン人は守備兵のデヴアン人の面前に来るや否や互に突進して其手を取り、喝采に喝采を重ねしが、當日に於ける最後の儀式はレディ・スミスの市民がサー・ジョージ・ホワイトに向つて感謝の辭を呈せし事なり。將軍は城守の艱難なる時日を通じて頗る市民に峻嚴の政治を施せし人なり。

是に至つて萬事其局を結了し、ボア人は已に潰散して足跡を留めず。而してレディ・スミスの周圍は新墳の累々たるを見る。